

# 大 友 府 内 13

中世大友府内町跡

第 53・57・59・60・73 次調査報告書

公共雨水管理設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

大分市教育委員会

# 大友府内 1 3

中世大友府内町跡第53・57・59・60・73次調査報告書

公共雨水管理設工事に伴う埋藏文化財発掘調査報告書

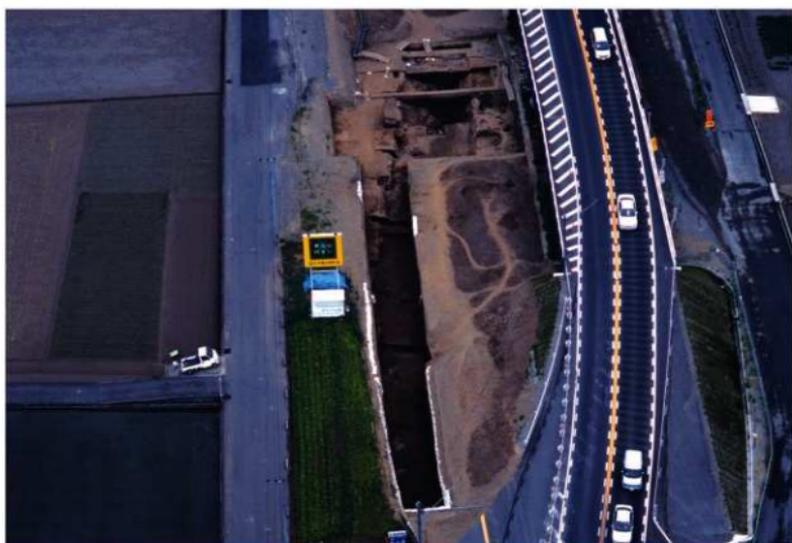


2009

大分市教育委員会



旧万寿寺を望む（北方向より）



中世大友府内町跡第 53 次調査区全景（南方向より）



中世大友府内町跡第 60 次調査区全景（南方方向より）



中世大友府内町跡第 73 次調査区全景 左（南方方向より）右（北方方向より）

## 序 文

大分市では、市内中心部における住環境整備のために桜ヶ丘から元町にかけて公共下水道敷設工事を実施してまいりました。当初の計画路線では、大友氏の菩提寺である万寿寺の一角を横断するようになっていましたが、可能な限り遺跡保存を図るために関係各課との調整をおこない、路線の一部を西側に迂回するようになりました。これにより最小限の記録保存のための発掘調査を行うこととしました。

本書は、工事に先立ち平成17年度から発掘調査を実施し、その成果をまとめた発掘調査報告書であります。調査は5地点となり、各調査区で多くの調査成果をあげることができました。特に第53次・第60次・第73次の調査区では、万寿寺の西側を区画する戦国時代の幅約8mの堀が確認されました。この堀からは、さまざまな国内産の陶磁器に加え、中国や東南アジアといった海外から運ばれてきた陶磁器も出土しており、国際貿易都市・府内にふさわしい成果を得ることができました。さらに、漆器椀や箸、そして当時食用していたと考えられる動植物の骨や種子も見つかり、府内に生活する人々の暮らしぶりも明らかになってまいりました。

こうした調査成果が、今後の学術研究ならびに文化財保護に対する理解を深める一助となり、さらには市民の皆様にも広く利用され、特色ある郷土の歴史学習に活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本遺跡の発掘調査の実施から本書の刊行に際し、ご理解とご協力をいただきました関係各位に対して深く感謝申し上げます。

平成21年3月31日

大分市教育委員会

教育長 足立 一馬

## 例言

- 1 本書は、大分市教育委員会が大分市大字上井東ならびに錦町3丁目において、公共下水道中央処理区板ヶ丘町線雨水幹線施設工事に伴い、平成17年から同18年度に調査を実施した発掘調査報告である。
- 2 調査は、大分市下水道部下水道建設課からの委託を受け、平成17年4月から同19年2月まで、大分市教育委員会文化財課が実施している。資料整理作業は、平成17年度から同20年度まで実施した。
- 3 遺跡名に関しては、その構成要素である町屋部分を「中世大友府内町跡」とし、これに「大友館跡」を加えた遺跡総体を「中世大友城下町跡」と呼称する。本書では、各調査回数については、調査次のまま中世大友府内町跡第〇次調査と表記している。略記号は、「町〇次」とする。
- 4 調査担当者は、第1章第2節 調査組織に記す。
- 5 本書の執筆は、池道千太郎・高島豊・若林善満が担当した。分担は、目次に記す。また、町57次・町73次の遺物については、山本哲也が、第2章 遺跡の立地と環境および町53次・町60次の金属製品・木製品・漆器を廣瀬潤子が執筆した。
- 6 本書の編集は、佐藤孝剛・若林・廣瀬が担当した。
- 7 第4章 自然化学分析については、下記の方々に執筆をお願いした。記して感謝を表す次第である。  
魯 雅瑛 藤村里香 平尾良光（別府大学大学院 文学研究科）  
金原正明（奈良教育大学総合教育課程文化財コース古文化財学准教授）
- 8 本書における遺構の写真撮影は、各調査担当者が行ったほか、町53次においては、国際航業株式会社が委託を受けて行った。
- 9 調査区の航空写真撮影は、大分市教育委員会の委託を受け、㈱九州航空が行った
- 10 町60次・町73次の遺跡掘削作業は、大分市教育委員会の委託を受け、アジア航測株式会社と国際航業株式会社が行った。
- 11 遺物写真撮影は、大分市教育委員会の委託を受け、㈱フォト・ワーク大分がデジタル写真撮影を行った。
- 12 本書における遺構の実測は、各調査担当者のほか、町53次・町60次においては、国際航業株式会社が委託を受けて行った。
- 13 本書における遺物の実測・拓影・製図作業は、各調査担当者のほか、上野美奈・小林ひろみ・澤田香織・河野かおる・小田山裕子（平成17年度）、長岡照実・重吉のぞみ・橋本智子・藤原彰子（平成18年度）、佐藤京子・倉増智賀代・末永裕香・宮本博子（平成19年度）、秋山かおる・稲徳美香・佐藤良子・中山麻理子（平成20年度）が行った。また、一部を㈱大成エンジニアリング・雅有限会社に委託して作成した。
- 14 出土遺物・記録資料は、大分市顕徳町文化財資料室（大分市顕徳町3丁目2番43号）に収蔵・保管している。
- 15 発掘調査及び報告書作成に際して、下記の方々に指導・御助言を頂いた。記して感謝を表す次第である。  
伊藤晃（中近世備前焼研究会会長）、小野正敏（人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部考古研究系教授）、大藪由美子（京都大学霊長類研究所）、垣内光次郎（石川県埋蔵文化財センター）、河原純之（前川村学園女子大学）、後藤宗俊（別府大学）、坂井秀弥（文化庁文化財部記念物課）、坂本嘉弘（大分県教育庁埋蔵文化財センター）、渋谷忠章（前大分県立歴史博物館）、白石美紀（中国陶芸美術館）、鈴木裕子（豊島区遺跡調査会主任調査員）、多比羅菜美子（財団法人根津美術館）、西田宏子（財団法人 根津美術館）、濱田 穰（京都大学霊長類研究所）、松井 章（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺物調査技術研究室室長）、三笠景子（東京国立博物館）、森村健一（堺市立埋蔵文化財センター）、山本亜由美（京都大学霊長類研究所）、大藪由美子（京都大学自然人類学研究室）、吉田 寛（大分県教育庁埋蔵文化財センター）  
（敬称略・五十音順）

## 凡例

- 1 本書に用いた方位は、すべて座標北（G.N.）である。また、座標地は、国土調査法第2座標系（旧座標）による。
- 2 遺構略号は、次の通りである。  
SB：掘立柱建物、SA：柵跡・柱穴列、SE：井戸遺構、SF：道路状遺構、SD：溝状遺構・堀跡、SK：土坑、ST：墓域、SP：ピット・柱穴、SX：性格不明遺構
- 3 調査に関しては、大分県教育委員会との整合をはかるために、調査指導者会を開催し、調査の方法についても、可能な限り、共通理解の中で、進捗させるように努めている。
- 4 第2章 遺跡の立地と環境および遺物の編年・分類・説明は、以下の文献を主に参考とした。

大分県教育委員会埋蔵文化財センター 2005～2008年『豊後府内』1～11

大分市教育委員会 2002～2008年『大友府内』4～12

坂本弘弘 2008『中世都市 豊後府内の変遷』『戦国大名大友氏と豊後府内』鹿毛敏夫編 高志書院

#### 土師器・須恵器・瓦・陶器・陶磁器など

坂本弘弘ほか 2006『中世大友城下町跡出土の土師質土器編年』『豊後府内3』大分県教育庁埋蔵文化財センター

河野史郎 2002『出土土師器環・皿類及び瓦質土器雑器の分類と編年』『大友府内4』大分市教育委員会

塩田潤一 1998『大友領国内における京都系土師器の分布とその背景』『法吧雄』第6号 博多研究会

田中裕介 2006『Ⅱ、そのほか 1) 土師 2) 土師器陶台』『豊後府内3』大分県教育庁埋蔵文化財センター

荻野賢春 2005『須恵器系陶器の編年と生産技術の展開』『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集 全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会編 中央大学文学部日本史学研究室

山本哲也 2007『豊前・豊後における瓦質土器の初期様相』『第26回中世土器研究会 瓦質土器の出現と定着』日本中世土器研究会編 真興社

小柳和宏 1995『宇佐高村と中世雑器生産』『大分県地方史』第一五九号 大分県地方史研究会

山崎信二 2000『中世瓦の研究』『奈良国立文化財研究所学報』第59期 奈良国立文化財研究所

小柳和宏 2005『津久見門前遺跡 第3節 小結 1 遺物の分類と年代的位置付け b. 瓦類』『津久見門前遺跡 瀬戸遺跡 佐伯門前遺跡 一東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(4)』大分県教育庁埋蔵文化財センター編

備前市教育委員会編 2008『因指定史跡伊布南大空跡発掘調査報告書 備前市埋蔵文化財調査報告書 8

栗岡実 2005『備前』『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』資料集 全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会編 中央大学文学部日本史学研究室

石井晋 2006『窯跡出土資料から見る「桃山」—16・17世紀の備前境—』『備前歴史フォーラム資料集「備前境・海の道・夢フォーラム 2006」—備前境の歴史と未来後をもとめて—』備前市歴史民俗資料館紀要 8 備前市歴史民俗資料館・備前市教育委員会編

北野隆秀 2006『備前焼水屋敷の分類と変遷—根来寺坊跡出土資料を中心として—』『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集編 桂書房

藤沢良祐 2005『瀬戸系（輪飾陶器生産技術の伝播）』『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集 全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会編 中央大学文学部日本史学研究室

太宰府市教育委員会 2000『太宰府市の文化財 第49集 大宰府桑坊跡XV—陶磁器分類編—』

森田勉 1982『14～16世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究』No.2

上田秀夫 1982『14～16世紀の青磁碗の分類について』『貿易陶磁研究』No.2

野正敏 1982『14～16世紀の染付碗、皿の分類と年代』『貿易陶磁研究』No.2

冨永樹之 1998『出土品に見る景德鎮青花の底真跡』『青山考古』第15号 青山考古学会

森毅 2005『中世後期輸入陶磁器の分類と変化—青花の分類と編年を中心に—』『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集 全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会編 中央大学文学部日本史学研究室

岡矢哲男 2005『高麗・朝鮮陶磁器の編年』『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集 全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」資料集実行委員会編 中央大学文学部日本史学研究室

(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1998『湯築城跡 道後公園埋蔵文化財調査報告書 第1分冊(本文)』埋蔵文化財発掘調査報告書 第66集

森本朝子 2006『中世前期跡出土の中国陶器についての覚書—産地探索を視座において—』『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集編 桂書房

高富豊 2003『第3章まとめ 大貫理機機構 SX210 出土資料について』『大友府内5 中世大友府内町跡第3次調査報告 大分県周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分市教育委員会

吉田 寛 2008『陶磁器からみた大友氏の南産貿易』『戦国大名大友氏と豊後府内』鹿毛敏夫編 高志書院

#### 金属製品・木製品・石製品など

永井久美男編 1994『中世の出土鉄—出土鉄の調査と分類—』兵庫県埋蔵文化財調査会

後藤晃一 2008『豊後府内のキリシタン遺物』『戦国大名大友氏と豊後府内』鹿毛敏夫編 高志書院

原田倫子 2005『中国地方における中世遺跡出土の硯』『古文化談義』第53集 九州古文化研究会

三輪茂雄 1978『もの与人間の歴史』25 白』法政大学出版局

野田雅之 2003『石器の原石をたずねて』『大分地質学会誌』第9号 大分地質学会

# 本文目次

第1章	はじめに	
第1節	調査に至る経過（池邊）	1
第2節	調査組織（池邊）	2
第2章	遺跡の立地と歴史的環境	
第1節	地理的環境（廣瀬）	3
第2節	歴史的環境（廣瀬）	4
第3節	調査の方法（池邊・若杵）	8
第3章	調査の成果	
第1節	第53次調査（若杵）	10
第2節	第60次調査（若杵）	58
第3節	第73次調査（池邊）	153
第4節	第57次調査（高畠）	210
第5節	第59次調査（池邊）	220
第4章	自然科学分析	
第1節	大分市中世大友府内町跡の出土品に関する自然科学調査	227
第2節	中世大友府内町跡遺跡第53次調査・第60次調査の花粉分析と 珪藻分析	238
第5章	まとめ	
第1節	万寿寺の堀の形成について（池邊）	257
第2節	町53・60・73次出土遺物について—「中国南方産褐釉陶器水注」・ 「金襴手」・「タイ産メナムノイ窯系焼締陶器」—（若杵）	262

# 挿図目次

第1図	矢板設計図	1
第2図	周辺道幅分布図	3
第3図	大友氏館跡・中世大友府内町跡調査位置図	5
第4図	府内古図C 類	6
第5図	町60次調査作業風景	8
第6図	グリッド解説図	9

## 第3章 第1節

第1図	町53次調査調査区上層模式図	10
第2図	町53次調査新旧関係図・上層断面実測図	11・12
第3図	町53次調査調査区東壁上層断面図	13・14
第4図	町53次調査遺構配置図①	16
第5図	町53次調査遺構平面図①	16
第6図	町53次調査SX400遺構平面・断面図	17
第7図	町53次調査遺構配置図②	18
第8図	町53次調査遺構平面図②	19
第9図	町53次調査S-200①出土遺物実測図	20
第10図	町53次調査S-200②出土遺物実測図	21
第11図	町53次調査S-200③出土遺物実測図	22
第12図	町53次調査S-200④出土遺物実測図	23
第13図	町53次調査S-200⑤出土遺物実測図	24
第14図	町53次調査S-200⑥出土遺物実測図	25
第15図	町53次調査S-200⑦出土遺物実測図	26
第16図	町53次調査S-200⑧出土遺物実測図	27
第17図	町53次調査S-205①出土遺物実測図	28
第18図	町53次調査S-205②出土遺物実測図	29
第19図	町53次調査S-206出土遺物実測図	30
第20図	町53次調査SD210出土遺物実測図	31
第21図	町53次調査SX133平面・見通し実測図	34
第22図	町53次調査SX133出土遺物実測図	35
第23図	町53次調査遺構配置図③	36
第24図	町53次調査遺構平面図③	37
第25図	町53次調査SX101平面・上層断面図	38
第26図	町53次調査SX101出土遺物実測図	38
第27図	町53次調査SX104平面・上層断面図	39

第28図	町53次調査SX110平面・上層断面図	39
第29図	町53次調査SX105・138平面・上層断面図	39
第30図	町53次調査SX124平面・上層断面図	39
第31図	町53次調査SX125平面・上層断面図	39
第32図	町53次調査SX126・SP142平面・上層断面図	40
第33図	町53次調査SX126・137出土遺物実測図	40
第34図	町53次調査SX140・149平面・上層断面図	41
第35図	町53次調査SX140出土遺物実測図	42
第36図	町53次調査SX140・149出土遺物実測図	43
第37図	町53次調査SX141・144平面・上層断面図	44
第38図	町53次調査SX182・183平面・上層断面図	44
第39図	町53次調査SX132平面図	44
第40図	町53次調査表土・表採・SX001出土遺物実測図	45

## 第3章 第2節

第1図	町60次調査区上層模式図	58
第2図	町60次調査新旧関係図・上層断面図	59・60
第3図	町60次調査SD210遺構実測図	61
第4図	町60次調査遺構全体図①-1	62
第5図	町60次調査遺構全体図①-2	63
第6図	町60次調査遺構全体図①-3	64
第7図	町60次調査S-174・175・177・178上層断面図	66
第8図	町60次調査S-174・175・177・178上層断面図	67
第9図	町60次調査S-120平面・上層断面図	68
第10図	町60次調査S-120出土遺物①	69
第11図	町60次調査S-120出土遺物②	70
第12図	町60次調査S-121出土遺物	71
第13図	町60次調査S-174出土遺物	72
第14図	町60次調査S-175出土遺物	74
第15図	町60次調査S-177出土遺物①	75
第16図	町60次調査S-177出土遺物②	76
第17図	町60次調査S-177出土遺物③	77
第18図	町60次調査S-177出土遺物④	79
第19図	町60次調査S-177出土遺物⑤	80
第20図	町60次調査S-178出土遺物①	81

第 21 図	町 60 次調査 S-178 出土遺物②	82
第 22 図	町 60 次調査 S-200 出土遺物①	84
第 23 図	町 60 次調査 S-200 出土遺物②	85
第 24 図	町 60 次調査 S-200 出土遺物③	87
第 25 図	町 60 次調査 S-200 出土遺物④	88
第 26 図	町 60 次調査 S-200 出土遺物⑤	89
第 27 図	町 60 次調査 S-200 出土遺物⑥	91
第 28 図	町 60 次調査 S-200 出土遺物⑦	92
第 29 図	町 60 次調査 S-200 出土遺物⑧	93
第 30 図	町 60 次調査 S-200 出土遺物⑨	94
第 31 図	町 60 次調査 S-200 出土遺物⑩	95
第 32 図	町 60 次調査 S-200 出土遺物⑪	96
第 33 図	町 60 次調査 S-200 出土遺物⑫	97
第 34 図	町 60 次調査 S-200 出土遺物⑬	98
第 35 図	町 60 次調査 S-200 出土遺物⑭	99
第 36 図	町 60 次調査 S-221・S-222 出土遺物	100
第 37 図	町 60 次調査 S-230 出土遺物①	102
第 38 図	町 60 次調査 S-230 出土遺物②	103
第 39 図	町 60 次調査 S-230 出土遺物③	104
第 40 図	町 60 次調査 S-231 出土遺物①	105
第 41 図	町 60 次調査 S-231 出土遺物②	106
第 42 図	町 60 次調査 S-231 出土遺物③	107
第 43 図	町 60 次調査 S-223 出土遺物①	109
第 44 図	町 60 次調査 S-223 出土遺物②	110
第 45 図	町 60 次調査 S-223 出土遺物③	111
第 46 図	町 60 次調査 S-223 出土遺物④	113
第 47 図	町 60 次調査 S-223 出土遺物⑤	114
第 48 図	町 60 次調査 S-223 出土遺物⑥	115
第 49 図	町 60 次調査 S-224 出土遺物①	116
第 50 図	町 60 次調査 S-224 出土遺物②	117
第 51 図	町 60 次調査 S-224 出土遺物③	118
第 52 図	町 60 次調査 SD210 出土遺物①	119
第 53 図	町 60 次調査 SD210 出土遺物②	120
第 54 図	町 60 次調査遺構配置図①	122
第 55 図	町 60 次調査遺構平面図①	123
第 56 図	町 60 次調査 SX107・122・SP104・105	

平面・上層断面図	124	
第 57 図	町 60 次調査 SP123・127 出土遺物	125
第 58 図	町 60 次調査 SP131 平面・上層断面図	125
第 59 図	町 60 次調査 SX107 出土遺物	126
第 60 図	町 60 次調査 SX001 出土遺物	127
第 61 図	町 60 次調査表上・視乱出土遺物	128
第 62 図	町 60 次調査出土動物遺存体写真図版①	130
第 63 図	町 60 次調査出土動物遺存体写真図版②	132

### 第 3 章 第 3 節

第 1 図	073S002・004 出土遺物実測図	153
第 2 図	A 区調査地位置図	154
第 3 図	A 区平面・上層断面図	157
第 4 図	A 区 1 面遺構配置図	158
第 5 図	A 区 2 面遺構配置図	158
第 6 図	A 区 3 面遺構配置図	159
第 7 図	A 区 073SK038 平面・断面実測図	159
第 8 図	073SK038・039・040・045 出土遺物実測図	159
第 9 図	B 区遺構配置図	160
第 10 図	073SD001 遺物実測図	164
第 11 図	073SD101 平面・断面実測図	164
第 12 図	073SD001 平面・断面実測図	165
第 13 図	073S135 遺物実測図	166
第 14 図	073S130・135 平面・断面実測図	166
第 15 図	073SD200 上層断面図	167・168
第 16 図	073SD200 堀上層断面図	169・170
第 17 図	073SD200 上層模式図	171
第 18 図	073S200・210 出土遺物実測図	172
第 19 図	073S210 出土遺物実測図	173
第 20 図	073S210 出土遺物実測図	175
第 21 図	073S210 出土遺物実測図	176
第 22 図	073S210 出土遺物実測図	177
第 23 図	073S210 出土遺物実測図	178
第 24 図	073S210 出土遺物実測図	179
第 25 図	073S210 出土遺物実測図	180
第 26 図	073S210 出土遺物実測図	181

第27図 073S210 出土遺物実測図	183
第28図 073S210 出土遺物実測図	184
第29図 073S221・222 出土遺物実測図	185
第30図 073S223 出土遺物実測図	186
第31図 073S223 出土遺物実測図	187
第32図 073S223 出土遺物実測図	188
第33図 073S224 出土遺物実測図	189
第34図 073S231 出土遺物実測図	190
第35図 073S231 出土遺物実測図	191
第36図 073S231 出土遺物実測図	192
第37図 073SK124 出土遺物	193
第38図 073SK125 出土遺物	193
第39図 073SK125 遺構平面・断面実測図	193
第40図 073SK124 遺構平面・断面実測図	194
第41図 073SK143 遺構平面・断面実測図	195
第42図 073SK143 出土遺物実測図	195
第43図 073SK149 出土遺物実測図	195
第44図 073SK149 遺構平面・断面実測図	195
第45図 073SK151 遺構平面・断面実測図	196
第46図 073S151 出土遺物実測図	197
第47図 073SK154 平面・断面実測図	198
第48図 073SK154 出土遺物実測図	198
第49図 073S001・106・137・140・142・150・ 153・155・158・195 出土遺物実測図	199
第50図 073S251・253・表掘出土遺物実測図	200

### 第3章 第4節

第1図 調査地点位置図	210
第2図 土層模式図	210
第3図 調査進捗状況図・遺構配置図	210
第4図 第1・第2調査区遺構配置図	211
第5図 SDO03 完掘状況（西より）	211
第6図 SDO03 東壁土層	211
第7図 SDO03 出土遺物①	212
第8図 SDO03 出土遺物②	213
第9図 SE013 掘り下げ状況（東より）	214

第10図 第1調査区検出遺構実測図	214
第11図 SK011・SE013・SE014 出土遺物	215
第12図 第3調査区包含層出土遺物	216
第13図 第4調査区包含層出土遺物①	217
第14図 第4調査区包含層出土遺物②	218

### 第3章 第5節

第1図 第1面平面図	221
第2図 調査区上層断面実測図	222
第3図 第2面平面図	223
第4図 059 出土遺物実測図	226

### 第4章 第1節

第1図 大友府内町跡出土製品の鉛同位体比 ( $^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ ・ $^{208}\text{Pb}$ )	234
第2図 大友府内町跡出土製品の鉛同位体比 ( $^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ ・ $^{208}\text{Pb}$ )	234
第3図 大友府内町跡出土金属製品の鉛同位体比 ( $^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ ・ $^{208}\text{Pb}$ )	235
第4図 第3図の拡大図	235
第5図 大友府内町跡出土金属製品の鉛同位体比 ( $^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ ・ $^{208}\text{Pb}$ )	235
第6図 第5図の拡大図	236
第7図 大友府内町跡出土ガラス製品の鉛同位体比 ( $^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ ・ $^{208}\text{Pb}$ )	236
第8図 第7図の拡大図	236
第9図 大友府内町跡出土ガラス製品の鉛同位体比 ( $^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ ・ $^{208}\text{Pb}$ )	237
第10図 第9図の拡大図	237

### 第4章 第2節

第1図 第53・60次調査の花粉・腐子・寄生虫卵	255
第2図 第53・60次調査の珪藻	256

### 第5章 第1節

第1図 周辺調査配置図	258
第2図 堀平面変遷図	259

第3図 甌上層断面変動様式図	260
----------------	-----

### 第5章 第2節

第1図 中国南方産褐釉陶器水柱実測図	262
第2図 三方岩岳遺跡出土水柱実測図	263
第3図 三方岩岳遺跡出土水柱	263
第4図 天日堂跡採集資料	263
第5図 紅地金襴手宝相華文碗実測図	264
第6図 イギリスデビット＝ファウンデーション所蔵資料	264
第7図 緑地金襴手棧花皿実測図	264
第8図 タイ産メナムノイ窯系統緑釉陶器双耳壺実測図	265
第9図 タイ産メナムノイ窯系統緑釉陶器双耳壺	265
第10図 メナムノイ窯跡出土資料	265
第11図 タイ産メナムノイ窯系統緑釉陶器鉢実測図	266
第12図 タイ産メナムノイ窯系統緑釉陶器鉢実測図	266
第13図 長崎県小値賀町山見沖海底遺跡回収資料	267
第14図 メナムノイ窯跡出土資料	267

## 表目次

### 第3章 第1節

表1～11 遺物観察表①～⑪	47～57
----------------	-------

### 第3章 第2節

表1 町60次調査 出土動物遺存体同定表①	129
表2 町60次調査 出土動物遺存体同定表②	131
表3～22 遺物観察表①～⑳	133～152

### 第3章 第3節

表1・2 A区遺構台帳①・②	155・156
表3～5 B区遺構台帳①～③	161～163
表6 遺物観察表	201～209

### 第3章 第4節

表1 遺物観察表	219
----------	-----

### 第3章 第5節

表1 遺構台帳	224
表2 遺物観察表	225

### 第4章 第1節

表1 中世大友府内町跡から出土した資料の掲載	228・229
表2 中世大友府内町跡出土の金属製品の化学組成	230
表2 中世大友府内町跡出土のガラス製品の化学組成	231
表2 中世大友府内町跡出土の小歯の化学組成	231
表3 中世大友府内町跡出土の金属製品およびガラス製品の素部位体比	232・233
表4 中世大友府内町跡発掘調査一覧	237

### 第4章 第2節

表1 第53次調査の花粉分析結果	243
表2 第53次調査の53SD210(堀)、北地点の主要珪藻ダイアグラム	243
表3 第53次調査の53SD210(堀)、中地点の主要珪藻ダイアグラム	244
表4 第53次調査の53SD210(堀)、南地点の主要珪藻ダイアグラム	244
表5 第60次調査の中央トレンチ中央土層における花粉ダイアグラム	245
表6 第60次調査の南側トレンチにおける花粉ダイアグラム	246
表7 第60次調査の自然流路(S500)南北トレンチの花粉ダイアグラム	247
表8 第60次調査の中央トレンチにおける主要珪藻ダイアグラム	248
表9 第53次調査の珪藻分析結果	249
表10 第60次調査の花粉分析結果	250～252
表11 第60次調査の珪藻分析結果	253・254

## 第1章 はじめに

### 第1節 調査に至る経過

平成17年4月5日に、大分市の下水道建設課より桜ヶ丘から元町にかけて、公共下水用の樹の敷設工事のため、埋蔵文化財発掘の通知について、文化財課に提出があった。工事の正式名称は、「公共下水道中央処理区 桜ヶ丘元町線雨水幹線施設工事」である。当初の計画では、施設管が国指定史跡の万寿寺地区の推定地・万寿寺の一角を通過する予定であったため、将来的な遺構の保存を考慮に入れ、西側にルート変更するよう下水道建設課に要望した。協議により、下水施設のルートが新・国道10号の西側に迂回するルートになり、この部分での調査を実施することになった。平成17年度の事業では、工事区域の6工区にあたり、その余てが「中世大友府内町跡」の周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれているため、調査の対象となった。調査主体としては、6工区のうち、国道10号の自動車の軌道敷きを大分県教育庁埋蔵文化財センターがおこない、国道10号の歩道敷き部分を大分市教育委員会がおこなった。

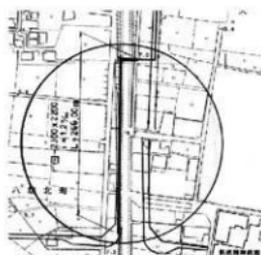
大分市教育委員会では、工事の関係により、2次にわたり調査を実施した。最初の調査は、中世大友府内町跡第53次調査として、平成17年4月5日～7月8日まで実施した。調査区は、幅3.5～4.4m、南北に長さ45.0mを測る細長い形状である。さらに、中世大友府内町跡第60次調査として、平成17年8月19日～11月11日まで引き続き実施された。調査区は、幅4.0m、南北に長さ43.0mと第53次調査の南側に連続して設定されたものである。

雨水幹線施設工事は、雨水を流す樹を地上（標高7.7～7.9m）より約7.0m下に埋設するものである。樹の埋設にあたり、掘削幅が、約4.0m必要であるため、最初に、長さ約10.0mの矢板を地下に打ち込む作業をおこなった。その後、矢板内側をバックホーで、表土を除去した。調査開始となる遺構検出面は、地上から約2.3～2.5m下（標高5.4m）であるため、すでに調査開始時の掘削面が深いことから、表土掘削後に続けて、1段目の支保工を設置した。調査は、万寿寺の堀跡が中心となるために、最終掘削深度が2.5m以上に達することから、第60次調査においては、調査の遺構掘削途中において、支保工の2段目の設置がおこなわれた。

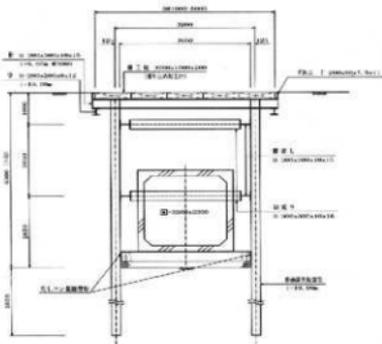
平成17年度は、さらに公共下水道下水道中央処理区 鐘町2306-2号線汚水雨水施設工事が下水道建設課によって実施された。これに先立ち、「中世大友府内町跡」の周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれていることから、調査を実施した。

調査は、まず中世大友府内町跡第57次調査を平成17年6月21日～8月30日にかけて、4回にわけて実施された。これは工事の工程との調整の結果である。さらに、別地点で、中世大友府内町跡第59次調査が平成17年7月12日～8月3日にかけて実施された。

平成18年度の桜ヶ丘元町雨水幹線施設に伴う発掘調査は、平成17年度に引き続き国道10号に沿って南側



雨水土留工標準図



第1図 矢板設計図

にあたり、東西に伸びる県道庄の原佐野線までの約72.0mの区間である。調査の開始時期と調査地点の違いにより、A区とB区に分けて、中世大友府内町跡第73次調査として発掘を実施することになった。

A区(56.0㎡)は、もと水田になっていた場所で、国道10号から農機具を搬入するコンクリート敷きの搬入路に該当するところである。平成15年に、大分県埋蔵文化財センターが実施した第34次調査では、調査を同時に実施することができなかったところである。調査では、事前に、このコンクリート部分を削いで実施する運びとなった。調査の開始は、平成18年10月15日で、11月13日に終了した。B区(270.0㎡)約70.0mの範囲)では、調査を実施するにあたり、遺構検出面まで約2.6～2.9mあり、推定最深部では、さらに検出面から2.5mを越えることから、事前に工事用の矢板を対象地の周囲に打ち込んでおこなった。その上で、遺構検出面まで、重機により表土を削ぎ、調査を開始することになった。調査期間については、矢板の打ち込み作業の遅れから、遺跡の調査の終了期限を平成19年1月15日としていたが、調査期間に不足が生じることになった。このため、下水道建設課と工期について、数度にわたる協議を重ねたが、調査終了後の下水道の工事の期限が、その後の国土交通省による国道工事の工期に影響を与えることから期間の延長は困難との回答であった。このことから、双方協議の上、B区の調査区を大きく南北に分割し、最初に北側部分の長さ約40.0m分について調査を終了させ、その後、南側の残り長さ約30.0mの調査に移ることにした。南側で調査を行っている段階では、北側部分を工事していることになる。そのため、調査と工事の並行において、発掘によって発生した塵土の置場や作業スペースの確保・作業員の安全対策など十分に保てることを協議で確認し実施することになった。

こうして、B区は11月15日に30.0m分の表土掘削を開始し、翌年の2月7日に全ての調査区の調査を終了した。

## 第2節 調査組織

平成17年度～平成20年度

調査主体：大分市教育委員会文化財課

調査総括：教育長 秦 政博(～18年度)

足立一馬(19年度～)

文化財課

教育総務部次長兼文化財課長 玉永光洋(20年度～)

課長 足立昌人(～17年度) 佐藤 功(～18年度)

玉永光洋(～19年度)

参事 玉永光洋(～18年度) 渋谷建治(～19年度)

岩田祐治(20年度～)

管理係

係長 安東時男(～19年度)

課長補佐兼管理係長 福田 誠一(20年度～)

主 査 平野勝敏(～17年度) 幸 俊昭(18年度～)

桑原 治(19年度～)

主 任 粟田博之

文化財係

課長補佐兼文化財係長 讃岐和夫(～17年度)

塔鼻光司(20年度～)

係長 塔鼻光司(～18・19年度)

専門員 塔鼻光司(～17年度) 坪根伸也

池邊千太郎(19年度～)〈町53・59・60・73次調査担当〉

主任 高畠 豊〈町57次調査担当〉

嘱託 佐藤孝則〈町57次調査担当〉 羽田野達郎〈町73次調

査担当〉羽田野裕之〈町57次調査担当〉山下 桂〈町73次調査担当〉山下朋紀〈町73次調査担当〉山下美郷(～17年度)〈町53・59・60次調査担当〉若秋善満〈町53・60次調査担当〉

下水道計画課

課長 指原正廣(～17年度) 田原精一(18年度～)

下水道部次長兼課長 池辺洋一郎(20年度～)

参事 山村信幸(～17年度)

財務担当班 主任 幸野 勝 渡邊清隆

下水道建設課

課長 衛藤道男(～17年度) 首藤国利(18年度～)

下水道部次長兼課長 重良崇至(19年度～)

参事 由布隆徳(～17年度) 山村信幸(18年度～)

課長補佐 岩尾俊吉(～17年度)

中央建設係

課長補佐兼係長 後藤 勉(～18年度) 新井修司(19年度～)

専門員 副田泰二 主任 松尾裕治 羽田野清

臨時職員

(17年度) 上野美奈 小林ひろみ 澤田香織 河野かおる

小山田裕子

(18年度) 長岡照夫 重吉のぞみ 橋本智子 藤原彰子

(19年度) 佐藤京子 倉増美智代 末永裕香 宮本博子

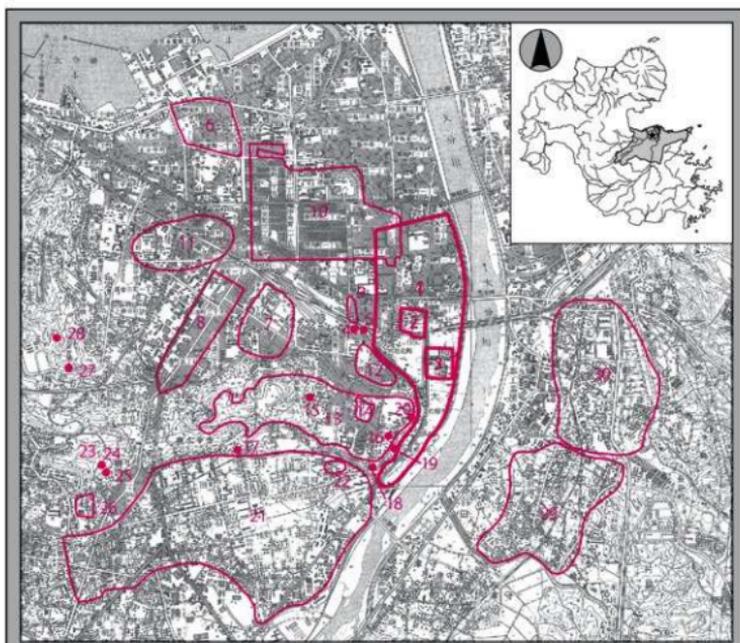
(20年度) 秋山かおる 稲穂美香

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

大分平野は、丘陵や河川によって分断された小規模な平野が各所に展開する地形をなしている。その中央部から西部にかけて大分川は東流後北流し、河口部にデルタ平野を形成して別府湾に注いでいる。近代以前、河口部は多くの流路に分流していたと考えられ、周辺には河川に伴う微高地群が形成された。これらの古河川は、現代の平野下に埋没しており、中世段階の大分平野は、現代に比べてもっと狭かったと考えられる。

調査対象となる中世大友府内町跡は、大分平野の中央部で、北に別府湾、東に北流する大分川、南には標高



1 中世大友府内町跡	11 東田室遺跡	21 古国府遺跡群
2 大友氏館跡	12 若宮八幡宮遺跡	22 岩屋寺遺跡
3 万寿寺跡	13 上野遺跡群	23 城南遺跡
4 上野町遺跡	14 上野大友館跡 上原館跡	24 千人塚古墳
5 顯徳寺遺跡	15 上野廃寺	25 弘法穴古墳
6 勢家遺跡	16 上野竜王畑遺跡	26 永興遺跡
7 大道遺跡群	17 元町石仏	27 古宮古墳
8 大道条里跡	18 岩屋寺石仏	28 亀甲古墳
9 南金池遺跡	19 伽藍石仏	29 羽田遺跡
10 府内城・城下町跡	20 大臣塚古墳	30 下郡遺跡群

第2図 周辺遺跡分布図

30.0～40.0mの上野丘台地が広がり、西は高崎山（標高628m）へと続く標高100m前後の起伏の激しい丘陵に囲まれた地域にあり、現在の標高で4.0～6.0mの自然堤防上に位置している。発掘調査の結果、この大分川左岸に形成された自然堤防は、検出面は粘質土層であるが、下位には厚い砂層の堆積が確認された。下位の砂層からは、縄文時代後期～古墳時代前期の土器が出土しており、上位からは8～9世紀頃の遺物が出土している。したがって、おそらくこの間に2.0～3.0m程度の堆積があり、この自然堤防が形成されたと考えられる。

## 第2節 歴史的環境

### 2-1. 周辺の遺跡

旧石器時代は、現時点で明確な状態での遺構は確認されていないが、上野遺跡群の試掘調査において流紋岩製二次加工剥片の出土がみられる。

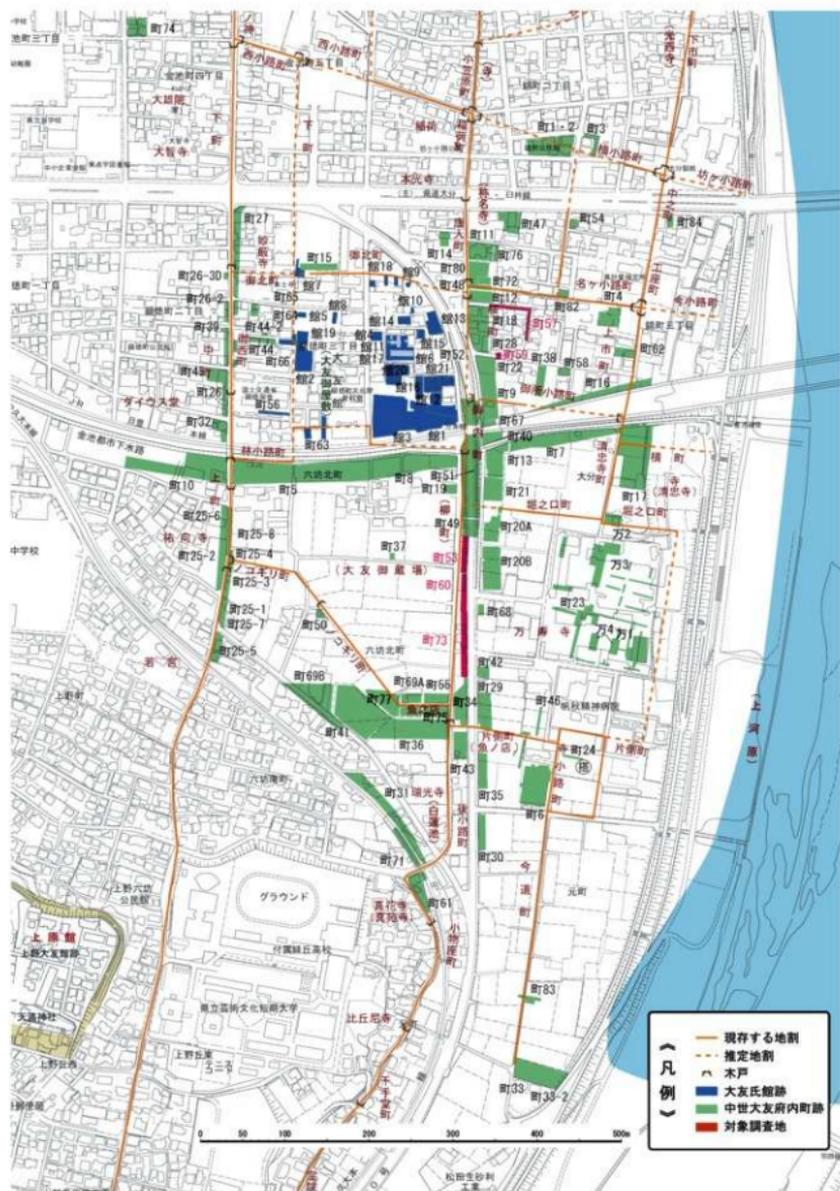
縄文時代の太田川下流域では、遺物の出土例が増すことから、遺構の存在する可能性が高いと考えられるが、現在までのところ発見には至っていない。上野台地北側の大道遺跡群では、後期の土器が比較的多量に出土し、大分川東岸の下郡遺跡群においても、後期～晩期の土器の出土がみられる。

弥生時代になると、遺跡は急激に増加し、上野台地、古国府地区、大分市西部を流れる住吉川流域、大分川東岸地域への展開がみられる。上野遺跡群では、中期～後期初頭にかけての環濠集落跡や、祭祀遺構と考えられる掘立柱建物跡を伴う方形周溝遺構などが検出される。古国府遺跡群では、前期の土器が出土し、東田室遺跡では、前期末の貯蔵穴が多数検出される。下郡遺跡群では、前期末～後期終末にかけての大規模な集落が営まれており、中期初頭に比定されるヤリガンナなどの遺物や中期後半～後期にかけての環濠などの遺構が確認される。

古墳時代には、大分平野の首長墓とみられる墳丘墓が、大分川下流西岸の台地上に次々と造営される。椎迫丘陵に築造された亀甲古墳は、4世紀後半に比定される。円墳あるいは前方後円墳とみられ、主体部の石棺からは、三角縁神獣鏡をはじめとした多くの遺物が出土する。上野台地に築造された大塚塚古墳は、5世紀前半と考えられる墳丘を伴う。永興台地に築造された千人塚古墳は、5世紀後半に比定され、全長約47.0mの前方後円墳である。永興台地南斜面に築造された弘法穴古墳は、6世紀末～7世紀に比定される。椎迫丘陵南斜面に築造された古宮古墳は、7世紀後半に比定され、横口式石櫓を有する。また、若宮八幡宮遺跡では、5世紀末～6世紀代にかけての竪穴住居跡群が検出された。このうち3基は、未製品を含む石製玉類や工具類などの出土がみられることから、玉類製作関連遺構と考えられる。

古代豊後国府の推定地としては、古国府・羽屋および上野台地一帯が挙げられる。特に古国府地区周辺は、その名称や円籬社の存在から、長い間、国府推定地の第一候補とされてきた。隣接する羽屋井戸・羽屋園遺跡において、掘立柱建物跡群や倉庫跡群が検出されたが、それらは7世紀後半～8世紀初頭に比定されるため、郡成立以前の「評」に関連する施設と考えられる。上野台地高国府地区の竜王畑遺跡では、9世紀代の築地塙やそれに伴うとみられる溝、掘立柱建物跡群が確認されており、国司館など国府関連施設の可能性が考えられる。この地域の国府関連施設は、ほかに、上野廃寺跡や岩屋寺跡などの古代寺院跡がある。上野廃寺跡では、8～9世紀の版築により築造された基壇跡と基壇上に築かれた礎石建物跡が検出された。多量に出土した瓦には、豊後国分寺創建段階の瓦や百濟系軒丸瓦が含まれる。また、大分川下流東岸の下郡遺跡群は、古代大分郡の郡衙推定地とされており、8世紀中頃～9世紀前半に比定される大型掘立柱建物跡群や道路状遺構に加えて、墨書土器・刻書土器・硯など多数の官衙関連資料の出土がみられる。11世紀後半～12世紀後半には、上野台地周辺の崖面に岩屋寺石仏・元町石仏といった磨崖仏が造営される。

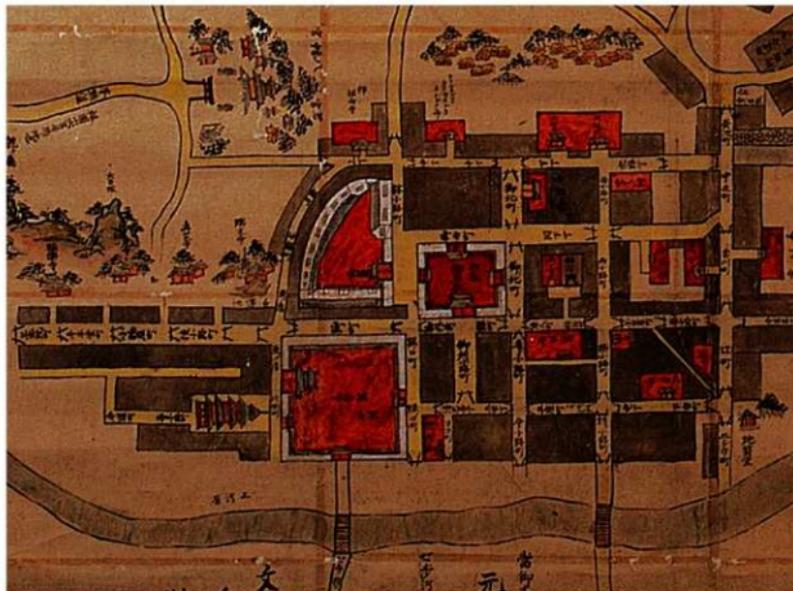
12世紀末、大友氏が豊後国の守護職に任じられ、3代頼泰が豊後に下向して以降、府内は中世都市としての様相を整えてゆく。守護所について、15世紀代に「上原館」が築かれる以前の所在地は明らかにされていないが、上野台地南側の古国府地区東部に位置する石明遺跡からは、13世紀代の池状遺構・区画溝・石積・倉庫・井戸などの大規模な遺構群が検出されており、初期守護所の最有力候補地とされる。15世紀後半以降になると、上野台地北縁に「上原館」が築かれる。文献史料に、その名がみられる「上原館」は、館を囲む堀が現在まで残る



第3図 大友氏館跡・中世大友府内町跡調査位置図(『大分市史』中巻附Ⅱを改変)

ことなどから、所在地が周知されていた。これとは別に、16世紀後半の府内を描いたとされる「府内古図」には、自然堤防上に「大友館」が描かれる。この「大友館」の所在地は、平成10年度に行われた発掘調査（館1次）において、巨大な池を伴う庭園跡などが発見されたことにより、特定された。その後の調査により、「大友館」は、数度の画期がみられ、「上原館」とは異なる機能をもつ施設として、15世紀前半～16世紀後半まで継続して使用されたことが明らかとなった。一方、庶民の生活空間である中世府内町は、14世紀初頭の万寿寺創建を契機として本格的な都市建設が開始され、大友氏の政治・経済的中心として発展を遂げた。しかし、天正14年（1586）の島津氏侵攻により、「大友館」のみならず中世府内町までも焼亡したとされ、この時の火災の痕跡は、発掘調査によりいたるところで確認できる。この後、町は復旧するが、「大友館」が同地に再建されることはなかった。文禄2年（1593）、22代吉統が朝鮮出兵における失態を理由として徐国されるに至り、中世府内町は終わりを迎えることとなる。

大友氏の徐国後、蔵入地となった豊後国は、豊臣系大名により分割支配され、府内には、文禄3年（1594）に、早川長敏が6万石で入封した。慶長2年（1597）になると、早川長敏に替わり、豊後白旗より福原直高が12万石で入封した。この前年、中世府内町が慶長大地震に伴う津波により甚大な被害を被っていたこともあり、福原直高は、中世府内町の北西で別府湾に面する「荷落」の地を選定し、築城に着手するとともに、近世城下町の建設を開始した。慶長4年（1599）に、二ノ曲輪三重櫓櫓や二ノ曲輪家臣屋敷の大半が完成すると、地名を「荷揚」と改め、新城を「荷揚城」と称した。しかし、同年、福原直高は徳川家康により改易され、その後、再入封した早川長敏も、関ヶ原合戦での敵対関係を理由に取り潰される。慶長6年（1601）、豊後高田より3万5千石で入封した竹中重利は、徳川家康の許可を得て、城塁の増修築および城下町の建設を再開した。慶長7年（1602）年に四重天守閣や諸門が完成し、城下町は東西10町35間、南北8町19間に区画され、中世府内町の住民を



第4図 府内古図C類（大分市歴史資料館蔵）

移住させた。その後も、周辺整備を続けた近世城下町は、慶長10年(1605)にほぼ完成し、城名を「府内城」、城下町を「府内」と改めた。寛永11年(1634)、竹中氏が改易されると、下野国王生より日根野吉明が2万石で入封した。日根野吉明は、府内城・城下町の再整備のほかに新田開発を進め、これに伴う水路の開削(初瀬井路)・整備によって、中世大友府内町を含む大分川下流域の広範囲は水田化した。明暦2年(1656)、日根野氏は一代で断絶し、近世府内は一時的に幕府の管理下に置かれた。万治元年(1658)になると、松平忠明が2万2千石で入封して府内藩となり、12代を経て明治に至る。

## 2-2.「萬寿寺」について

万寿寺は、徳治元年(1306)、「府中」で最初の禅宗寺院として建立された。禅宗は、当時の武士階級からの信仰厚く、執権北条貞時も深く帰依していた。大友氏5代貞親は、この北条貞時との問答を契機として万寿寺建立を決意したとされ、筑前博多の承天寺より直翁智侃を招請して開基した。

万寿寺の伽藍配置について、創建当初の様子を伝える資料はなく、近世に書かれた文献や、16世紀後半の府内の様子を描いたとされる「府内古図」から読み取ることができるのは、万寿寺の終末期の姿となる。万寿寺跡中心部の大規模な発掘は行われていないため、創建時の伽藍配置の解明や、終末期を示す資料の裏付けは、非常に困難である。しかし、万寿寺跡周辺部については、近年の発掘調査の成果から、徐々に様相が明らかにされている。万寿寺の西北隅とされる町20次調査では、区画性の強い東西・南北方向の溝が検出された。13世紀末～14世紀前半頃の貿易陶磁器や国内産陶器などが出土することから、創建時の北境・西境を区切る溝と推定される。区画溝のほか、井戸、礎盤建物跡も検出されている。柱穴の底に、川原石を据えた構造の礎盤建物跡は、14世紀～15世紀前半の豊前・豊後に類似例のみられる建物構造で、館12次調査においても、15世紀前半に同様の建物跡が検出され、さらに万寿寺と同一の間尺を測る。このことは、「府内」の中で、万寿寺と大友氏館という2つの建物が特別な存在とされていたことをうかがわせる。

発掘調査に裏付けされるように、14・15世紀の万寿寺は、大友氏の外護を受けて寺勢を強めてゆき、建武年間(1334～36)に、五山十刹の制の下で十刹に列せられた。暦応4年(1341)には、「第十豊後万寿」と坐位が定められ、さらに延文3年(1358)に「第八豊後万寿」、康暦2年(1380)になると「第九豊後万寿」と改定されている。この間の文和元年(1352)には、將軍足利義詮が僧元光を万寿寺住持に命じるなど、万寿寺一大友家―京都五山―將軍家との間の密接な関係も推察される。また、この時期の万寿寺には、中国からの渡海僧など多くの高僧が来院・止住したと、諸記録は伝える。14・15世紀の万寿寺が「府内」の町で担った役割は、九州最大の規模と格式を持つ禅宗寺院という宗教施設としての一面に、中国や京都との文化的な交流の拠点という側面を併せ持つものだったと考えられる。

16世紀になると、万寿寺に関連する資料は増加する。東西二百五十歩、南北三百六十歩を測る四周は築地塀に囲まれ、境内には、「山門」・「法堂」・「東西之方丈」といった中心となる伽藍のほかにも多くの建物が建んでいた様子が、「禅余集」などに記される。唯一の絵画資料となる「府内古図」では、境内の細密な描写はないものの、万寿寺の西側に南北街路があり、北側には東西方向の街路が描かれる。発掘調査からは、これらの街路が整備される以前の過程が明らかとなった。北側には、万寿寺の北の区画を示すような溝や堀が幾筋も掘られていたが、16世紀前半に、大規模な堀の掘削がされる。16世紀後半には、さらに規模を拡大して、幅6.3m、深さ2.5mの堀が掘られるものの、比較的短期間の使用で埋立てられ、その後、東西方向の道路として機能し、「府内古図」に描かれたと考えられる。北側と西側には、同様な堀が廻ることが確認されており、西側もほぼ同じ経過を追って、版築状に整備された街路となる。

都市の整備が進み、府内の町とともに繁栄する万寿寺であったが、15世紀末～16世紀代にかけては、幾度も火災を受けている。天正14年(1587)の火災について、ルイス＝フロイスの「日本史」では、2箇所に記載がみられ、「火災の原因が不審火である」こと、「大友氏21代宗麟の命令により火が放たれた」ことを読み取

ることができる。16世紀の火災記録についてはほかに、近世に編年された『九州記』がある。そこには、「元龜元年（1570）正月21日、大友宗麟近習の侍工藤帯刀が白杵で狼藉を働き、府内の万寿寺に逃げ込んだ。それを宗麟の命で追った二百余人の兵が、万寿寺に乱入し、火を放ち、全焼した。」と記される。『日本史』と『九州記』の内容を照合すると、そこには時間的な矛盾が生じるため、16世紀代に万寿寺を襲った火災の回数について、文献史料上は明確でなく、発掘調査による検証も難しい。ただし、両記録は、万寿寺の放火が大友宗麟の命令で行われた点では一致をみており、この当時の大友宗麟のキリスト教への傾斜と、最大の外護者を失った万寿寺衰退の様子が看取される。いずれにせよ、天正14年（1587）には、島津氏の豊後侵攻もあり、万寿寺だけでなく府内の町全体が焼亡した。同地に、万寿寺が再建されることはなく、現在の場所（大分市金池町、江戸時代の東新町東方）に万寿寺が移転再興されたのは、寛永8年（1631）、あるいは10年（1633）と伝えられる。

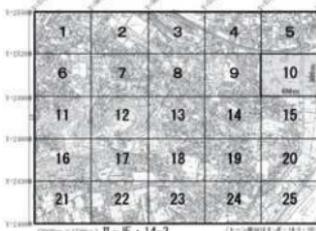
### 第3節 調査の方法

本調査にあたり、前年までの周辺調査成果を参考とし、バックホーによる表土除去を行なった。遺構面に達すると、遺構検出したのちに、人力による掘削を開始した。町60次・町73次については、調査区の、幅が狭く、南北に長い調査区であったため、廃土の運搬は、ベルトコンベアーを用い、調査区外に排出した。測量は、国際航業株式会社がおこない、トラバース測量により、調査区内に原点を設け、国土座標第Ⅱ座標系により位置を明示した。調査区内には、国土座標をのせた鎖を4m間隔に設置した。全体図・個別図等の作図は、これを利用して作成した。町53次・町60次・町73次については、第6図に基づいてグリッドを設定し、トータルステーションによる取り込みを行ない、全体図・個別図などの作成をした。遺構実測は、20分の1で、平面図を作成した。遺物の出土状況などから、個別の平面図・断面図が必要と判断された場合は、基本的には20分の1で作成し、必要に応じて10分の1で作成した。調査区の土層断面図については、調査区ごとに20分の1で作成した。作成した遺構配置図に、検出順に、S-番号（遺構番号）を付し、遺物の取り上げ、写真ボード、遺構実測図などの整理番号とした。遺構番号は、台帳を用いて管理をおこない、遺構の所見を記入した。写真は、デジタルカメラ・35ミリ版・6×9版のカメラを用い、35ミリ版は、カラーズライドフィルムで撮影した。

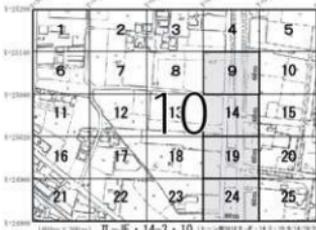


第5図 町60次調査作業風景

## 第2次区画コードメッシュ



## 第3次区画コードメッシュ



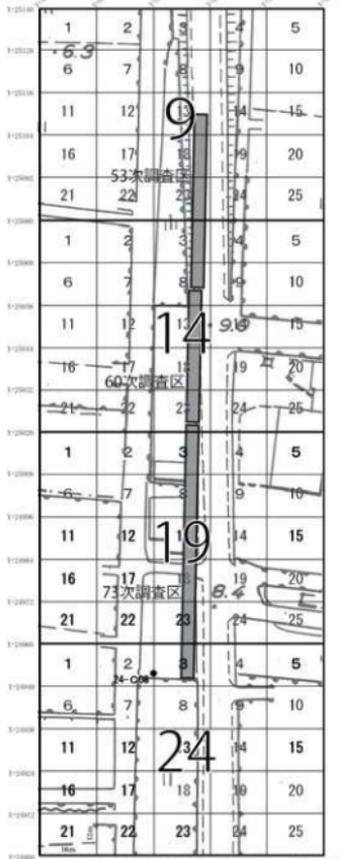
### 平面直角座標系による図面図郭

メッシュコードは、国土基本図をもとに地図上の位置情報を得るために国土座標方式として地域メッシュが定められている。メッシュコードは、本報告の調査区を表している。なお、国土基本図とは、国および自治体等が整備している大縮尺の地図で、都市部では1:2,500、周辺部では1:5,000の地図が作製されて公共事業に使用されている。

- ①第1次区画コードメッシュ（メッシュコード：II-JF）
  - ・5分画は平面直角座標系で1辺第1系に相当する。
  - ・5分画の1によりグリッドでは大分市の大半が1に相当する。（図郭90ca×60ca、40ka×30ka）
- ②第2次区画コードメッシュ（メッシュコード：II-JF-14-3）
  - ・500分の1国土基本図にあっては、座標系内の一区画を100等分し、アラビア数字を表示する。（図郭80ca×60ca、400km×3000m）
  - ・2500分の1国土基本図にあっては、5000分の1国土基本図の図面に相当する区画を4等分し、アラビア数字で区画番号を定める。（2000m×1500m、図郭80ca×60ca）
- ③第3次区画コードメッシュ（メッシュコード：II-JF-14-3-10-9/14/19/24）
  - ・500分の1国土基本図にあっては、2500分の1国土基本図の図面に相当する区画を25等分し、アラビア数字で区画番号を定める。（100m×1500m、図郭80ca×60ca）
  - ・100分の1国土基本図にあっては、500分の1国土基本図の図面に相当する区画を25等分し、アラビア数字で区画番号を定める。（80m×1500m、図郭80ca×60ca）
  - ・20分の1国土基本図にあっては、100分の1国土基本図の図面に相当する区画を16等分し、アラビア数字で区画番号を定める。（16m×12m、図郭80ca×60ca）

### 遺跡調査グリッド

遺跡調査区は100分の1遺跡図面をベースに4mメッシュに等分し、X軸に英字、Y軸にアラビア数字でグリッド番号を定める。（80m×1500m、図郭80ca×60ca）  
 例えば第3次区画コードメッシュ内の100分の1遺跡図面番号が24の場合で、グリッドのX軸がC、Y軸が8の場合、グリッド番号が24-C8となる。  
 この場合の遺跡調査グリッドのメッシュコードは、II-JF-14-3-10-24である。



第6図 グリッド解説図

## 第3章 調査の成果

### 第1節 第53次調査

#### 1 調査概要

中世大友府内町跡第53次調査（以下、町〇次とする）は、桜ヶ丘元町雨水幹線の公共下水道工事に伴い、平成17年4月5日から7月8日にかけて調査を実施した。

調査地点は、大分市大字上井東にあたり、「戦国時代府内復元想定図」の万寿寺西北側に、「府内古図A類」にみられる「大友館」の東側に面し、「萬壽寺」の西側を通る南北街路に位置する。当該調査区周辺においては、南北に延びる道路状遺構・万寿寺西側の堀などが検出されている町51次調査区（大分県教育庁埋蔵文化財センターが調査）が北側に隣接する。

調査区は、公共下水道用の例が南北に設置される工事に伴う調査であるため、幅3.5～4.4m、長さ約45.0mを測る南北に細長い形状に設定された。調査区の面積は、約192.4㎡を測る。

#### 2 基本層序

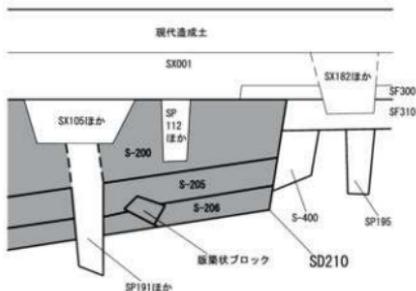
町53次調査区の基本層序は、以下のように大別される。（第1図）

1. 褐灰色砂質土（標高約5.9～7.0m・層厚約0.5～1.5m）現代造成土
2. 黒褐色粘質土～褐灰色砂質土（標高約5.2～5.4m・層厚約0.2m）遺物包含層
3. 褐灰色砂質土～灰褐色硬質土ほか（検出標高約5.1～5.2m）遺構検出面
4. 黄灰色砂質土～黄灰色細粒砂（検出標高約2.7～5.0m）基盤層

既往の周辺調査の成果から、当調査区においては、ともに南北方向に延びる万寿寺西側堀・南北街路の一部が検出されることが想定されたため、1.現代造成土～2.遺物包含層上層までは、重機による掘削をおこない、それより下位の遺物包含層下層は、人力掘削をおこなった。

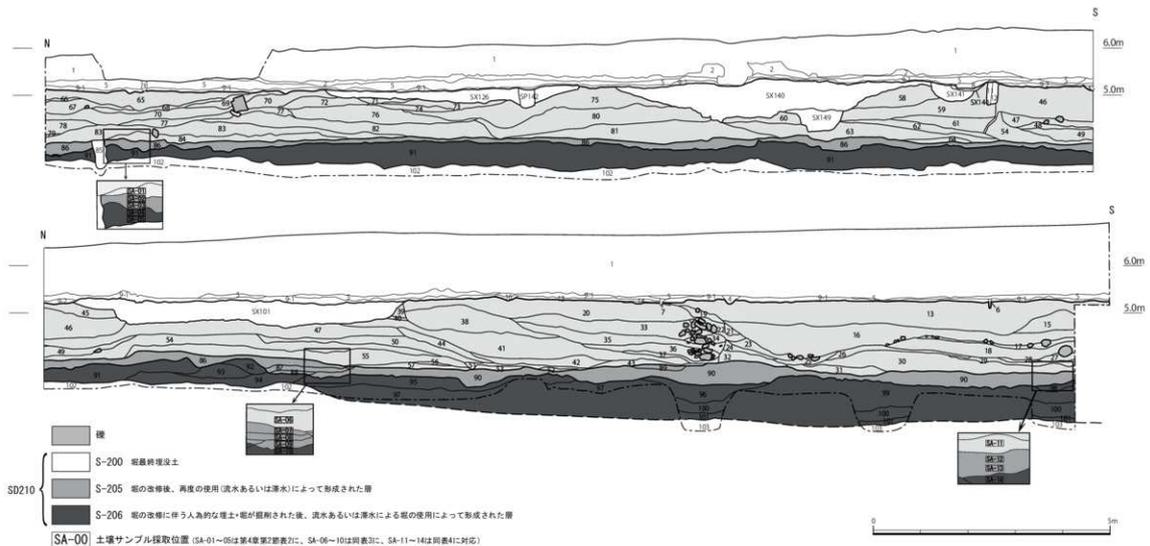
遺物包含層においては、土層観察より、水田層とみられる土壌化した土層（2.上層の黒褐色粘質土）およびマンガン・鉄分を多量に含む水田層床土とみられる土層（2.下層の褐灰色砂質土）が観察されたが、調査区の制約のため、現状では水田層と積極的に判断することができず、その可能性を指摘するに留め、これらを遺物包含層（SX001）として取り扱う。

遺物包含層の下位からは、調査区内を南北方向に延びる堀跡（SD210）・道路状遺構（SF300・310）、それらを掘り込む土坑状遺構（SX105ほか）・ピット（SP112ほか）などが検出された。しかし、大部分が調査区の制約を受け、遺構の全面を検出することができなかった。調査区内全体を占め、かつ調査区外に延びる大規模な遺構である堀跡（SD210）については、調査区の北側・中央・南側に、それぞれ東西トレンチを設定し、土層観察によって、その埋没過程を把握した。



第1図 町53次調査 調査区土層模式図





現代造成土

17 雑炭色砂土

S200

2 黄褐色粘土

3 灰褐色砂土

4 暗褐色粘土

5 雑炭色砂土(鉄分・マンガノク少量, 径0.1~0.3mm鉄土多量)

6 雑炭色砂土

7 雑炭色砂土(径0.1~0.3mm鉄土多量)

8 茶灰色砂土(径0.1~0.3mm鉄土多量, 径1.0~3.0mm炭化物多量)

9 灰褐色砂土(径0.1~0.3mm鉄土多量, 鉄分・マンガノク少量)

10 雑炭色砂土(鉄分・マンガノク少量)

11 黄褐色砂土(径1.0mm程度鉄土多量, 径1.0mm程度炭化物少量)

12 茶灰色砂土(径1.0mm程度黄褐色土ブロック多量)

S-200

13 雑炭色砂土(径0.1~0.3mm鉄土少量, 径1.0~3.0mm炭化物多量)

14 雑炭色砂土(径0.1~0.3mm鉄土多量)

15 灰褐色砂土(径0.1~0.3mm鉄土・炭化物少量)

16 暗褐色粘土(径0.2~0.5mm鉄土多量, 炭化物少量)

17 黄褐色砂土(径0.5~1.0mm鉄土・炭化物少量)

18 雑炭色砂土(径0.3~0.5mm炭化物少量)

19 雑炭色砂土(径0.1~1.0mm鉄土多量, 径1.0mm程度炭化物少量, SX133)

20 雑炭色砂土(径0.3~0.5mm鉄土少量, 径0.1~0.3mm炭化物多量)

21 暗褐色粘土(径0.1~1.0mm鉄土(径0.1~0.3mm炭化物多量, SX133))

22 暗褐色粘土(径0.1~0.5mm鉄土少量, 径0.1mm程度炭化物多量)

23 雑炭色砂土(径0.1~0.5mm鉄土少量, 径0.1~1.0mm炭化物少量)

24 灰褐色砂土

25 雑炭色粘土

S201

26 茶灰色砂土

26 暗褐色粘土(径0.1~0.3mm鉄土多量)

27 雑炭色砂土

28 灰褐色粘土(径0.1~1.0mm炭化物少量)

29 暗褐色粘土(径0.1~0.3mm炭化物多量)

30 暗褐色粘土(径0.1~1.0mm炭化物多量)

31 灰褐色砂土(径0.1~1.0mm鉄土多量)

32 暗褐色粘土(径0.5~1.0mm鉄土少量)

33 暗褐色粘土(径0.3~0.5mm鉄土多量, 径0.5~1.0mm炭化物少量, SX133)

34 暗褐色粘土(径0.3~0.5mm炭化物多量, SX133)

35 暗褐色粘土(径0.1~0.3mm炭化物多量, SX133)

36 暗褐色粘土(径0.1~0.3mm炭化物多量, SX133)

37 暗褐色粘土

38 灰褐色砂土(径1.0~2.0mm鉄土多量)

39 茶灰色砂土

40 暗褐色粘土(径0.3~0.5mm鉄土多量)

41 暗褐色粘土(径0.3~0.5mm鉄土・炭化物多量)

42 暗褐色粘土

43 暗褐色粘土

44 暗褐色粘土(鉄分・マンガノク中量)

45 暗褐色粘土(径0.5~1.0mm鉄土少量)

46 暗褐色粘土(径0.1~0.3mm鉄土・炭化物多量)

47 暗褐色粘土(径0.5~1.0mm鉄土・炭化物多量)

48 暗褐色粘土(径0.3~0.5mm炭化物多量)

49 暗褐色粘土

50 暗褐色粘土(径0.3~0.5mm鉄土)

51 暗褐色粘土(径0.3~0.5mm鉄土, 径0.1~0.3mm炭化物多量)

52 暗褐色粘土(鉄分・マンガノク少量)

53 灰褐色砂土(鉄分・マンガノク少量)

54 灰褐色砂土(径0.1~1.0mm鉄土多量)

55 暗褐色粘土(径0.3~0.5mm鉄土・炭化物多量)

56 雑炭色砂土

57 暗褐色粘土

58 暗褐色粘土(径0.3~0.5mm鉄土少量)

59 暗褐色粘土(径0.3~0.5mm鉄土, 径0.1~0.3mm炭化物多量)

60 暗褐色粘土(径0.1~0.3mm鉄土多量)

61 暗褐色粘土(径0.1~0.3mm鉄土多量)

62 暗褐色粘土(径0.1~0.3mm鉄土)

63 暗褐色粘土(径0.1~0.3mm鉄土多量, 径0.1~0.3mm炭化物多量)

64 暗褐色粘土(径0.3~0.5mm鉄土)

65 暗褐色粘土(径0.3~0.5mm鉄土)

66 暗褐色粘土(径0.3mm程度鉄土少量)

67 暗褐色粘土(径0.1~0.3mm鉄土・炭化物多量)

68 暗褐色粘土(径1.0mm程度鉄土, 径2.0mm程度炭化物多量)

69 暗褐色粘土(暗褐色砂土ブロック中量)

70 暗褐色粘土(径0.3~0.5mm鉄土)

71 暗褐色粘土(径0.3~0.5mm炭化物多量)

72 暗褐色粘土(径0.1~0.3mm鉄土・炭化物多量)

73 黄褐色砂土(径0.1~0.3mm鉄土・炭化物多量)

74 暗褐色粘土(暗褐色砂土ブロック少量)

75 暗褐色粘土

76 暗褐色粘土(暗褐色砂土ブロック中量)

77 暗褐色粘土

78 暗褐色粘土(暗褐色砂土ブロック少量)

79 暗褐色粘土(鉄分・マンガノク少量)

80 暗褐色粘土(径0.1~0.3mm鉄土多量・炭化物多量)

81 暗褐色粘土(径0.5~1.0mm鉄土中量)

82 暗褐色粘土(黄褐色粘土ブロック少量)

83 灰褐色砂土(径0.5~1.0mm鉄土少量)

84 暗褐色粘土(径0.5~1.0mm鉄土少量, 径0.1~0.3mm炭化物多量)

S-205

85 暗褐色粘土

86 暗褐色粘土(鉄分・マンガノクブロック多量)

87 暗褐色粘土(径0.1~0.3mm炭化物多量)

88 灰褐色粘土(粘土)

89 暗褐色粘土(鉄分・マンガノクブロック少量)

90 灰褐色粘土(鉄分・マンガノク多量, 黄褐色粘土・暗褐色粘土ブロック多量)

S-206

91 暗褐色粘土(黄褐色粘土ブロック中量, 鉄分・マンガノク少量)

92 暗褐色粘土(黄褐色粘土ブロック少量, 鉄分・マンガノク少量)

93 暗褐色粘土(暗褐色粘土ブロック中量, 鉄分・マンガノク少量)

94 暗褐色粘土(暗褐色粘土ブロック少量)

95 暗褐色粘土

96 暗褐色粘土(暗褐色粘土ブロック多量)

97 黄褐色粘土

98 暗褐色粘土(径0.3~0.5mm炭化物多量)

99 暗褐色粘土(灰褐色粘土ブロック少量)

100 灰褐色粘土(灰褐色粘土ブロック中量)

101 暗褐色粘土

基礎層

102 黄褐色粘土

103 暗褐色粘土

第3図 町53次調査 調査区東壁土層断面図(1/80)

遺物の取り上げは、各遺構については、S番号ごとにおこない、堀跡（SD210）については、上述の東西トレンチにおける土層観察の結果から、埋土を大きく3層に分け、S-206→S-205→S-200（旧→新）とS番号を付し、グリッドごとに取り上げをおこなった。また、堀跡（SD210）埋土の遺物取り上げの層を確認・対応するために、上述の3本の東西トレンチに加え、グリッドごとに東西サブトレンチを設定した。なお、調査区の制約上、土層観察トレンチは、基盤層まで一挙に掘り進むことができなかったため、S-200は調査段階において、S-200上層・中層・下層（S-200-1・2・3）と、それぞれに遺物の取り上げをおこなったが、共通する土質であり、ほぼ同時に堆積した状況が遺構掘削を進めるのちに確認されたため、整理・報告においては、一括してS-200出土遺物として取り扱う。なお、調査段階のS番号については、遺物観察表の備考〈 〉に表記した。

各遺構の形成・埋没過程は、堀の掘削・使用・埋没に関係し、細分されるため、①堀掘削以前に形成された遺構→②堀および堀掘削・使用・埋没に伴う遺構→③堀埋没後の遺構と大きく3分し、以下、古い段階から、各遺構・遺物の報告をおこなう。

### 3 遺構と遺物

#### ①堀掘削以前に形成された遺構の状況（第4・5図）

堀掘削以前に形成された遺構のほとんどは、堀（SD210）により掘削を受けたため、調査区西側において、土坑状遺構（SX400）・ピット（SP195ほか）・道路状遺構（SF310）が、わずかに検出されたのみである。

#### 土坑状遺構（SX400）

SX400（第4図9-L10・第6図）は、その東側が堀（SD210）に掘り込まれるため、その詳細については不明である。検出長径約0.9m、検出短径約0.4m、残存深さ約0.6mを測り、黄茶色細粒砂の基盤層まで掘り込まれる。西側は、ほぼ垂直に掘り込まれ、幅約0.2mのテラスが形成され、そこから、やや急傾斜に掘り込まれる。遺物は、中世以降の所産と考えられる土師器片が出土した。

#### ピット（SP195ほか）

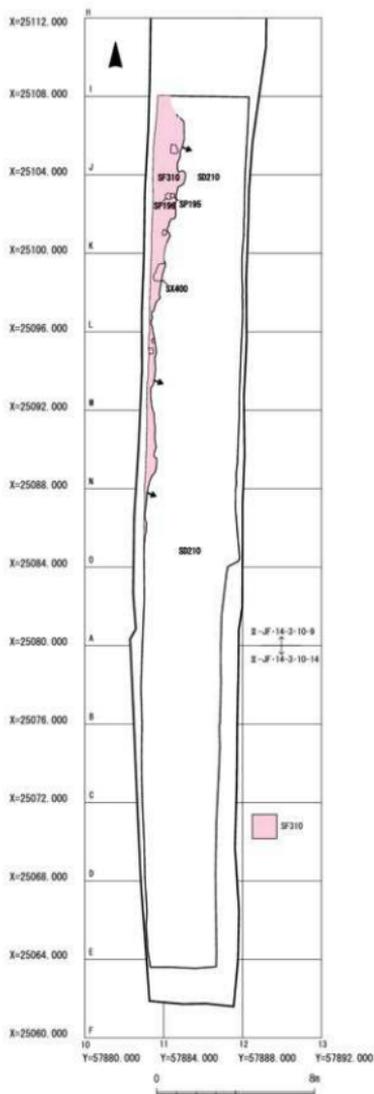
新旧関係（SP196→SP195）があるピットなどが一部検出されたが、その並びや性格についてなどの詳細は不明である。SP195・SP196（第4図9-K11）は、方形を呈する。SP195からは、瓦質土器片が、SP196からは、姫島産黒曜石片・土師器片・瓦質土器片が出土した。

#### 道路状遺構（SF310）

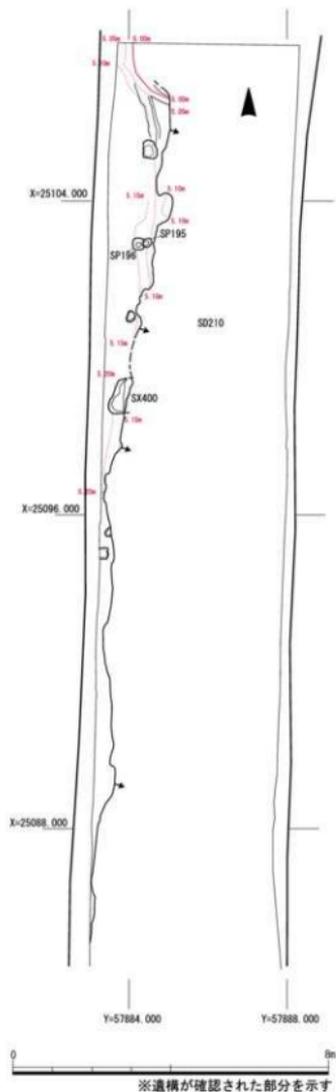
上述した土坑状遺構（SX400）・ピット（SP195ほか）の上位において、道路状遺構（SF310）が検出された。SF310（第4図9-O10～）は、検出幅約0.5～1.7m、検出長約22.5mを測る。SF310は、茶褐色砂質土～灰茶色砂質土で形成され、礫・炭化物を含み、各層が非常に硬く締まる。調査区外に展開することや堀（SD210）に掘削されることなどから、その詳細は不明であるが、現状では、その展開方向・検出位置などから、調査区北側の町51次調査区と、ほぼ同一標高において検出された南北方向の道路状遺構と同一のものであると考えられる。また、SF310の上位には、堀（SD210）が埋没したのちに、SF310と同様の南北方向に展開し、東側に、やや拡張した道路状遺構（SF300）が検出されている。SF300については、後述するが、これら遺構の新旧関係は、SF310→SD210→SF300となる。SF310からは、遺物が検出されなかった。

#### ②堀および堀掘削・使用・埋没に伴う遺構（第7・8図）

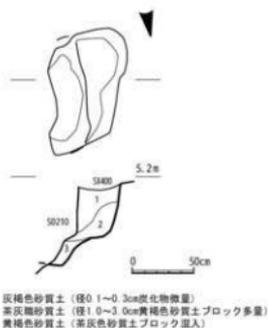
堀および堀掘削・使用・埋没に伴う遺構については、堀（SD210）・石積み遺構（SX133）・ピット（SP157ほか）が、挙げられる。



第4図 町53次調査遺構配置図① (1/250)



第5図 町53次調査遺構平面図① (1/125)



第6図 町53次調査SX400遺構平面・断面図(1/40)

からの掘削深度が約4.0m以上になり、安全管理上の問題から、完掘することができなかった。そのため、9-J10グリッド・9-O10グリッドに段掘りによるサブトレンチを設定し、本調査区内における堀の最大深度および土層対応の確認をおこなった。その結果、堀は北から南に向けて傾斜して掘り込まれたことが確認された。

上述したように、SD210は、その土の堆積状況から、S-206→S-205→S-200と大きく3層に分けられ、以下の3段階が想定される。

### 1. 堀 (SD210) が掘削・使用される段階

SD210は、道路状遺構 (SF310) を掘削し、基盤層である黄茶色砂質土～黄褐色粗粒砂まで掘り込まれる。その後、SD210は、SF310と並存し、使用される。

### 2. 堀 (SD210) が改修・再度使用される段階

基盤層は砂のため、崩れやすく、流水あるいは滞水させるには不適當であったためか、SD210は、0.1～0.5m程度埋められる。この際に、版築状のブロックが廃棄される。SD210の改修後には、滞水あるいは流水によって形成された自然堆積層 (S-205・検出標高約3.8～4.2m・層厚約0.1～0.4m) が確認された。

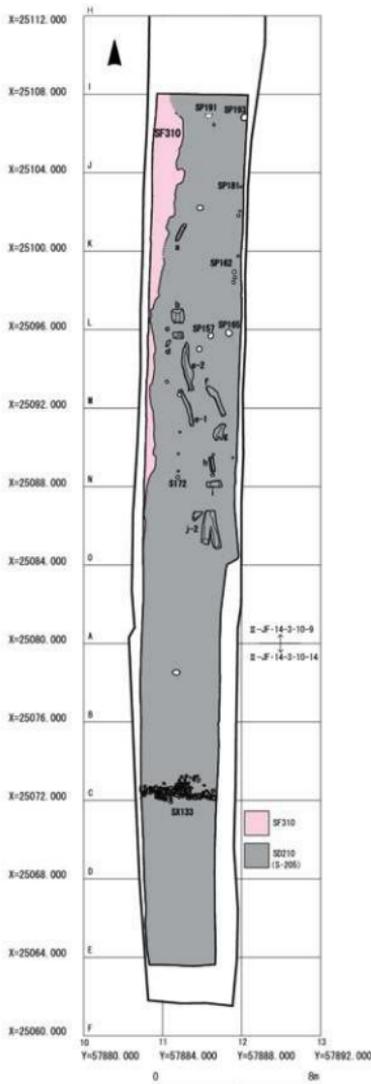
1～2段階にかけて形成されたS-206は、検出標高約3.7～4.5m (層厚約0.1～0.9+m) を測る。S-206の下層においては、流水あるいは滞水による当初の堀使用に伴う水性堆積層 (泥炭質粘質土～灰褐色粗粒砂) の一部が観察され、S-206の上層においては、改修に伴う人為的な埋土堆積層 (褐茶色砂質土～暗褐色砂質土) が観察された。また、S-206には、版築状のブロック (aほか) が多数含まれる。版築状のブロックは、大きいもので、検出幅約0.8m、検出長約2.0mを測り、小さいもので、検出幅約0.2m、検出長約0.4mを測る。その構造は、シルト・砂質土・砂・小礫などで形成された、非常に硬化した互層が形成されている。質の異なる土を突き固めて形成された構築物の一部が廃棄されたものと考えられる。

### 3. 堀 (SD210) が完全に埋められる段階

2段階に、おこなわれた改修により、SD210は、約0.1～0.4m程度、浅くなる。北から南にかけて緩やかに傾斜し、S-205 (水性堆積層) が堆積する。その後、SD210を完全に埋めた人為的な埋土 (S-200) が形成される。最終的には、SD210は、SF310の検出標高と同一の高さまで埋められる。

## 堀 (SD210) (第2・3図)

調査区内のほぼ全体を占める大規模な遺構であり、南北方向に延びる。調査区の制約を受け、全面検出はできず、調査区北西側において、道路状遺構 (SF310) を掘り込む状況が観察されたのみであり、そのほとんどが、調査区外に展開する。堀底についても、南側に一部しか確認することができなかった。周辺調査の成果 (町51次ほか) を勘案すると、本調査区内において、検出されたSD210は、万寿寺の西側堀の一部と考えられる。検出幅約3.0～4.8m、検出長約37.5m、現存深さ約1.5～2.7mを測る。SD210の形状については、北側・南側トレンチの土層断面の観察から、堀西側は、道路状遺構 (SF310)・基盤層 (黄茶色砂質土～黄褐色粗粒砂) をほぼ垂直に掘り込み、幅0.5m程度のテラスが形成され、東側に向けて緩やかに掘り込まれることが確認された。掘り返しについては、不明である。調査区東壁の土層断面の観察から、14-A10グリッド付近より南に向けて、さらに深く掘り込まれる状況が確認されたが、現地表面から



第7図 町53次調査遺構配置図② (1/250)

S-200は、上述したように、遺物の取り上げのため、上層・中層・下層と3層に大別したが、土質は、砂質土とほぼ共通しており、西側から埋め立てられた状況が観察された。

また、S-200が形成される堀の埋め立てに伴い、石積み遺構(SX133)・ピット(SP161ほか)が検出された。

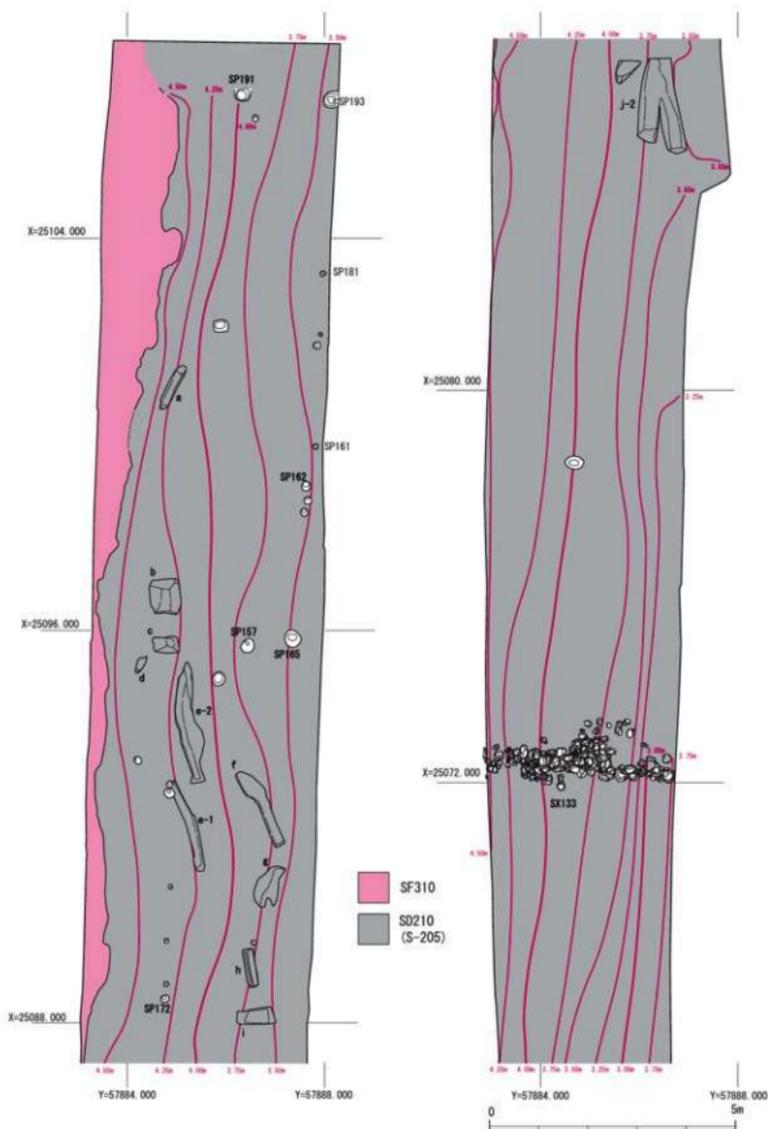
#### 堀(SD210)出土遺物(第9図～第19図)

SD210出土遺物について、上層から下層(S-200→S-205→S-206)の順に、説明をおこなう。

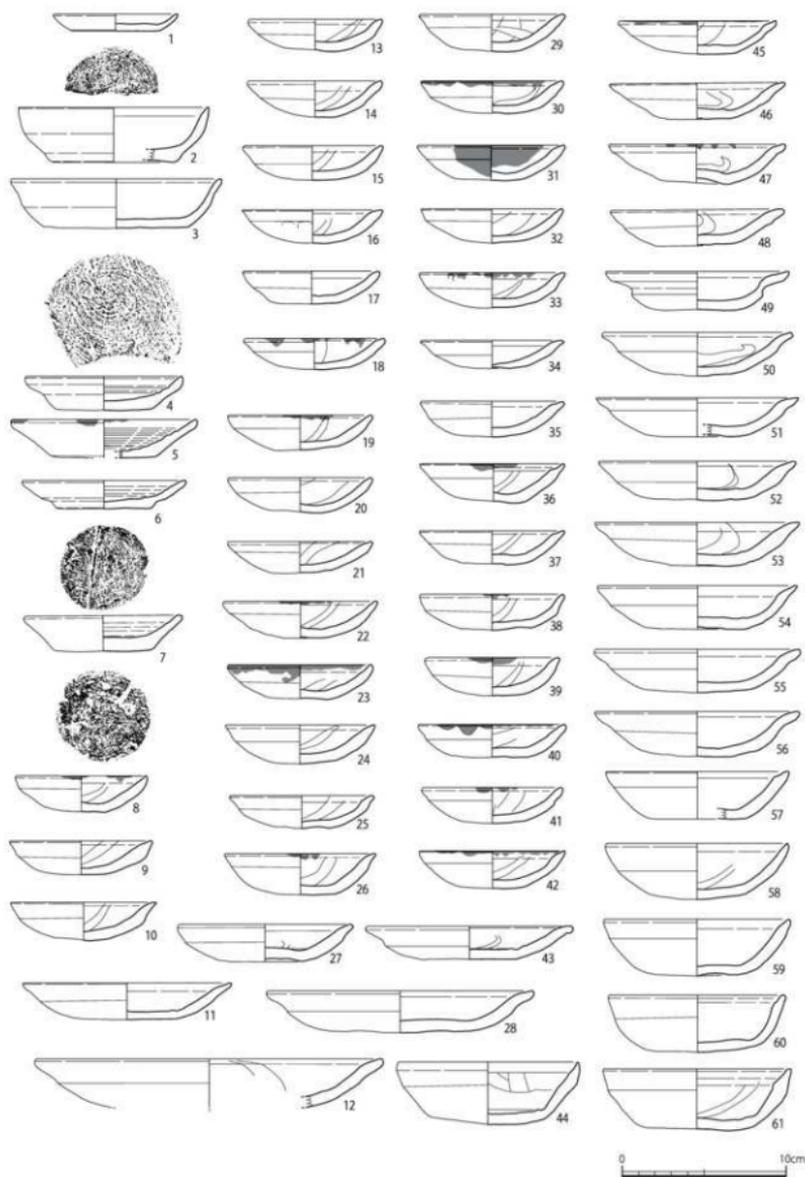
#### S-200出土遺物(第9図～第16図)

1は、土師器小皿。底部は、回転糸切り離し。2～3は、土師器杯。2は、底部は、回転糸切り離し、体部が、やや肥厚し、稜をもつ。口縁端部をつまみあげる。15世紀後半か。3は、底部に糸切り離し後の板状圧痕が観察される。4～7は、いわゆる「ロクロ目」土師器で、体部内面にヨコナデによる2条以上の稜が形成される。体部外面は、明確な稜がみられない。16世紀初頭か。4・5は、杯。5は、口縁部内外面に煤痕跡が観察され、灯明皿に用いられた可能性が指摘される。6は、皿、7は、杯あるいは皿。ともに、底部は、回転糸切り離し。8～61は、内面の最終調整にナデアゲが施される京都系土師器皿。法量に大小あるが、大部分が、堀地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。8・18・19・22・23・26・30・31・33・36・38～42・45・47は、口縁部内外面ほかに煤痕跡が観察され、灯明皿としての使用が推定される。12は、堀地編年第1期に相当し、16世紀中頃以降に比定されるか。15・24・28は、2次被熱により黒化する。44・60・61は、口縁端部をつまみあげ、ほかの京都系土師器皿に比べて器高が高く、深い壘型を呈する。内面の最終調整に、ナデアゲを施すなど京都系土師器皿の技法でつくられる。60は、河野「g類」のG-2類に相当し、16世紀後半に比定される。44・61は、河野「g類」のG-3類に相当し、16世紀末に比定される。57・59は、堀地編年第3期に相当し、16世紀末に比定される。

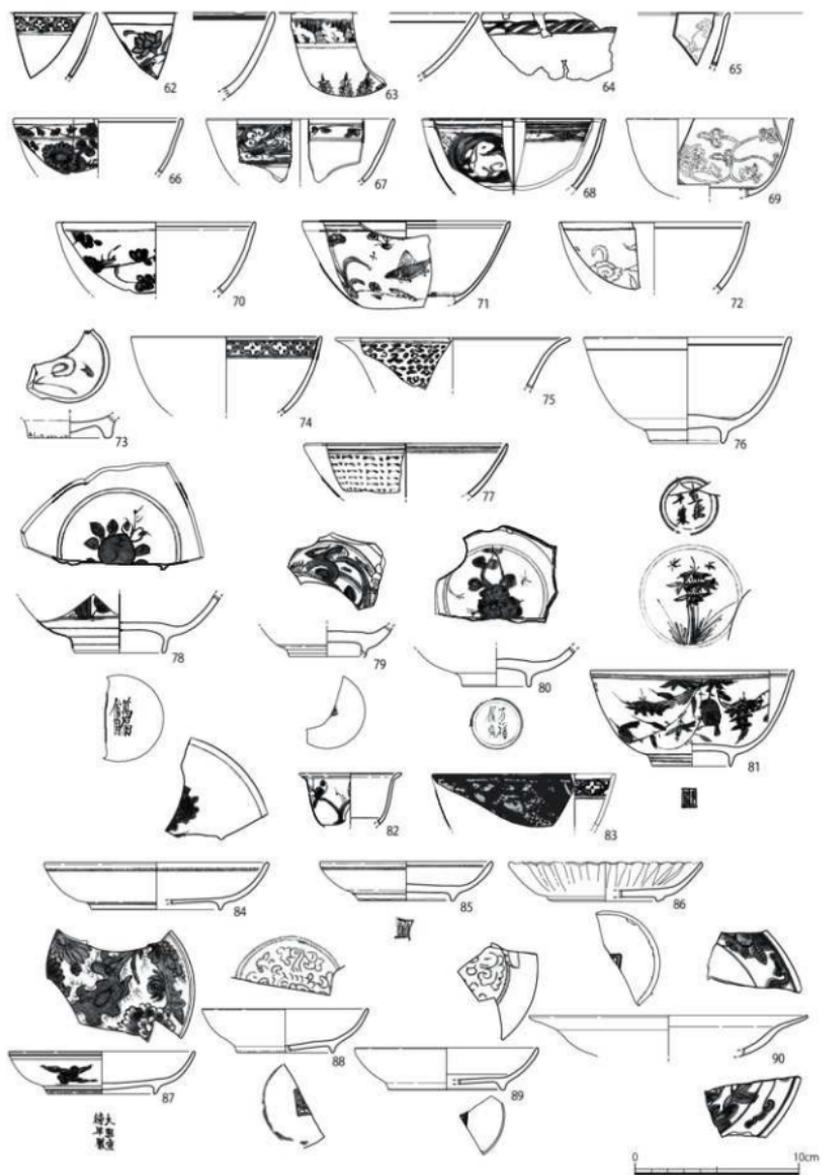
62・68は、景徳鎮窯系五彩。62は、碗あるいは皿の口縁部片。内面に、「四方禪文」が染付けで描かれる。外面に、「蓮」・「水禽」などを上絵具で絵付けし、再び焼かれる。68は、碗の口縁部から体部片。口縁部下内外面の1条界線を染付けで描いたのち、施釉する。内面に、「四方禪文」を、外面に、「兔」・「格子文」などを上絵具で絵付けし、再び焼かれる。64・73は、漳州窯系青花碗。胎土が陶質に近く、釉は灰色が強く、やや不透明であり、細かい貫入はいはいる。呉



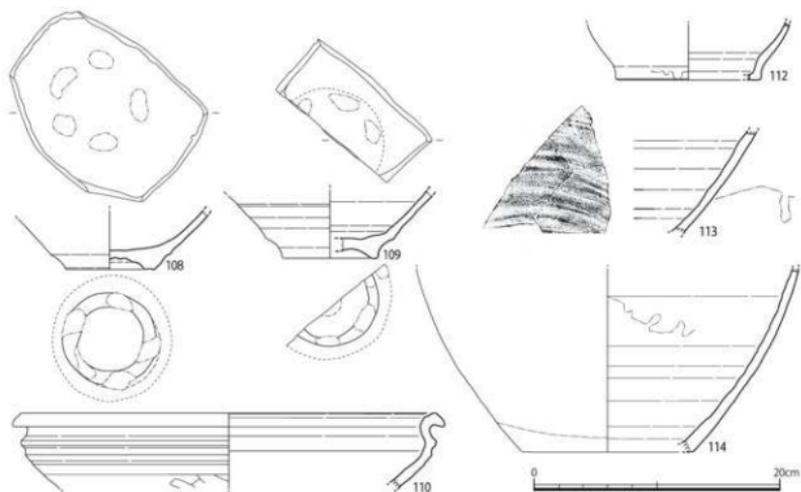
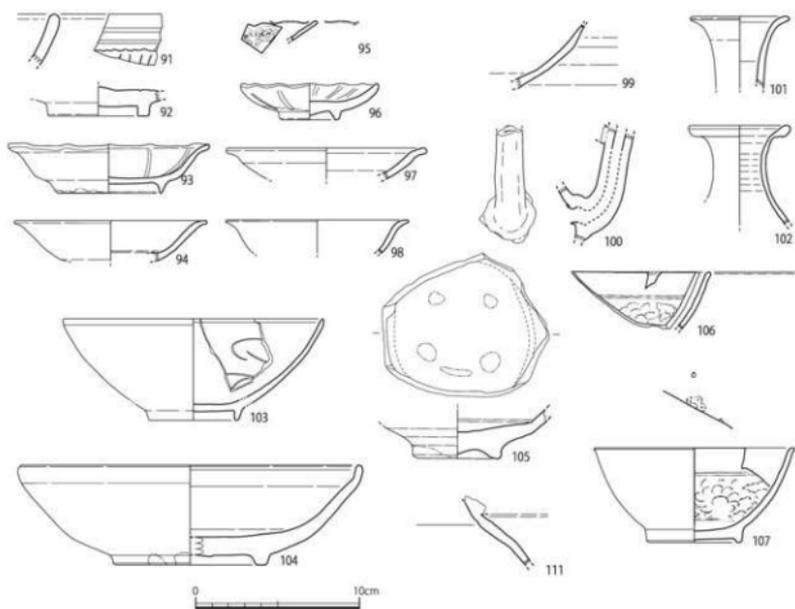
第 8 図 町 53 次調査遺構平面図② (1/100)



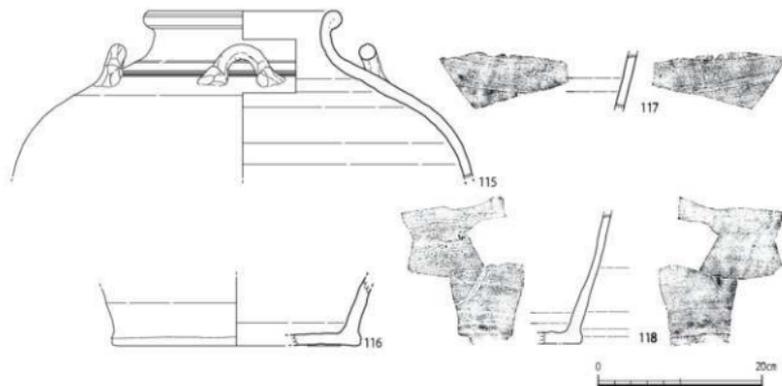
第9図 町53調査S-200①出土遺物実測図(1/3)



第10図 町53次調査 S-200 ③出土遺物実測図 (1/3)



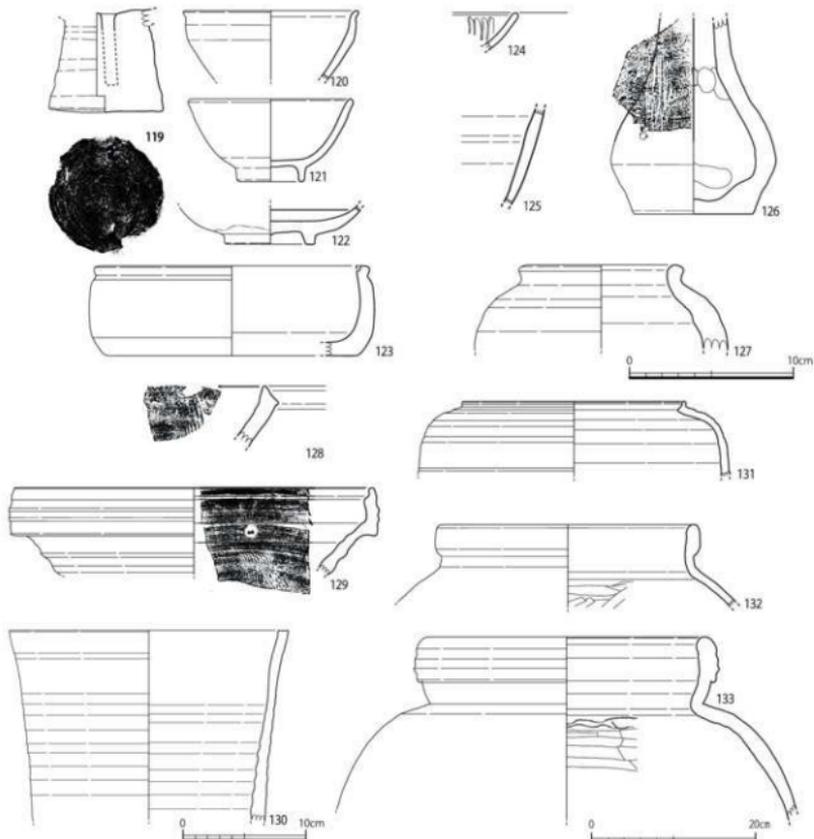
第 11 図 町 53 次調査 S-200 ③出土遺物実測図 (91 ~ 109・111 1/3・110・112 ~ 114 1/4)



第12図 町53次調査5-200④出土遺物実測図(1/6)

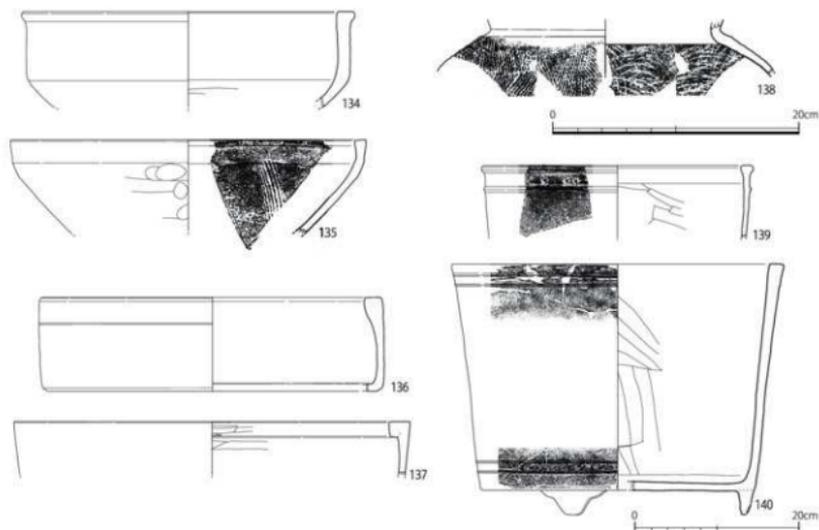
須の発色も鈍く、文様も単純化されている。64は、口縁部片。73は、高台片。高台内まで施軸され、甗付には砂・植物繊維が付着する。見込みには、「福」と推定される吉祥字が染付けて書かれる。16世紀末に比定される。63・65～67・69～72・74～82・84～90は、景徳鎮窯系青花。文様の輪郭線を描いたのちに、そのなかを呉須で塗りつぶす描法が観察される。63・65～67・69～72・74～81は、碗。63は、外面に、「波涛文」・「芭蕉葉文」が染付けて描かれる。小野分類染付碗C群に相当し、15世紀後半以降に比定される。65・69は、内面に、「蓮華唐草文」がスタンプにより施文されたのちに、施軸される。外面は無文。69は、見込み境に染付けて1条界線が描かれる。66は、外面に「菊花文」が染付けて描かれる。67は、外面に、「如意雲文」が、内面に、「唐草文」が染付けて描かれる。70は、外面に、「草花文」が染付けて描かれる。71は、外面に、「水草」・「魚」などが染付けて描かれる。72は、外面口縁部下に1条界線を染付けて描き、体部に「草花文」を櫛描きしたのちに、施軸する。櫛描きした「草花文」に釉が溜まり、文様効果がみられる。74は、内面に、「四方禪文」が染付けて描かれるが、外面は、文様が施されない。75は、外面に、丸を3つ結合した文様と「人」字状の文様を交互に、染付けて描く。口縁部が外反する。76は、高台内の重圏内に「宣徳年製」の2行4字路が染付けて記される。甗付の釉を剥く。2次被熱のため、軸変する。「饅頭心」碗の小野分類染付碗E群に相当し、16世紀中頃以降に比定される。77は、外面に「点」と「線」を組みあわせて連続する文様が染付けて、描かれる。小野分類染付碗C群に相当し、15世紀後半以降に比定される。78～81は、見込みが盛り上がる形態を呈する「饅頭心」の高台で、小野分類染付碗E群に相当し、16世紀中頃以降に比定される。甗付の釉を剥く。78は、染付けて、見込みの重圏内に「桃」が描かれ、高台内中央に、「萬福攸同」と4字の吉祥句が記されている。79は、見込みの重圏内に「蛟龍文」が、高台内に字款(判読不明)が染付けて描かれる。80は、染付けて、見込みの重圏内に、「草花文」が描かれ、高台内の重圏内に「万福攸同」と吉祥句が記されている。塗りつぶしにより、文様の輪郭線が判別できず、呉須の発色は、暗緑色を呈する。81は、染付けて、見込みの重圏内に、「竹」・「虫」が、外面に「竹」・「鳥」が描かれる。高台内に、字款状に判読不明の推定4字路が染付けて記される。82は、小坏。口縁部が、短く外反する。体部外面に、「樹木」が染付けて描かれる。83は、景徳鎮窯系紅地金襴手宝相華文碗の口縁部片。透明釉を施したのちに、鉄紅顔料を外面にかけ、低温で再度焼成したのち、宝相華文を金彩する。「第5章 まとめ」において、詳述する。

84～90は、皿。84・85・87は、小野分類染付皿E群に相当し、16世紀後半以降に比定される。甗付の釉を剥く。84は見込みに、染付けて「菊花文」が描かれる。85は、高台内中央に、四角に枠取りして「福」の吉祥字が染



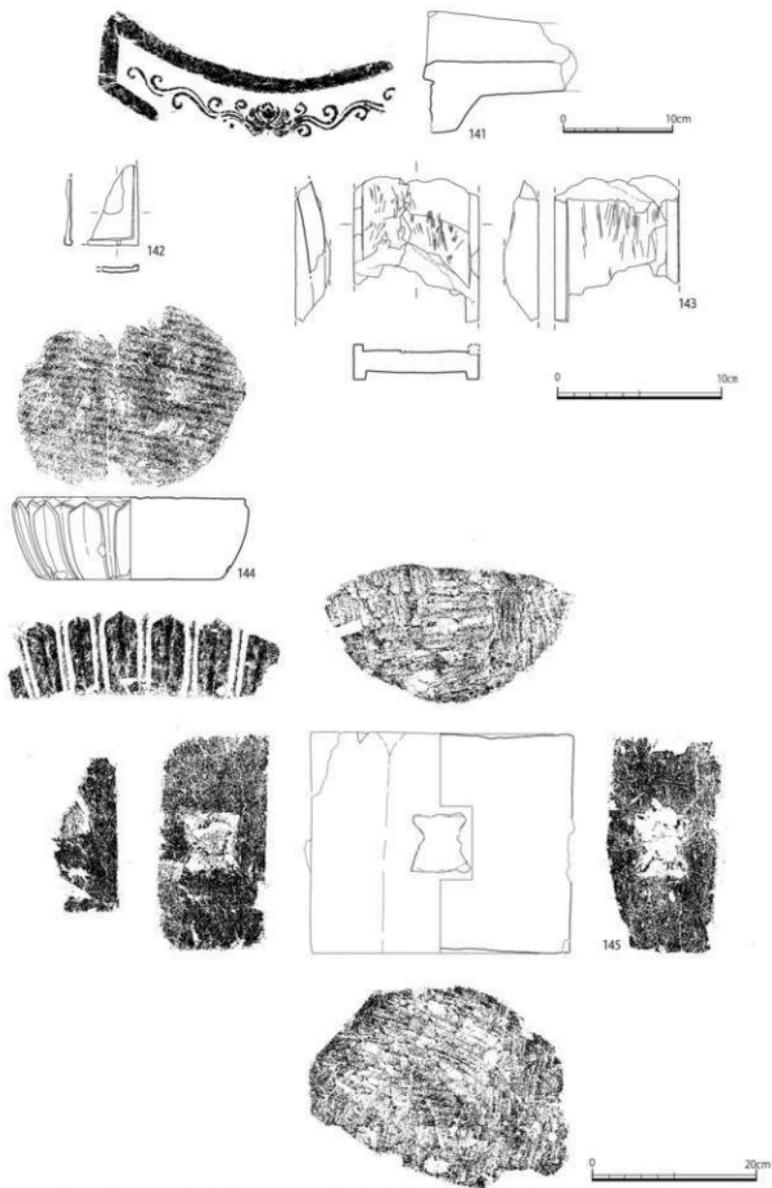
第13図 町53次調査S-200⑤出土遺物実測図(119～127 1/3・128～130 1/4・131～133 1/6)

付けて記される。87は、染付けで、見込みに「花卉」などが、体部外面に「雲文」が描かれ、高台内中央に「大明宣徳年製」の2行6字路が記される。86は、輪花皿。畳付は、軸が剥ぎとられ、砂粒が付着する。型押しによって、体部内外面に花卉状の、口縁部に輪花状の模が形成される。高台内中央に、字款状の2重枠が、染付けで記されている。88・89は、見込み中央に、「花文」が柳描きによって描かれる。柳描きした「花文」に軸が溜まり、文様効果がみられる。高台内に染付けで字款状の路が記される。畳付は、軸が剥ぎとられ、砂粒あるいは植物繊維が付着する。88は、「(□□□)器」と判読できる。90は、体部が丸く内湾し、口縁部は広く平坦面をつくり反する。いわゆる「鈎皿」、小野分類染付皿F群に相当し、16世紀末以降に比定される。内面の口縁平坦部に「瑞果文」が、外面に「草花文」が、染付けで描かれる。91～93は青磁。91は、碗の口縁部片。外面に、蓮弁が柳描きされる。蓮弁の先端は簡略され、波状に描かれる。軸調・胎土などから龍泉窯系以外の産地と推定される。92は、碗の高台片。畳付の一部まで軸がかかり、高台内は、露胎となる。軸調は、透明軸に近い緑灰色

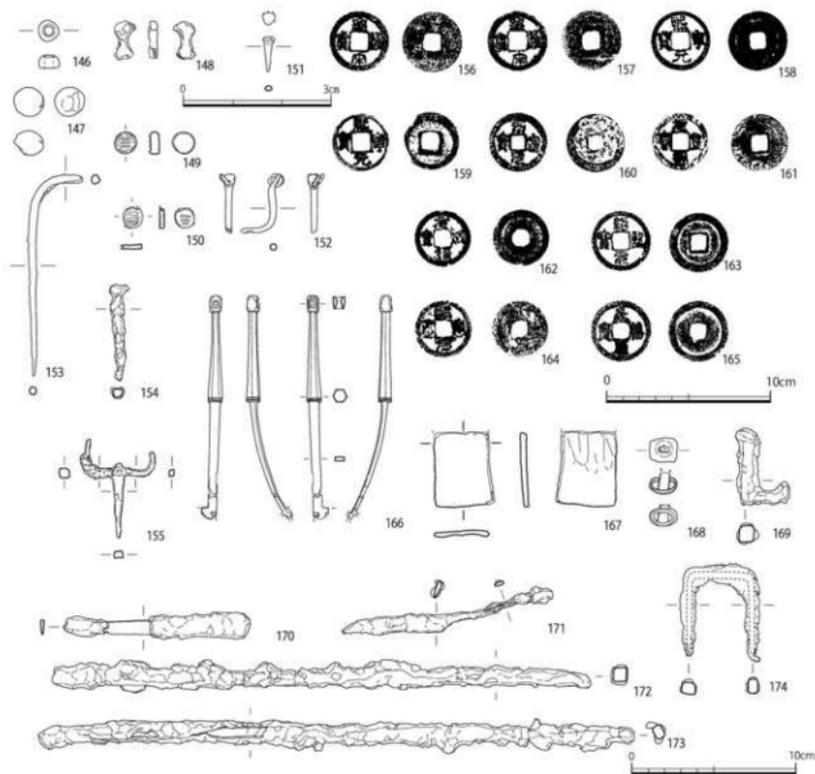


第14図 町53次調査 S-200 ⑥出土遺物実測図 (134・135・138 1/4・136・137・139・140 1/6)

を呈する。胎土は、淡褐茶色を呈し、陶質に近い。焼成不良の龍泉窯系青磁と推定される。93は、景徳鎮窯系青磁稜花皿。型押しにより、口縁部・体部が復元8稜の花弁状を呈し、口縁部が外反する。口縁部から体部にかけての内外面は、浅緑黄色の釉が、高台内は白灰色の釉が施される。畳付は、釉を剥ぐ。94～98は、中国産白磁皿。94・97・98は、口縁部が外反する皿片。森田分類白磁E群に相当し、16世紀代に比定される。95は、稜花小皿の口縁部片。内面に、型押しによって、花文が表現され、口縁部が輪状を呈する。口縁部内外面は、釉を剥ぐ。96は、稜花皿。口縁部・体部内外面に、篋状工具によるケズリ調整により、「花文」が表現され、口縁部が輪状を呈する。高台内の一部まで施軸され、見込み境は輪状に釉を剥ぎ取る。2次被熱による釉変が観察される。99は、産地不明陶磁器碗の体部片。胎土・形態が、中国産天目碗に類似するが、内外面ともに施軸されない。100は、中国華南産緑釉陶器水注の注口部片。注口先端に突起状の残存個所がみられるため、そこから梁が延び、肩部上面あたりに接着すると考えられる。注口と瓶が梁で結ばれる褐釉陶器水注などと類似する器形が想定される。101・102は、朝鮮産陶器瓶の口縁部片。器壁が薄い。いわゆる、「船徳利」。16世紀代に比定される。102は、口縁部が肥厚する。103は、中国産白磁碗。体部内面に「草花文」が櫛を用いて描かれ、施軸される。口縁部内外面は、釉を剥ぐ。胎土は、やや陶質に近く、釉調も透明釉に近い白灰色を呈しており、16世紀代に比定されるものかとする。104は、中国産と推定される青磁鉢。高台は削り出され、断面が方形を呈する。高台内中央は逆台形状に削り残す。底部から大きく開き、腰部に稜をつくりながら立ち上がる。口縁部は、上方に揃み上げる。高台外面まで施軸され、畳付から高台内にかけては、露胎である。釉調は、緑灰色を呈し、内外面に、細かい貫入が観察される。胎土は、陶質に近い。105は、朝鮮王朝産白磁皿あるいは碗の高台片。体部下の外面に稜を、見込み境に1条の沈線を形成し、立ち上がる。緩い逆台形状に、高台を削り出し、高台内中央は、削り残す。見込みに、目痕が残る。青白色の釉は、畳付の一部までかかる。高台内に、焼成時の剥割れが、施軸部に貫入が観察される。106・107は、ベトナム産白磁印花碗。106は、口縁部片。破断面に黒漆とみられる付着物が観察されるため、漆漉ぎによる補修がおこなわれた、と考えられる。107は、高台内を平坦

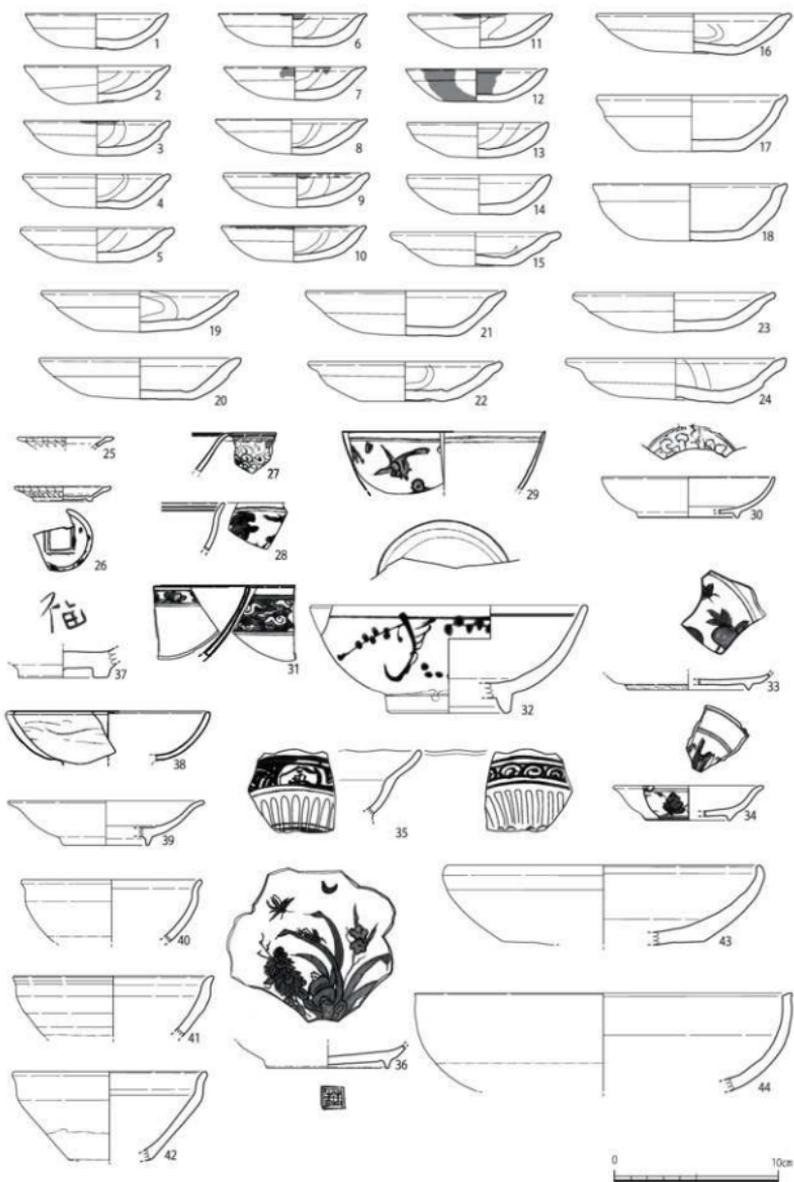


第 15 図 町 53 次調査 S-200 ㊦出土遺物実測図 (142・143 1/3・141 1/4・144・145 1/6)

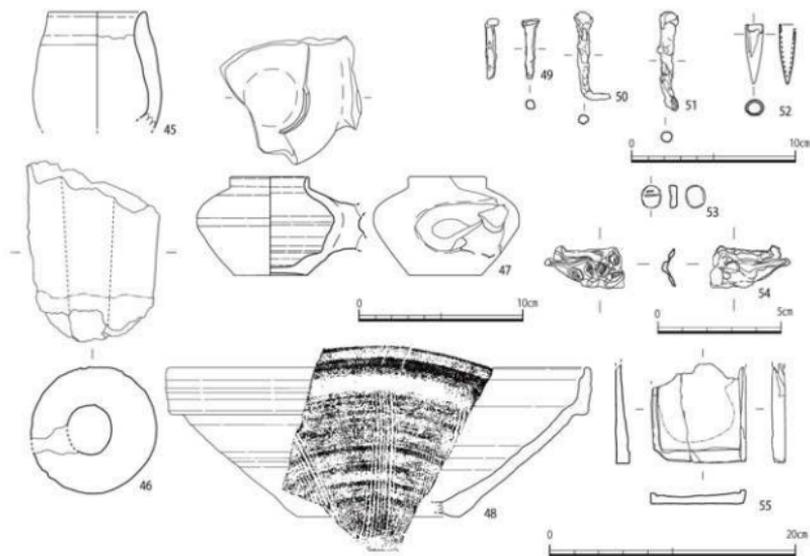


第16図 町53次調査S-200◎出土遺物実測図(146・148・151 1/1・147・149・150・152・153・156～165 1/2・154・155・166～174 1/3)

に浅く、高台外側面は高く削り出す。畳付は、面取りをおこない、断面が逆台形状を呈する。体部が、やや内湾しつつ、立ち上がり、口縁端部は、わずかに外反し、揃み出す。高台内は、露胎で、畳付と口縁端部は、軸が削られる。胎土は陶質に近い。軸調は透明に近く、細かい貫入が観察される。見込みに、目痕が残る。体部内面に、「草花文帯」を見込み中央に、「花卉」を、陽刻の型押しで施文する。外面は、施文されない。16世紀末葉とされる町12次SX01出土の北部ベトナム産と推定される白磁碗に類似する。108・109は、朝鮮王朝産灰青釉陶器碗の体部片。いわゆる「雑軸」。高台内・脇を削りこみ、高台は、緩い逆台形状を呈する。高台内まで施軸される。見込みと畳付に目痕が観察される。110は、タイ産メナムノイ窯系統焼陶器鉢。「第5章 まとめ」において詳述する。111～114は、中国南方産褐釉陶器壺。111は、口縁部から肩部片。2次被熱による軸片が観察される。破片であるが、町53次SX133出土資料に類似する。112は、中国南方産褐釉陶器壺の底部片。軸調は、内面が、褐茶色を、外面が暗褐茶色を呈する。底部は、露胎である。破片のため、全形状などの詳細は不明であるが、胎土・軸調などから、16世紀末に廃絶されたとされる町3次SK025出土の上げ底状を呈する壺と類似



第 17 図 町 53 次調査 S-205 ①出土遺物実測図 (1/3)



第18図 町53次調査 S-205②出土遺物実測図 (45～47・49～52 1/3・48・55 1/4・53・54 1/2)

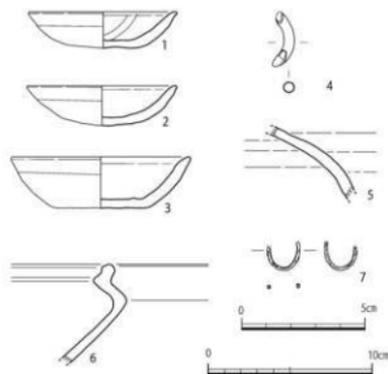
する。113・114は、中国南方産褐釉陶器壺の体部片。釉調は、外面が暗黄緑色を、内面が褐茶色を呈する。外面体部下半で、釉を剥く。112に比べて、胎土は軟質で、褐色粒子を含み、黒色粒子がみられない。

115～118は、タイ産メナムノイ窯系統締締陶器四耳壺。115は、口縁部から頸部片。頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部が強く外反し、玉縁状に肥厚する。頸部と肩部の境に、断面が三角形を呈する1条の凸線が削り出される。肩部には3条の凹線を削り出し、やや丸みを帯びる横耳を貼り付ける。外面に、黄灰色を呈する釉が施される。高島分類1類に相当する。1587年の島津氏府内侵攻に伴うとされる町3次SX210出土一括資料に類似する。116・118は、体部から底部片。平底を呈し、やや外面に張り出す。外面は、赤褐色を、内面は、赤茶色を、底面は、黄灰色を呈し、胎土に含まれる黒色粒子が顕著である。116の底部には、粘土塊が溶着しており、重ね焼きの痕跡と推定される。117は、体部片。内外面に、横方向のケズリ調整が観察される。

119は、土師質土器燗台。底部は、回転糸切り離し。皿部は、ナデ調整が観察され、台部の側面には、ヨコナデ調整による稜が2条以上形成される。皿部見込み中央に孔が穿たれるが、底部まで貫通はしない。色調は淡橙茶色を呈する。田中分類土師器燗台A2類に相当し、16世紀第2～3四半期に比定される。120は、瀬戸・美濃産天目碗の口縁部から体部片。口縁部が稜をつくり立ち上がり、やや外反する。藤沢編年大窯第4段階に相当し、16世紀末に比定される。121は、瓦質土器碗。高台が高く、腰部がやや張り、口縁部まで直線的に立ち上がる。ミガキ調整により器面を平滑に仕上げる。還元焙焼成を指向するが、燻しをおこなわず、色調が橙褐色を呈する。122は、国産と推定される青磁皿の底部片。調整・胎土・釉調から、17世紀後葉に比定される肥前磁器と考えられる。調査区の制約上、混入したものか。123は、備前焼鉢。底部は平底を呈する。底部から直立気味に立ち上がり、口縁部下に沈線を巡らせる。口縁部上面は平坦に仕上げる。形状から、「建水」などの茶道具と推定される。124は、瀬戸・美濃産卸皿の口縁部片。125は、産地不明の陶器壺あるいは壺の体部片。釉調は、光沢のある黄緑色を呈する。126～133は、備前焼。126は、瓶。平底を呈する。外面頸部から



第19図 町53次調査S-206出土遺物実測図 (1~21・23・24・26~28 1/3・22・25 1/4  
 29~31 1/2)



第20図 町53次調査SD210出土遺物実測図

(1~6 1/3・7 1/2)

頸部が直立し、口縁部は縦長の玉縁状を呈する。口縁部外面は平滑に仕上げられる。乗岡編年中世5期に相当し、15世紀後半以降に比定される。133は、肩部が132よりも張り、頸部屈曲部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。口縁部は縦長の玉縁状を呈し、外面はヨコナデによる2条以上の稜が形成される。頸部屈曲部内面に、粘土紐接合痕が観察される。乗岡編年近世1期に相当し、16世紀末に比定される。

134~137・139・140は、瓦質土器。134・136・137・139・140は、還元焼成を指向するが、煙しをおこなわず、器面あるいは断面が橙茶色を呈する。134は、鉢。体部が直立し、口縁部は外方にややつまみ出し、口縁端部上面に平坦面をつくる。体部内面下半に、工具ナデ調整が観察されるが、体部上半内面から外面にかけては、ミガキ調整により器面を平滑に仕上げる。135は、掃鉢。口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁端部を平坦に仕上げる。1単位6条の掃目が観察される。小柳分類IV期に相当し、16世紀前半から中頃に比定される。136は、火鉢。底部から口縁部にかけて直立し、口縁部は内面に肥厚し、口縁端部上面に平坦面をもつ。口縁部下に1条の沈線がみられ、底部に離れ砂の痕跡が観察される。137は、火鉢の口縁部片。口縁部は、内面に折り肥厚させ、断面が方形を呈し、口縁端部上面に平坦面がつくられる。内外面ともにミガキ調整により器面を平滑に仕上げる。138は、東播系須恵器製の肩部片。外面に格子目の叩き痕が、内面に当て具痕が観察される。139は、火鉢の口縁部片。口縁部下に、1条の突帯を貼り付け、「菊花文」をスタンプにより施文する。140は、三脚の火鉢。口縁部下と体部下半に2条の突帯が、それぞれ削り出される。口縁部下の突帯内に2個一組の「雷文」が、体部下半の突帯内に2個一組の「双頭藤手飛雲文」が、スタンプで施文される。底部に離れ砂の痕跡が観察される。

141は、軒平瓦。瓦当面の中心飾りは「蓮華文」、上向き・下向き「唐草」が各々3つ、明瞭に施文される。瓦当外縁上端面に、幅1.2cm程度の面取りが観察される。頸部瓦当裏面は、ヨコナデ調整がおこなわれる。向かって、左端において、縦方向に圍繞の一部がみられるが、上端・下端には、みられないことが、この型の特徴と考える。町6次SX023出土資料に、共存遺物から14世紀代に比定される蓮華唐草文軒平瓦があり、同型とみられる。胎土に、石英とみられる白色粒子が含まれており、海部郡産と推定される。142・143は、石硯。ともに、硯材は、輝緑凝灰岩。山口県産のいわゆる「赤間石」。142の石質は、143ほかの「赤間石」に比べて、やや粗悪である。142は、大半が欠損するが、縁角の形状から、長方形を呈すると推定される。硯面中央に、「池」とみられる窪みが観察される。143は、硯中央部片。横断面が「H」字形状を呈し、硯底に脚が削り出される

体部にかけて、縦方向に単位7条の篋描きがみられる。127は、壺。湯築城備前焼壺1-C-1類に相当し、16世紀後半以降に比定される。128・129は、掃鉢。128は、口縁部片。掃目は、1単位10条で、口縁部まで至る。口縁部断面が三角形状を呈する乗岡編年中世3期bに相当し、15世紀前半に比定される。129は、掃目が1単位6条で交差する乗岡編年近世1期bに相当し、16世紀末に比定される。130は、鉢体部片。胴部が筒状を呈し、「水指」などの茶道具として用いられたものと推定される。体部内外面はヨコナデ調整により稜が2稜以上形成される。16世紀を中心に操業したとされる備前焼中央1号窯(仮称)トレンチ7出土資料に類例がみられる。131は、水屋製の口縁部から肩部片。肩が張り、口縁部は短くつまみあげられ、受け部が形成される。湯築城備前焼裏B-2類に相当し、16世紀前半以降に比定される。132・133は、大製の口縁部から肩部片。132は、

長方形硯。縁幅に比して、脚が幅広に造られる。硯面・硯陰に擦痕が観察される。硯面は、陸部から海部にかけて傾斜する「落潮」が形成され、硯陰は、平坦に造られるが硯面と逆方向に傾斜する。144・145は、凝灰岩製無縫塔。144は、請花。側面に、車弁の「鎗連弁文」が削りだされる。上面・下面ともに幅約2.0～4.0cmの鑿痕が残るものの、ミガキ調整により全体が平滑に仕上げられる。上面には、中心から側縁に向けて放射状に8方向に界線が刻される。145は、竿部。側面が5面残存しており、8面体に復元される。上面・下面に、幅約0.8cmの鑿痕が、上面から側面にかけての1箇所、幅約1.2cm・深さ約1.5cmの断面が「V」字状を呈する鑿痕が観察される。側面は、ミガキ調整により平滑に仕上げられる。側面の3箇所に、突起状の飾りが施された痕跡が観察される。15世紀代の所産とされる大分県安岐町報恩寺無縫塔などの類例から勘案すると、竿部側面の4箇所に、連弁状の突起物が施されていたと考えられる。

146は、ガラス製小玉。下面を平坦につくり、中央を穿孔する。明緑灰色を呈する。147～173は、金属製品。147は、鉛製鉄砲玉。148は、青銅製齒型分銅。町53次SX126から出土した齒型分銅と比べて、非常に薄手で小型に造られる。149・150は、青銅製太鼓型分銅。表面には、丸く縁取りした内側に「三」字状を呈する陽刻が認められる。裏面については、149は銘など判然とせず、150は「三」字状の陰刻が施される。151は、青銅製鋸。152は、青銅製金具。断面は円形を呈するが、先端部のみ平坦に仕上げられており、径0.2cm程度の穿孔が施される。この孔には、径0.1cmの青銅製棒状製品を環状に曲げたものが通る。153は、留針状青銅製品。「」状を呈し、先端部は細く尖る。断面は、円形を呈する。154は、鉄製釘。釘頭・断面は方形を呈する。155は、用途不明鉄製品。断面は、方形を呈する。形状から、装飾品と推定される。156～165は、銭貨。すべて北宋銭で、裏面は無文。156・157は、「皇宋通寶」と篆書で鋳出される。初鋳造年は、1038年。158・159は、「熙寧元寶」と真書で鋳出される。初鋳造年は、1068年。160・164は、「熙寧元寶」と篆書で鋳出される。初鋳造年は、1068年。161は、「元豊通寶」と篆書で鋳出される。初鋳造年は、1078年。162は、「元祐通寶」と篆書で鋳出される。初鋳造年は、1086年。裏面にミガキ調整が確認できるため、磨輪銭と考えられる。163は、「紹聖元寶」と篆書で鋳出される。初鋳造年は、1094年。165は、「天禧通寶」と真書で鋳出される。初鋳造年は、1017年。166は、青銅製鍵。先端部が欠損しているものの、完形は「L」字状と考えられる。「L」字の短辺表裏には、0.2×0.3cm程度の方形凸部が認められる。持手部分の断面は六角形を呈する。持手先端部は直方体を呈しており、各角が面取りされ、中央では両方向から穿孔される。このような持手形状の鍵は、町7次SA314、町17次SK115など複数の出土例がある。167は、用途不明青銅製品。4.5×3.7cmの板状を呈し、右側面がやや内湾する。表面は、平坦に仕上げられるが、裏面上部には、「U」字状の窪みが3箇所に観察できる。168は、青銅製留金具。平面が楕円形を呈する円筒に、側面から扁平な留金具を差込む。形状から、小刀などの端と推定される。169は、鉄製鉤状金具。断面は方形を呈する。170・171は鉄製小刀。172・173は、棒状鉄製品。断面は方形を呈する。用途不明。174は、鉄製鋸。

## 5-205 出土遺物 (第17図～第18図)

1～24は、内面の最終調整にナデアゲが施される京都系土師器皿。3・6・7、9～12は、内外面に煤痕が観察され、灯明皿として用いられたと推定される。14は、塩地編年第3期に相当し、16世紀末に比定される。2次被熱により全面が黒化する。17・18は、河野「g類」のG-2類に相当し、16世紀後半に比定される。1～13、15・16、19～24は、塩地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。25・26は、中国産陶磁器翡翠輪菊花皿。いわゆる「交趾焼」。内面は、平滑につくり、外面は、型押しにより花卉状を呈する小皿。高台内中央に、方形2条の團縁がスタンピングで押され、落款状を呈するが、團縁内に字款はみられない。1580年代に位置付けられる博多遺跡群第40次調査4号土坑の一括埋納陶磁器に類似資料がみられる。27・28は、端反りとなる景德鎮窯系青花碗あるいは皿片。27は、外面に、「渦文」が染付けで描かれる。28は、外面に、「草花文」が染付けで描かれる。呉須の発色が悪い。29・31は、景德鎮窯系青花碗片。29は、外面に、意匠不明の文様が染付けで描かれる。31は、口縁部下内面に「草花文」が、外面に「雲文」が染付けで描かれる。30は、

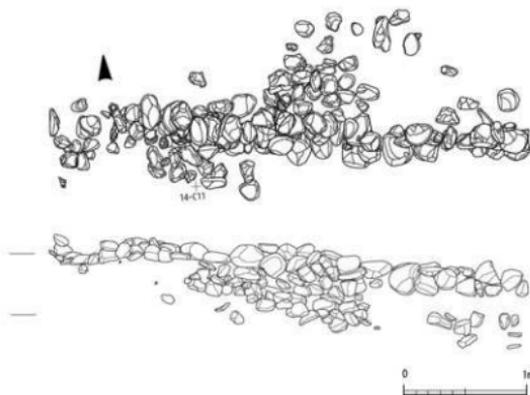
景徳鎮窯系青花と推定される皿。見込み2条界線内に、「花文」を櫛描きする。畳付の軸を剥ぎ、砂粒が付着する。32は、涼州窯系青花碗。体部は、やや内湾しつつ、立ち上がる。口縁端部は、丸みを帯びる。削り出し高台で、断面が方形を呈する。高台の脇を水平に削り、畳付は、面取りをおこなう。高台は、露胎である。外面に「果樹文」を染付けて描くが、輪郭線は、みられない。内外面ともに貫入が発達する。33～36は、景徳鎮窯系青花皿。33は、高台片。見込み重圏内に、「瓊果文」が染付けて描かれる。畳付の軸を剥ぐ。34は、端反りとなる小皿。湯築城青花皿1群B-IV類に相当し、16世紀前葉以降に比定される。見込みに「十字花文」が、外面に「牡丹唐草文」が染付けて描かれる。畳付の軸を剥ぎ、砂粒が付着する。35は、稜花皿の口縁部片。口縁部外面に、「渦文帯」が、内面に、「金」の吉祥字が染付けて描かれる。口縁は外反し、輪花状を呈する。いわゆる「罽皿」。小野分類染付皿F群に相当し、16世紀末以降に比定される。破断面に、漆状付着物が観察されるため、漆継ぎがおこなわれたと考えられる。36は、高台片。畳付の軸を剥ぎ、砂粒が付着する。染付けて、見込みに「月」・「虫」・「草花」などが描かれ、高台内に字歌状に「精製」と推定される前した2字銘が記される。37は、龍泉窯系青磁碗の高台片。見込みに、「福」の吉祥字が篋書きされたのちに施釉される。13世紀代か。38は、中国産青磁碗の口縁部片。外面口縁部下に、簡略化された「波状文」が巡る。湯築城青磁碗F類に相当し、16世紀後半以降に比定される。軸調・胎土などから龍泉窯系以外の産地と推定される。39は、中国産白磁皿。口縁部が外反する。見込みを輪状に軸を剥ぐ。畳付に、植物繊維および砂粒が付着する。森田分類白磁E群に相当し、16世紀代に比定される。40～42は、瀬戸・美濃産陶器天目碗の口縁部から体部片。口縁部が後をつくり立ち上がり、やや外反する。40・41は、軸を外面体部下で拭き取る。藤沢編年大窯第4段階に相当し、16世紀末に比定される。43・44は、備前焼鉢。43は、体部が大きく開き、口縁部がやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部がすぼまる。底部は、やや上げ底となる。44は、体部下が内湾し、口縁部にかけては直立気味に立ち上がる。口縁端部を平滑に仕上げる。外面体部下に、重ね焼きの痕跡が観察される。

45は、瓦質土器焼壺。還元焙焼を指向するが、燻しをおこなわず、淡橙茶色を呈する。頸部から口縁部にかけて、ヨコナデ調整により窄まり、直立する。口縁端部は、丸みを帯びる。体部内外面は、ナデ調整が、内面に粘土細接合痕が観察される。46は、甕の羽口。先端部に鉋滓が付着する。47は、備前焼短頸壺。体部に粘土細が貼り付けられており、その中央部に凹みが観察される。この粘土細の貼り付けによって、もう1個体の同様の壺が連結されていた可能性が考えられる。形状から、二連壺と推定する。町20次C区SK10出土の壺に類似する。48は、備前焼播鉢。体部内面に、1単位8条の播目が放射状にみられ、使用のため磨耗する。口縁部外面に凹線が3条みられ、口縁端部は先細り、内面口縁端部下に段をもつことなどから、乗岡編年近世1期bに相当し、16世紀末に比定される。49～54は、金属製品。49～51は、鉄製釘。52は、青銅製石突。表面が非常に艶くなっているため、先端内部の形状は明確でない。町16次包含層出土資料に類似する。53は、青銅製太鼓型分銅。表面に認められる陽刻は、下端が摩滅のため明確でないが「三」字状を呈すると推定される。裏面については、著しい摩滅のため銘など判然としない。54は、青銅製の仏具付属品。表面には右より、「花卉」あるいは「葡萄」の果実が1房、3葉、2条以上の「唐草文」がみられる。また、鋳造時の湯周りに不良による径0.1～0.4cmの「果」が確認される。非常に薄手に鋳造されており、仏像周辺などに飾られる荘嚴具類と推定される。55は、石硯。硯材は、結晶片岩。長方形を呈する。硯陰は、平坦に造り、硯面には「池」が造られる。硯側の左側は、ほぼ垂直に、右側は斜め方向に切断される。両部の左側は、隅丸形状を、右側は、縁内線が縁外形の硯床までいたる直角を呈する。また、縁内線も直線ではなく、一定しないため、粗雑な造りと考える。

## S-206 出土遺物（第19図）

1～2は、土師器杯。底部は、回転系切り離し。3～13は、内面の最終調整にナデアゲが施される京都系土師器皿。法量に大小あるが、3～11・13は、堀地編年第2期に、12は、河野「g類」のG-2類に相当し、16世紀後半に比定される。3・4、6～10は、内外面に煤痕が観察され、灯明皿として用いられたと推定される。

14・15は、景徳鎮窯系青花碗。14は、口縁部片。体部外面に、「草花文」を櫛描きする。口縁部下内外面に



第21図 町53次調査SX133平面・見通し実測図(1/40)

見込みに「花文」が、体部に「草花文」が染付けで描かれる。畳付の軸を剥ぐ。呉須の発色が悪い。18は、見込みに、「蛟龍文」と推定される文様が染付けで描かれる。畳付に、砂粒が付着する。小野分類染付皿E群に相当し、16世紀後半以降に比定される。19は、「碁笥底」を呈する小野分類染付皿C群IV類に相当し、15世紀後半以降に比定される。畳付の軸を剥ぐ。「草花文」を染付けで描き、施釉した後、内面見込み中央に、「魚」を表現した赤色粘土を貼り付ける。「魚」は、鱗を斜め方向の刻線で、目を白色胎土を貼り付けることによって表現する。20は、中国産白磁種花皿。型押しによって、体部が花卉状を、口縁端部が輪花状を呈する。畳付の軸を剥ぐ。湯築城白磁皿B-4類に相当し、16世紀後半に比定される。21は、中国産白磁皿。見込み・体部下以下が露胎で、高台が低く削り出される。胎土が、陶質に近い粗製のもの。22は、産地不明陶器壺あるいは甕の口縁部から肩部片。頸部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がり、口縁端部に平坦面をつくる。頸部外面は、平坦に仕上げ、内面に幅広の角度が緩い1条の段を巡らせる。外面の頸部境には、幅広のシャープな段を巡らせる。肩が張る。軸調は、黒灰色を呈し、やや光沢がある。胎土には、黒色粒子がみられる。23は、中国産青白磁瓶あるいは壺の底部片。高台内・畳付は、露胎を呈する。24は、瀬戸・美濃産天目碗の口縁部から体部片。口縁部が稜をつくり立ち上がり、やや外反する。軸を外表面体部下で拭き取る。概ね藤沢編年大窯第3～4段階に相当し、16世紀後半代に比定される。25は、瓦質土器播鉢の底部片。体部に1単位4条の、見込みに花卉状の描目が施される。宇佐高村産と推定される。26は、備前焼平鉢。底部は、やや上げ底となる。体部が底部から大きく開き、口縁部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部は、つまみ出す。体部に、焼膨れが観察される。16世紀を中心に操業したとされる備前焼中央1号窯(仮称)トレンチ7出土資料に類例がみられる。27・28は、鞠の羽口。ともに先端部に藍滲が付着する。29～31は、金属製品。29は、銭貨。北宋銭で、表面に「元豐通寶」と行書で鋳出され、裏面は無文。初鋳造年は、1078年。30は、用途不明青銅製品。断面は方形を呈する。31は、用途不明青銅製品。先端部が欠損しており、全形状は不明である。緩やかに湾曲する端部両側には突起部があり、この部分を固定して上方に可動したと考えられる。側面張出し部は、可動の際に、ストッパーとしての機能を果たした、あるいは先端に木質部材を差込む際に用いられたと推定される。可動部を有する製品の一部分と考えられる。

#### SD210出土遺物(第20図)

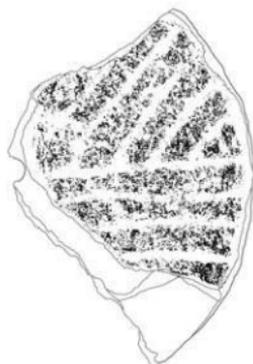
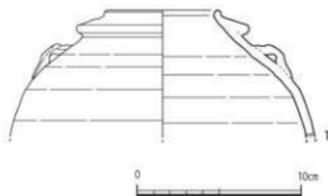
SD210掘削時に、土層に対応して取り上げることができなかった遺物をSD210出土遺物に帰属させた。

染付けで1条の界線を巡らす。15は、高台片。見込みに、「花文」が、外面体部下半に、「葛蒲文」が染付けで描かれる。畳付の軸を剥ぐ。小野分類染付皿C群に相当し、15世紀後半以降に比定される。16～19は、景德鎮窯系青花皿。畳付の軸を剥ぐ。16は、見込みに2条界線内に、「草花文」を染付けで描き、高台内中央に、染付けで、字款状に「富(貴)佳器」が崩れた4字銘が記される。17は、端反りする小野分類染付皿B群に相当し、15世紀後半以降に比定される。

1～3は、京都系土師器Ⅰ。1～2は、埴地編年第2期に、3は、河野「g類」のG-2類に相当し、16世紀後半に比定される。4は、中国産青磁。形状から、瓶の肩部などにつく環と推定される。5は、中国南方産褐釉陶器壺の肩部片。釉調は、外面が暗黄緑色を、内面が褐茶色を呈する。胎土は軟質で、褐色粒子を含む。16世紀末から近世初期に比定される町12次SX02出土の「葉茶壺」として使用された可能性がある中国産褐釉陶器五耳壺に類似する。6は、縄文土器浅鉢。黒川式併行期に相当し、縄文晩期に比定される。7は、青銅製金具。断面は円形を、平面は「U」字状を呈する。形状から、調度品の引き手と推定される。

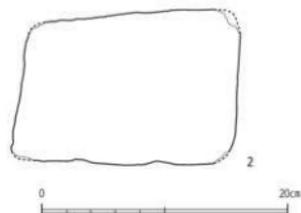
### 石積み遺構 (SX133) (第21図)

調査区南側(第7図14-C11)において、遺物包含層(SX001)掘削後に、検出された。径0.4～0.2m程度の礫が、東西方向に列状に、東・西調査区外に展開する状況が確認された。平面検出によって、明確な掘り方が確認されなかったため、堀(SD210)の最終埋没土(S-200)の掘削と並行して、SX133周辺の掘り下げをおこなった。その結果、南北幅約0.4～1.5m、東西長さ約4.0+a m、高さ約0.2～0.7mを測る、2～8段の石積み遺構であることが判明した。特に、中央部に、石積みが集中する。また、土層観察から、S-205の上位にあるS-200形成に伴い、積み上げがおこなわれ、SX133を境として、その北側・南側で、S-200の堆積単位が異なることが確認された。加えて、道路状遺構(SF300)の延長部に、ほぼ直行する状況が想定される。そのため、SX133は、堀の最終埋め戻しの作業工程に関連し、且つ、埋め戻し後の土地利用に伴うなどの「区画」を意識して構築された遺構と推定される。



### 石積み遺構 (SX133) 出土遺物 (第22図)

1は、中世前期の長崎県鷹島町鷹島海底遺跡・博多遺跡群などから出土する長胴を呈する褐釉陶器四耳壺の口縁部から体部片。口縁部が外面下方に張り出す「傘状」を呈する。口縁上端部は、重ね焼きによると推定される圧痕が観察される。肩部に、縦方向の耳を貼り付ける。釉調は、黒褐色を呈する。森本2006によれば、生産地として、中国江蘇省宜興西渚鎮筱王村窯址が挙げられる。中国では、「韓瓶」と通称される。2は、石製品粉挽き白の下白片。石材は、安山岩。白面の目は、周縁まで刻まれており、幅0.8cm程度の断面が「U」字状を呈する2条の主溝と4～5条の副溝が残存する。芯棒孔も、径2.5cm程度が残存する。白面は、磨耗する。2次被熱の痕跡がみられる。



第22図 町53次調査SX133出土遺物実測図  
(1 1/3・2 1/4)

### ③埋没後に形成された遺構の状況（第23図）

埋没後に形成された遺構については、道路状遺構（SF300）・土坑状遺構（SX101）・ピット（SP142ほか）・石列（SX132）が検出された。

#### 道路状遺構（SF300）

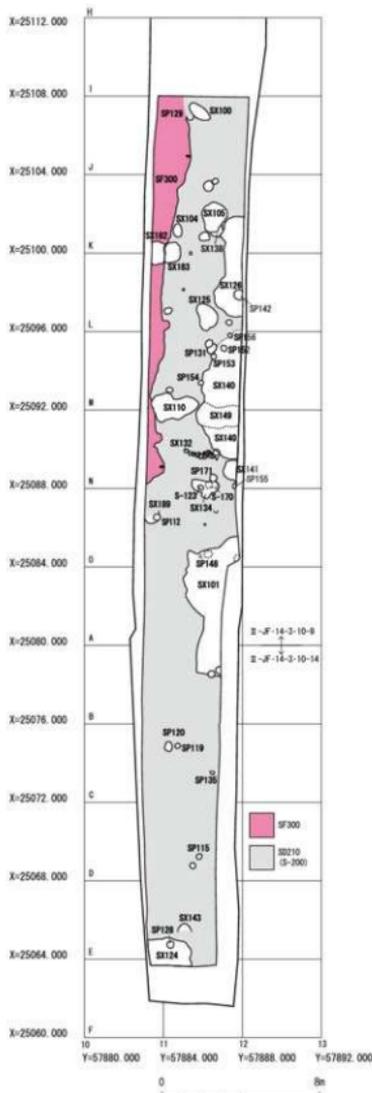
SF300は、①段階で形成された道路状遺構（SF310）の上位において、その展開方向を踏襲し、堀（SD210）側に、やや拡張して検出された。検出幅約0.5～1.8m、検出長約18.8mを測る。灰褐色硬質土を主体としており、径1.0cm程度の礫を多く含み、非常に硬く締まる。堀（SD210）埋土の一部上面において検出されたが、道路側溝と考えられる遺構は検出されなかった。SF300からは、遺物が検出されなかった。

調査区の制約上、その詳細については不明であるが、SF310と同様に、現状では、その展開方向・検出位置などから、調査区北側の町51次調査区で、ほぼ同一標高において検出された南北方向の道路状遺構と同一のものであると考えられる。また、平面検出およびトレンチによる土層断面観察の結果、SD210→SF300（旧→新）という新旧関係が確認されたため、下位の道路状遺構（SF310）を含めて、この調査区の主要遺構の新旧関係がSF310→SD210→SF300と判明した。

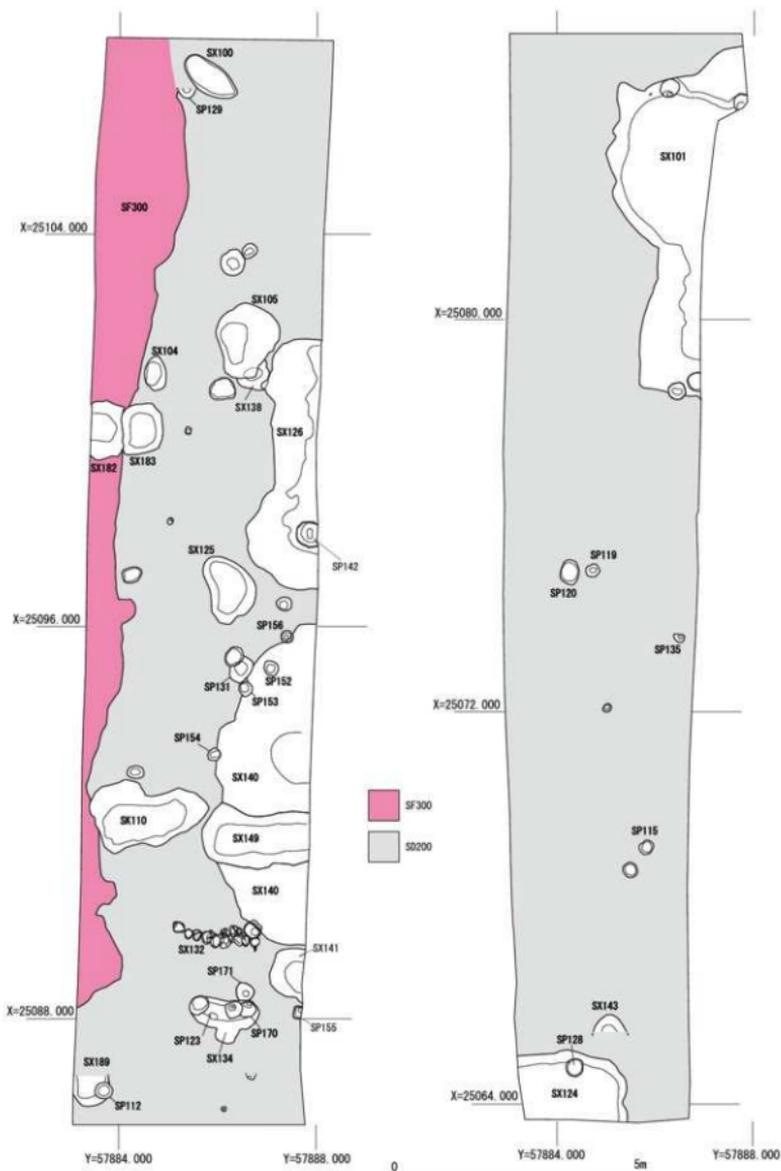
#### 土坑状遺構（SX101ほか）・ピット（SP142）

#### SX101（第23図14-B11・第25図）

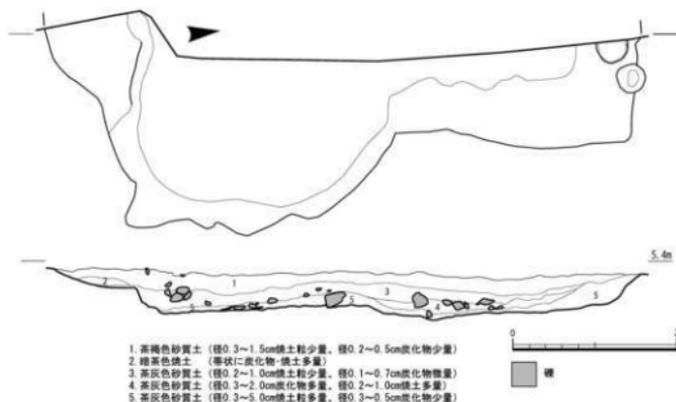
調査区中央の東側に検出され、半分以上が調査区外に展開する。平面形状は、円形と長方形を合わせたような不定形の土坑状遺構であり、長軸の断面形状も北側に一部テラスをもつ不整形な逆台形状を呈し、床面は凹凸が多い。検出長約7.2m、検出幅約1.2～2.6m、現存深さ約0.4mを測る。検出段階で、北側から西側にかけて遺構の縁に沿うようなかたちで0.3～0.5m程度の礫が密に検出された。それらの礫は、掘り下げられるにつれて全面に広がる状況が観察された。礫のほとんどが円礫で、一部含まれる0.5m程度の大礫は角礫であり、被熱により表面が変色したものや破裂したものが多くみられた。埋土は、自然堆積が観察されず、人為的な埋め戻しによる茶灰色砂質土が主体であり、炭化物・焼土粒・礫が、上層に比べて下層に多量に含まれる。堆積状況から、SX101は掘削されたのち、礫および炭化物・焼土粒が多量に含まれる土により短期間に埋め戻されたと考えられる。以上のような形状と埋土堆積状況から、SX101は、火災処理に関係する遺構と推定される。



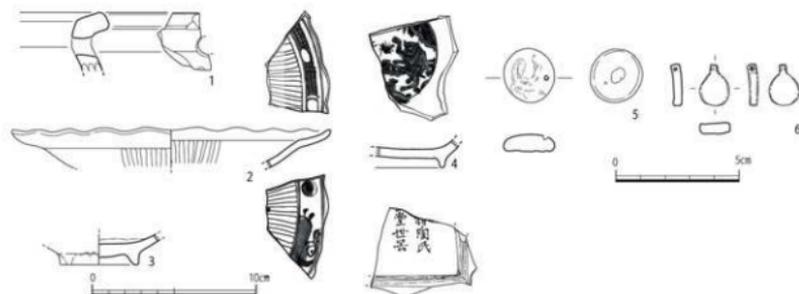
第23図 町53次調査遺構配置図③ (1/250)



第24図 町53次調査遺構平面図③ (1/100)



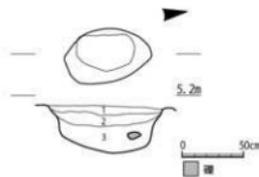
第25図 町53次調査SX101平面・土層断面図 (1/60)



第26図 町53次調査SX101出土遺物実測図 (5~6 1/2・1~4 1/3)

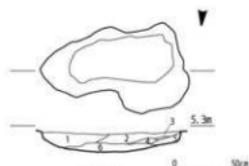
### SX101 出土遺物 (第26図)

1は、龍泉窯系青磁器台の口縁部片。頸部に穿孔を施し、口縁部は幅広の鐮状を呈する。瓶などの器台として用いたとされる。首里城跡などの出土資料に類似する。2は、景德鎮窯系青花稜花皿。いわゆる「鐮皿」。体部が、やや内湾し、内外面ともに「蓮弁文」が施される。口縁部は、上面がややくぼみながら外反し、端部が稜花状を呈する。口縁部内外面に「鳥」「格子文」「窓」などの文様帯がみられる。小野分類染付皿F群に相当し、16世紀末以降に比定される。3は、漳州窯系青花碗の高台片。高台を削り出し、断面が方形を呈する。見込みは、軸を剥ぎ、外面は、体部下半から高台内まで、露胎を呈する。呉須の発色が悪く、胎土も陶質に近い。4は、景德鎮窯系青花角皿の高台片。方形を呈する高台に復元される。畳付の軸を剥ぎ、染付けで、見込み圏内に「猿」・「蝶」などが描かれ、高台内に「…□陶氏…□堂世器」と縦方向に2行となる路が記される。5は、ボタン状ガラス製品。全面が風化し、濁りのある灰白色となる。断面は、かまぼこ状を呈する。平坦面に、接着痕跡が確認されることから、台座などに嵌込まれた装飾品と推定される。町14次SX429、町20次C-SD01などで類似



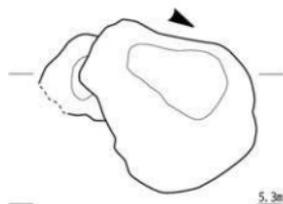
- 1 灰褐色砂質土 (全体に鉄分・酸化マンガンの混入)
- 2 灰褐色砂質土 (径0.1~0.2cm炭化物微量  
径0.3~2.0cm鉄分マンガンを微量)
- 3 灰褐色砂質土 (径0.1~0.2cm炭化物微量  
径0.3~0.5cm鉄分・マンガンを微量)

第27図 町53次調査SX104平面・土層断面図 (1/40)



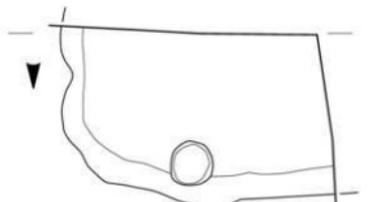
- 1 黄褐色土
- 2 黄褐色砂質土
- 3 暗黄褐色土
- 4 暗黄褐色土
- 5 黄褐色砂質土
- 6 黄褐色土

第28図 町53次調査SX110平面・土層断面図 (1/40)



- SX105
- 1 黄褐色砂質土 (やや軟質)
  - 2 暗黄褐色砂質土 (やや軟質)
  - 3 黄褐色砂質土
  - 4 黄褐色砂質土 (径0.1cm程度の塊土・炭化物多量含む)

第29図 町53次調査SX105・138平面・土層断面図 (1/40)



- 1 明褐色砂質土 (径0.3~1.0cm塊土少量、径0.1~0.2cm炭化物微量)
- 2 暗褐色砂質土 (径0.2~0.8cm塊土微量、径0.3~0.5cm炭化物微量)
- 3 明褐色砂質土 (径0.3~0.5cm暗褐色土微量)
- 4 明褐色砂質土 (径0.3cm塊土微量、径0.2~0.3cm炭化物微量)
- 5 暗褐色砂質土 (径0.3~0.8cm塊土微量、径0.1~0.3cm炭化物微量)

第30図 町53次調査SX124平面・土層断面図 (1/40)



第31図 町53次調査SX125平面・土層断面図 (1/40)

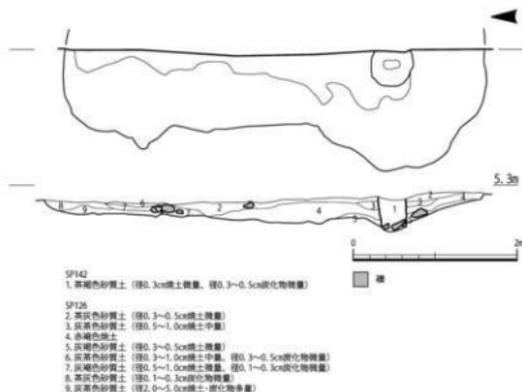
資料の出土がある。但し、5には、縁辺部の表裏それぞれに、径0.1cm程度の穿孔が確認できる。貫通には至っていないため、実際に2次使用されたのかは不明だが、ペンダント等への転用を意図したものと考えられる。6は、鉛製メダイ。紐に段がつかずに、横穿孔が施される。後藤分類内型メダイB類に相当する。

#### SX104 (第23図9-K11・第27図)

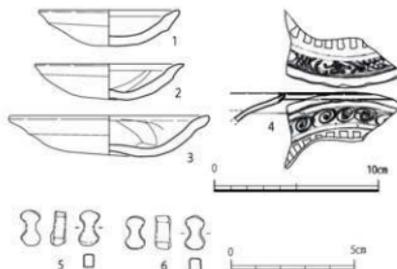
検出長径約0.7m、検出短径約0.4m、深さ約0.4mを測り、南北に楕円形状を呈する。青花片・土師器片・土器片が出土している。

#### SX105・SX138 (第23図9-K11・第29図)

検出長径約1.5m、検出短径約1.2m、深さ約0.3mを測り、不整形な円形状を呈し、SX138を掘り込む。西側は、ほぼ垂直に掘り込まれ、東側は緩やかに掘り込まれる。SX105からは、交差目目の備前焼埴鉢底部片・備前焼大甕体部片・白磁碗口縁部片・白磁皿口縁部片・龍泉窯系青磁片・翡翠釉菊花皿口縁部片・青花碗片・青花皿片・スサ入り粘土塊片・土師器坏片・瓦質土器片・瓦片・京都系土師器皿片・東播系須恵器甕胴部片などが、SX138は、時期不明の土器片が出土している。



第32図 町53次調査SX126・SP142平面・土層断面図 (1/60)



第33図 町53次調査SX126・137出土遺物実測図  
(1~4 1/3・5・6 1/2)

をもち、平面は不整形形状を呈する。堆積は、炭化物・焼土粒が含まれる人為的な埋土が観察された。白磁碗片などが出土している。

#### SX126 (第23図9-L11～第32図)

調査区北東部において検出され、遺構東側は調査区外に展開しており、全面検出はできなかった。検出長径約5.2m、検出短径約1.4m、深さ約0.2～0.3mを測り、平面は不整形形状を呈する。掘り方は、緩やかに掘り込まれ、底面は凹凸が多く、深さも様々ではない。埋土のほとんどに焼土・炭化物が含まれ、それらはとくに下層に集中する。また一部に0.3m程度の礫が含まれる。堆積状況からSX126は掘割されたのち、礫および炭化物・焼土粒が多量に含まれる土により短期間に埋め戻されたと考えられる。以上のような形状と埋土堆積状況から、SX126は、火災処理に関係する遺構と推定される。また、SX126埋没後、SP142が掘り込まれる。

#### SX126 出土遺物 (第33図)

1・2は、京都系土師器皿。ともに塩地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。4は、景徳鎮窯系青

#### SX110 (第23図9-N11～第28図)

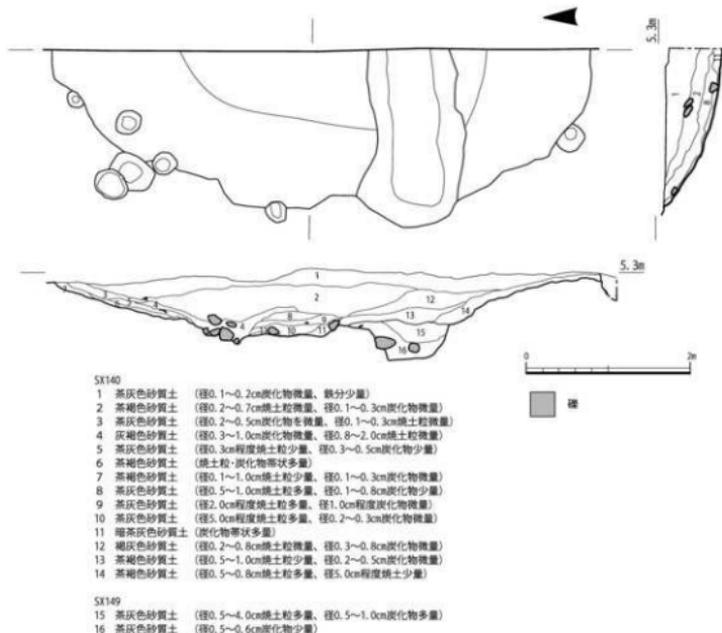
道路状遺構 (SF310・300) を掘り込む。不整形な楕円形状を呈し、検出長径約1.2m、検出短径約0.7m、深さ約0.2mを測る。緩やかな逆台形状の断面を呈し、堆積はブロックを含む人為的な埋土が観察された。SX110からは、青花碗片・備前焼播鉢底部片・備前焼壺口縁部片・龍泉窯系青磁碗底部片・京都系土師器皿口縁部片・弥生土器片・中世須恵器甕肩部片・瓦質土器片・土師器片などが出土している。

#### SX124 (第23図14-F10～第30図)

調査区南端で検出されており、調査区の制約上、全面検出はできなかった。検出長径約2.2m、検出短径約1.4m、深さ約0.3mを測り、緩やかに掘り込まれ、底面は、ほぼ平坦である。埋没後、SP128が掘り込まれる。堆積は、礫・炭化物・焼土粒が含まれる人為的な埋土が観察された。京都系土師器皿・丸瓦片・土師器片・備前焼裏片・スサ入り粘土塊片・瓦質土器播鉢片などが出土している。

#### SX125 (第23図9-L11・第31図)

検出長径約1.3m、検出短径約1.0m、深さ約0.1mを測り、南北方向に長径



第34図 町53次調査SX140・149平面・土層断面図(1/60)

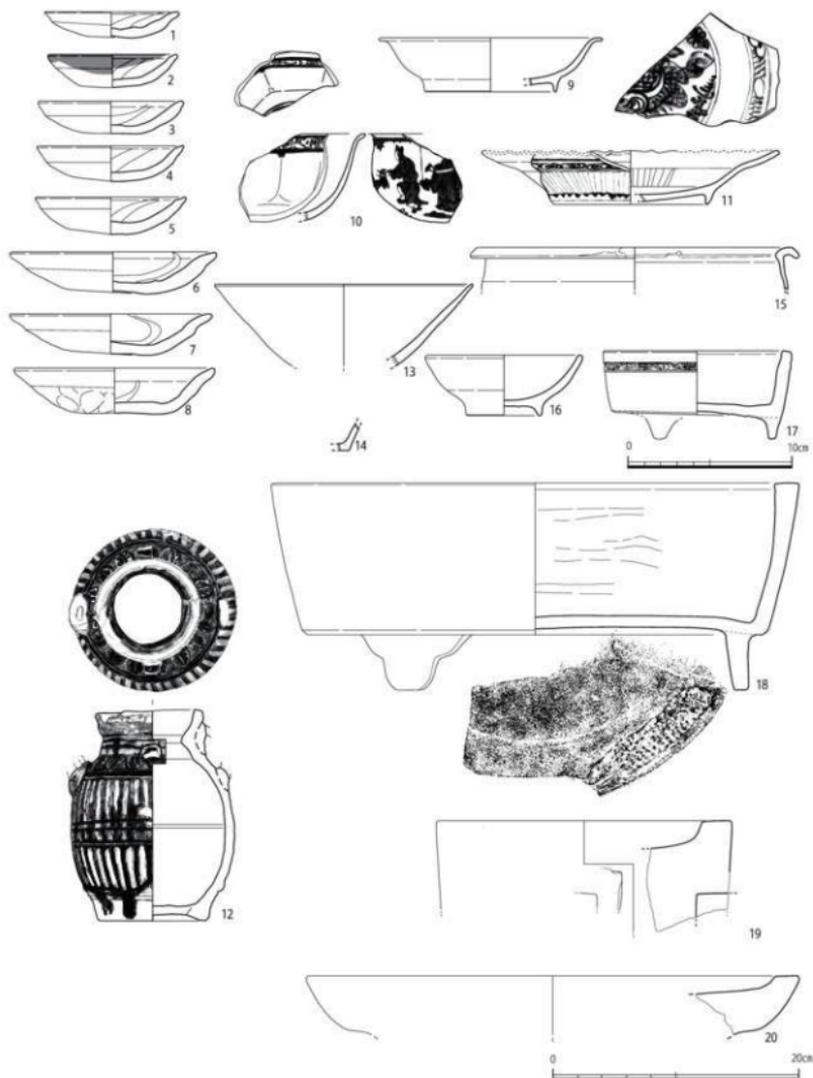
花稜花皿の口縁部片。いわゆる「罍皿」。体部が、やや内湾し、内外面ともに「蓮弁文」が施される。口縁部は、上面がややくぼみながら外反し、端部が稜花状を呈する。口縁部平坦面内面に、「金」の吉祥字が、外面に「渦文」が染付けで描かれる。小野分類染付皿F群に相当し、16世紀末以降に比定される。2次被熱による軸変が観察される。5・6は、青銅製菌型分銅。

#### SX140 (第23図 9-N11~第34図)

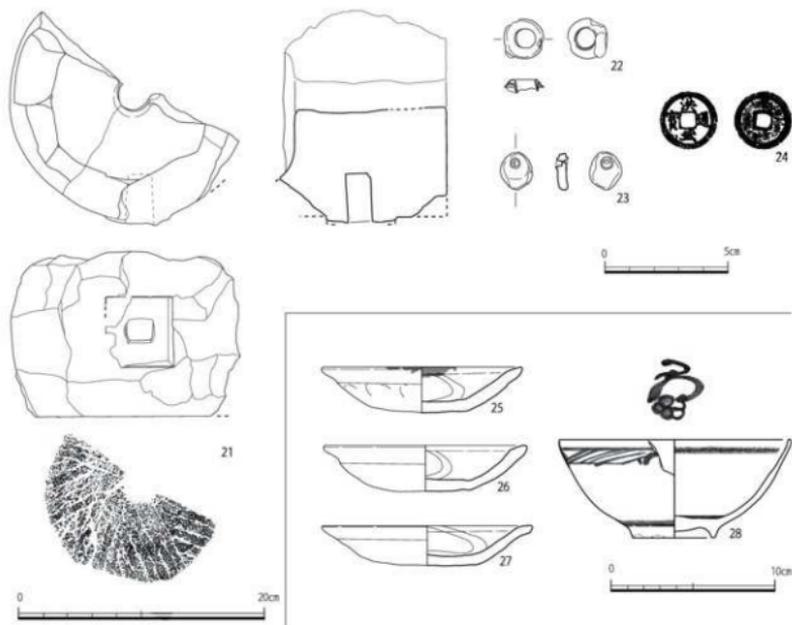
遺構東側は調査区外に展開しており、全面検出はできなかった。SX149は、SX140に掘り込まれる。SX140は、検出長径約6.6m、検出短径約1.9m、深さ約0.6~0.8mを測り、平面は推定円形状を呈する土坑状遺構である。掘り方は、緩やかに掘り込まれ、底面は凹凸が多く、深さも一様ではない。埋土のほとんどに焼土・炭化物が含まれ、それらはとくに下層に集中する。また下層には、0.2m程度の礫も集中する。堆積状況からSX140は掘削されたのち、礫および炭化物・焼土粒が多量に含まれる土により短期間に埋め戻されたと考えられる。以上のような形状と埋土堆積状況から、SX140は、火災処理に関係する遺構と推定される。

#### SX140 出土遺物 (第35図~第36図)

1~8は、内面の最終調整にナデアゲが施される京都系土師器皿。法量に大小あるが、塚地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。2は、内外面に煤の痕跡が観察され、灯明皿として用いられたと推定される。8

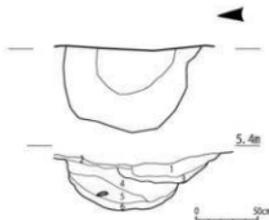


第 35 図 町 53 次調査 SX140 出土遺物実測図 (1 ~ 17 1/3・18 ~ 20 1/4)



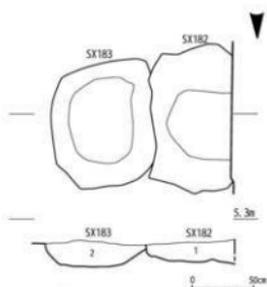
第36図 町53次調査SX140・149出土遺物実測図(22～24 1/2・25～28 1/3・21 1/4)

は、2次被熱により黒化する。9は、中国産白磁皿。高台が細く、口縁部が外反する。畳付は、釉を剥ぎ、砂粒が付着する。森田分類白磁E群に相当し、16世紀代に比定される。10は、景德鎮窯系青花碗。体部と口縁部に推定八角となる稜が形成される。腰部が、ややふくらみをもち、体部は直立気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部下内面に「四方禪文帯」が見込みに2条界線が、外面に「唐子」などが染付けで描かれる。11は、景德鎮窯系青花棧花皿。体部が、やや内湾し、内外面ともに「蓮弁文」が施される。口縁部は、上面がややくぼみながら外反し、端部が稜花状を呈する。小野分類染付皿F群に相当する、いわゆる「鏝皿」。16世紀末以降に比定される。見込みに、意匠不明の文様が、外面に「渦文」などが、染付けで描かれる。12は、推定中国南方産褐釉陶器水注。「第5章 まとめ」において、詳述する。13は、朝鮮王朝産灰青釉陶器碗の口縁部から体部片。いわゆる「雑釉」。体部下半から口縁部にかけて、直線的に大きく開く。14は、胎土・釉調・器壁の薄さなどから、朝鮮王朝産灰青釉陶器鉢あるいは瓶と推定される底部片。小破片のため、底径・傾きなどの詳細は不明である。15の上げ底の片口鉢が同一遺構から出土するため、それと同一個体の可能性がある。15は、朝鮮王朝産灰青釉陶器鉢の口縁部片。口縁部が、やや肥厚し、外反し、外面下方に垂れる。口縁上端部は露胎で、外面屈曲部に砂粒の付着が観察される。町12次SB01・SB02焼土層出土の朝鮮王朝産灰青釉陶器片口鉢に類似する。16・17・18は、瓦質土器。還元焼成を指向するが、燻しをおこなわず、橙茶色を呈する。16は、碗。底部から口縁部にかけて緩やかに開く。内外面ともに、ミガキ調整により器面を平滑に仕上げる。内面一部に、布目痕が観察されるため、型づくりと推定される。17は、香炉。底部は、回転ヘラケズリ後に、三脚をつける。口縁部下外面に、中心に分割線をもつ「双頭鳳手飛雲文」がスタンプによって連続施文される。口縁部から体部内外面は、ミガキ調整によって平滑に仕上げる。18は、火鉢。三脚付き。口縁部から体部内外面は、ミガキ調整によって平



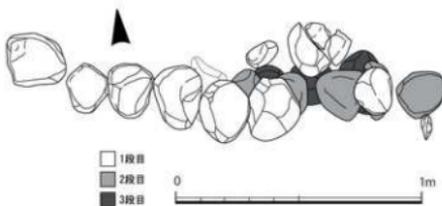
- SX144  
 1 赤灰色砂質土 (厚0.3~1.0cmの焼土を少量含む) 厚0.1~0.3cm程度の炭化物を微量含む  
 2 茶褐色砂質土 (厚0.3~0.5cm程度の焼土を少量含む) 厚0.1~0.2cm程度の炭化物を微量含む
- SX141  
 3 褐色砂質土 (厚0.5cm程度の焼土を微量含む) 厚0.1~0.3cmの炭化物を微量含む
- SX141  
 4 褐色砂質土 (厚0.5~1.0cmの焼土を少量含む) 厚0.1~0.3cmの炭化物を微量含む  
 5 赤灰色砂質土 (厚0.5~0.8cmの焼土を少量含む) 厚0.3~0.5cmの炭化物を微量含む  
 6 暗褐色砂質土 (厚0.3~1.0cmの焼土を少量含む) 厚0.1~0.3cmの炭化物を微量含む

第37図 町53次調査SX141・144平面・土層断面図(1/40)



- SX182  
 1 赤灰色砂質土 (焼分・酸化マンガンを少量含む)
- SX183  
 2 赤灰色砂質土 (焼分・酸化マンガンを少量含む)

第38図 町53次調査SX182・183平面・土層断面図(1/40)



第39図 町53次調査SX132平面図(1/20)

滑に仕上げる。底部は、離れ砂の痕跡が観察される。19は、石製品茶臼。上白の上縁部片。石材は、砂岩。側面に、挽き手孔の痕跡が残る。ミガキ調整により、内外面ともに平滑に仕上げる。20は、石製品茶臼。下白の受け皿部片。石材は、安山岩。ミガキ調整により、内外面ともに平滑に仕上げる。

21は、石製品茶臼の上白。石材は、安山岩。側面に、方形二段飾りの挽き手孔が残存する。白面は、使用により磨耗しており、主溝が4条・副溝が4

~6条残存しており、8分画と推定される。白面は、平坦につくられており、ふくみがみられない。22は、青銅製留金具。円筒形の下端部が反り返る。草戸千軒遺跡出土の天辺座は、やや大型だが、類似する形態を呈する。22も同様に、布・革などに打ち付けて用いる鳩目状の金具と推定される。23は、鉛製メダイ様。正面穿孔。鈕部分は独立せず、メダル部分に、直接穿孔が施される。後藤分類府内型メダイC類に相当する。24は、銭貨。明銭で、表面は「洪通寶」と真書で鋳出され、裏面は無文。初鋳造年は、1368年。

#### SX149 (第23図9-L~N11・第34図)

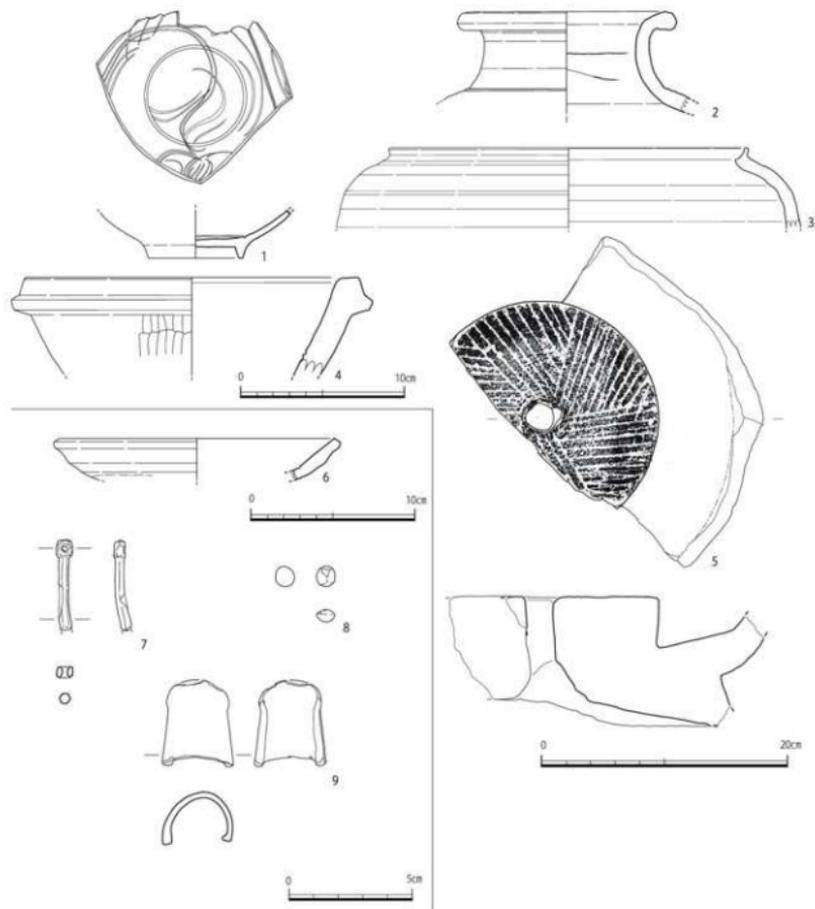
検出長径約2.2m、検出短径約1.2m、深さ約0.5mを測り、平面は推定楕円状を、断面は逆台形状を呈する。底面は平坦であるが、全面検出ができず、SX140に掘り込まれるため、その詳細については不明である。

#### SX149 出土遺物 (第36図)

25~27は、内面の最終調整にナデアゲが施される京都系土師器皿。埴地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。25は、口縁部内外面に煤の痕跡が観察され、灯明皿として用いられたと推定される。28は、漳州窯系青花碗。高台を削り出す。体部下半から、やや内湾しつつ、立ち上がり、口縁部は揃み上げる。器壁が薄い。高台内は、露胎である。軸調は、淡白灰色を呈し、貫入が発達する。呉須の発色は悪い。見込み中央には、判読不明な崩れた1字路が、染付けで記される。

SX182・SX183 (第23図9-L10～第38図)

道路状遺構 (SF300・310) を掘り込み、SX182 は、SX183 を掘り込む。SX182 は、検出長径約 1.2 m、検出短径約 0.6 m、深さ約 0.3～0.4 m を、SX183 は、検出長径約 1.0 m、検出短径約 0.8 m、深さ約 0.4 m を測る。SX182 は調査区外に展開するが、平面は、楕円形状を呈すると推定される。SX183 は、南北方向を長軸にもつ楕円形状を呈する。断面は、逆台形状を呈する。埋土には、上位の層の影響を受けたと考えられる鉄分・マンガンが、ともに多量に含まれる。SX182 からは、瓦質土器片・青花片、SX183 からは、京都系土師器皿片・土師器片・土器片が出土している。



第40図 町53次調査表土・表採・SX001出土遺物実測図 (7～9 1/2・1・4・6 1/3・2・3・5 1/4)

ビット (SP142 ほか)

#### SP142 (第 23 図 9-L11・第 32 図)

SX126 を掘り込むビットである。検出長径約 0.5 m、検出短径約 0.4 m、深さ約 0.4 m を測る。柱痕は検出されなかった。調査区の制約上、その並びや詳細については不明である。第 33 図-3 の京都系土師器皿が出土した。塩地編年第 2 期に相当し、16 世紀後半に比定される。

#### 石列 (SX132) (第 23 図 9-L11・第 39 図)

調査区中央付近において、東西方向に展開する状況で検出された。検出時は、径約 0.4m を測る 6 個の円礫が、ほぼ一列に、配置された状況が確認された。掘り下げによって、SX132 の一部は、3 段積みで構築されていたことが判明した。明確な掘り方は、平面検出および土層観察で把握することができなかったため、その詳細については不明であるが、南北方向に展開する道路状遺構 (SF300) に、ほぼ直行する平面形状などから、堀 (SD210) 埋め戻し後の土地利用に伴うなど、「区画」を意識した遺構と推定される。

#### 表土・SX001 出土遺物 (第 40 図)

1 は、中国産白磁碗。体部から見込みにかけて、櫛刀による「草花文」が施される。太宰府編年白磁碗Ⅶ類に相当し、12 世紀中頃以降に比定される。2 は、タイ産メナムノイ窯系焼締陶器四耳壺の口縁部から頸部片。頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部が強く外反し、玉縁状に肥厚する。頸部と肩部の境に、断面が三角形を呈する 1 条の凸線が削り出される。外面に、黄灰色を呈する軸が施される。内面に、粘土紐接合痕が観察される。高富分類 1 類に相当する。1587 年の島津氏府内侵攻に伴うとされる町 3 次 SX210 出土一括資料に類似する。3 は、備前焼水屋裏の口縁部から肩部片。肩が張り、口縁部は短くつまみあげられ、受け部が形成される。湯築城備前焼裏 B-2 類に相当し、16 世紀前半以降に比定される。4 は、滑石製石鍋の口縁部から体部片。内面全体に、擦痕・磨耗痕が観察され、釘などの金属製品を研いだ際に形成されたと考えられる断面が「V」字条を呈する 2 条の沈線が残存する。また、破断面の一部にも、磨耗痕が観察されることなどから、砥石への転用が考えられる。5 は、石製品茶臼の下臼。石材は、安山岩。白面は、磨耗する。径 2.3cm 程度の芯棒孔が、幅 0.2cm 程度の断面が「V」字形を呈する主溝 5 条・副溝 10 ～ 15 条が残存する。6 分画と推定される。白面の目が枝分かれするような不規則なものがあり、また目と目の間隔も一定ではないため、使用後に「目立て」がおこなわれたと考えられる。6 は、瀬戸・美濃産卸皿の口縁部片。7～9 は、金属製品。7 は、青銅製鍵の持手部。鍵部は欠損する。8 は、用途不明青銅製品。不整形な球状を呈す。9 は、用途不明青銅製品。断面は、かまぼこ状を呈する。端部は平坦につくり、緩い返りをもつ。上部に、くびれをもつ。形状から、木柄などを差込んで用いたものか。

表1 遺物観察表①

遺物 番号	遺物 番号	種類/器種	法量 (g) (口は優先)					成形	調整-器種		構成	粘土(石粒)	色調-色調 内面-内面	備考
			口径/ 最大径	底径/ 最大底	口径/ 最大底	口径/ 最大底	口径/ 最大底		外蓋	内蓋				
5-200 14-011	第10-1	土師器/小皿	7.6	1.0	3.4	—	—	平づくね	口縁部コナテ 底部回転車可なり	口縁部コナテ 底部コナテ	良好	褐色 10m2下褐色 黄赤光沢 少量	淡褐色色/淡褐色色	(5-200-下層)
5-200 9-811	第10-2	土師器/杯	11.0	2.4	7.6	—	—	口づくね	口縁-体部ナテ 底部回転車可なり	口縁部コナテ 体部ナテ	良好	褐色 20m2下白色 褐色粒子少量	褐色色/褐色色	(5-200-3F-120)
5-200 14-011	第10-3	土師器/杯	(12.0)	2.0	(3.0)	—	—	口づくね	口縁-体部コナテ 底部回転車可なり 刷し-褐色区画	口縁部コナテ 体部ナテ	良好	褐色 10m2下褐色 赤光沢 褐色光沢 褐色少量	褐色色/褐色色	—
5-200 9-811	第10-4	土師器/杯	9.6	2.1	3.8	—	—	口づくね	体部回転のため 底部平削	口縁-体部コナテ 底部コナテ	良好	褐色 10m2下褐色 赤光沢 白色粒子少量	褐色色/褐色色	口づくね
5-200 9-811	第10-5	土師器/杯	11.4	2.3	3.3	—	—	口づくね	体部ナテ-底部回転 車可なり	口縁-体部コナテ 底部コナテ	良好	褐色 10m2下褐色 赤光沢 褐色色 褐色少量	淡褐色色/淡褐色色	(5-200-3F-144) 口縁部内外蓋保護
5-200 14-011	第10-6	土師器/皿	(10.0)	1.8	(3.0)	—	—	口づくね	口縁-体部コナテ 底部回転車可なり	口縁-体部コナテ 底部コナテ	良好	褐色 10m2下褐色 赤光沢 褐色色 褐色少量	淡褐色色/淡褐色色	口づくね
5-200 14-011	第10-7	土師器/杯×皿	(9.4)	2.2	3.8	—	—	口づくね	口縁部コナテ 体部ナテ-底部回転車 可なり	コナテ	良好	褐色 10m2下褐色 赤光沢 褐色少量 褐色少量 褐色少量	褐色色/褐色色	(5-200-中層) 口づくね
5-200 9-811	第10-8	京橋系土師器/皿	8.1	2.0	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 10m2下褐色 赤光沢 白色粒子少量	淡褐色色/淡褐色色	遺物観察2層 口縁部内外蓋-体部 内外蓋保護
5-200 14-011	第10-9	京橋系土師器/皿	8.5	2.1	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 10m2下褐色 赤光沢 白色-褐色 赤光沢 褐色少量	淡褐色色/淡褐色色	遺物観察2層
5-200 14-011	第10-10	京橋系土師器/皿	8.8	2.3	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 10m2下白色 褐色少量	淡褐色色/淡褐色色	(5-200-3) 遺物観察2層
5-200 9-111	第10-11	京橋系土師器/皿	12.6	2.2	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	口縁部コナテ 体部ナテ	良好	褐色 20m2下褐色 赤光沢 褐色 10m2 下白色-黄赤光沢 少量	褐色色/褐色色	(5-200-3) 遺物観察2層
5-200 9-111	第10-12	京橋系土師器/皿	21.0	3.0	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 20m2下褐色 赤光沢 下白色粒子-褐色 褐色少量	淡褐色色/淡褐色色	(5-200-3 P-194) 遺物観察2層 遺物観察2層(5-200- P-11)
5-200 9-111	第10-13	京橋系土師器/皿	8.2	2.0	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 10m2下褐色 赤光沢 白色粒子少量	淡褐色色/淡褐色色	(5-200-2) 遺物観察2層
5-200 14-011	第10-14	京橋系土師器/皿	8.2	2.2	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 10m2下白色 褐色-褐色 赤光沢 褐色少量	淡褐色色/淡褐色色	(5-200-2) 遺物観察2層
5-200 9-811	第10-15	京橋系土師器/皿	8.3	2.1	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 10m2下褐色 赤光沢 白色粒子少量	淡褐色色/淡褐色色	(5-200-3) 遺物観察2層 2枚割りによる異色
5-200 9-111	第10-16	京橋系土師器/皿	8.5	2.1	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 10m2下褐色 赤光沢 褐色 10m2 下白色-褐色 赤光沢 褐色少量	淡褐色色/淡褐色色	(5-200-3) 遺物観察2層
5-200 9-111	第10-17	京橋系土師器/皿	8.2	2.0	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	口縁部コナテ 体部ナテ	良好	褐色 10m2下褐色 赤光沢 褐色少量	褐色色/褐色色	(5-200-1) 遺物観察2層
5-200 9-111	第10-18	京橋系土師器/皿	8.6	1.8	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 20m2下白色 褐色少量	淡褐色色/淡褐色色	(5-200-3) 遺物観察2層
5-200 9-811	第10-19	京橋系土師器/皿	8.8	2.1	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 10m2下褐色 赤光沢 白色 褐色少量	淡褐色色/淡褐色色	(5-200-2) 遺物観察2層 口縁部内外蓋保護
5-200 14-011	第10-20	京橋系土師器/皿	8.8	2.2	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 10m2下褐色 赤光沢 褐色少量	淡褐色色/淡褐色色	(5-200-下層 P- 160) 遺物観察2層
5-200 14-011	第10-21	京橋系土師器/皿	8.8	2.0	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 10m2下褐色 赤光沢 白色粒子少量	淡褐色色/淡褐色色	(5-200-下層 P- 200) 遺物観察2層
5-200 9-111	第10-22	京橋系土師器/皿	9.2	2.2	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 10m2下褐色 赤光沢 白色-黄赤光 沢 褐色少量	淡褐色色/淡褐色色	(5-200-2 P-2) 遺物観察2層 口縁部内外蓋保護
5-200 14-011	第10-23	京橋系土師器/皿	8.9	2.2	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 10m2下白色 褐色少量 褐色少量	淡褐色色/淡褐色色	(5-200-下層 P- 81) 遺物観察2層
5-200 9-811	第10-24	京橋系土師器/皿	9.0	2.4	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 10m2下白色 褐色少量	褐色色/褐色色	(5-200-2 P-40) 遺物観察2層 2枚割りによる内外 異色
5-200 14-011	第10-25	京橋系土師器/皿	8.8	2.0	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 40m2下褐色 赤光沢 褐色 30m2 下褐色赤光沢 褐色少量	淡褐色色/淡褐色色	遺物観察2層
5-200 14-011	第10-26	京橋系土師器/皿	9.1	2.5	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 10m2下褐色 赤光沢 褐色少量	淡褐色色/淡褐色色	(5-200-下層 P- 180) 遺物観察2層 口縁部内外蓋保護
5-200 14-011	第10-27	京橋系土師器/皿	10.7	2.3	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 10m2下白色 褐色少量 褐色少量	淡褐色色/淡褐色色	遺物観察2層
5-200 14-011	第10-28	京橋系土師器/皿	16.3	2.5	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	口縁部コナテ 体部ナテ	良好	褐色 10m2下白色 褐色少量 褐色少量	淡褐色色/淡褐色色	(5-200-中層 P- 230) 2枚割りによる内外 異色
5-200 14-011	第10-29	京橋系土師器/皿	8.9	2.4	—	—	—	平づくね	口縁部コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	褐色 10m2下褐色 赤光沢 褐色少量	淡褐色色/淡褐色色	(5-200-2) 遺物観察2層

表2 遺物観察表②

遺物 番号	調査 番号	種類/遺物	法量 (単位) (注)状況					形状	調査-器具		検定	組成 (XRF)	色調 色温 外装/内装	備考
			口径/ 最大長	高さ/ 最大幅	厚さ/ 最大厚	孔数	重さ		内面	外面				
5-200 16-011	第902-30	京極系土器類/品	8.7	2.0	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下褐色粒子、径0.2cm以下白色粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	(5-200-下層 P-222) 遺地層年表2期 口縁部内装面破
5-200 16-011	第902-31	京極系土器類/品	9.0	2.2	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	口縁部ヨコナテ体部ナデ	良好	径0.3cm以下白色、透明粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	遺地層年表2期 口縁部内装面破
5-200 9-111	第902-32	京極系土器類/品	8.6	2.1	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下褐色、白色、透明粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	遺地層年表2期
5-200 16-011	第902-33	京極系土器類/品	8.9	2.2	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下褐色粒子、径0.1cm以下黄色光沢粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	遺地層年表2期
5-200 16-011	第902-34	京極系土器類/品	8.6	1.7	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	口縁部ヨコナテ体部ナデ	良好	径0.3cm以下白色粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	遺地層年表2期
5-200 9-111	第902-35	京極系土器類/品	8.8	2.2	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	口縁部ヨコナテ体部ナデ	良好	径0.3cm以下褐色粒子、径0.1cm以下黄色光沢粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	遺地層年表2期
5-200 16-011	第902-36	京極系土器類/品	8.8	2.4	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	口縁部ヨコナテ体部ナデアガ	良好	径0.3cm以下褐色、白色、透明粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	遺地層年表2期 口縁部内装面破
5-200 16-011	第902-37	京極系土器類/品	8.8	2.1	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下褐色、白色、黄色光沢粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	(5-200-2) 遺地層年表2期
5-200 16-011	第902-38	京極系土器類/品	8.8	2.2	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下白色、透明粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	(5-200-2) 遺地層年表2期 口縁部内装面破
5-200 9-011	第902-39	京極系土器類/品	8.2	2.3	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下白色、黄色光沢粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	(5-200-3) 遺地層年表2期
5-200 16-011	第902-40	京極系土器類/品	9.0	2.0	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下褐色、白色粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	(5-200-4中層) 遺地層年表2期 口縁部内装面破 透視観察台(5-200-3 16-011)
5-200 9-011	第902-41	京極系土器類/品	8.6	2.2	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下黄色光沢粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	(5-200-3 P-200) 遺地層年表2期 口縁部内装、透視 小破
5-200 16-011	第902-42	京極系土器類/品	8.6	2.3	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下黄色光沢粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	遺地層年表2期
5-200 16-011	第902-43	京極系土器類/品	12.6	2.2	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下白色、黄色光沢粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	遺地層年表2期
5-200 16-C11	第902-44	京極系土器類/品	11.0	2.8	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	口縁部ヨコナテ体部ナデアガ	良好	径0.4cm以下白色粒子、径0.1cm以下褐色、黄色光沢粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	(5-200-3) 透視分層①-② 透視観察台(5-200- 4中層 16-C11)
5-200 16-011	第902-45	京極系土器類/品	8.6	2.0	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下褐色、黄色光沢粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	(5-200-3) 遺地層年表2期 口縁部内装面破
5-200 9-L11	第902-46	京極系土器類/品	10.7	2.3	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下黄色、灰沢、透明粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	(5-200-2 P-1) 遺地層年表2期
5-200 16-011	第902-47	京極系土器類/品	10.6	2.4	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下褐色粒子、径0.1cm以下黄色光沢粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	遺地層年表2期
5-200 9-011	第902-48	京極系土器類/品	10.6	2.2	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下褐色粒子、径0.1cm以下白色粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	(5-200-2 P-02) 遺地層年表2期
5-200 16-C11	第902-49	京極系土器類/品	11.1	2.2	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	口縁部ヨコナテ体部ナデ	良好	径0.3cm以下褐色粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	遺地層年表2期
5-200 16-C11	第902-50	京極系土器類/品	11.6	2.7	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下褐色、黄色光沢粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	遺地層年表2期
5-200 16-011	第902-51	京極系土器類/品	12.2	2.2	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	口縁部ヨコナテ体部ナデ	良好	径0.4cm以下褐色粒子、径0.1cm以下黄色光沢粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	(5-200-下層) 遺地層年表2期
5-200 16-C11	第902-52	京極系土器類/品	12.0	2.4	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下白色、黄色光沢粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	(5-200-下層 P-201) 遺地層年表2期
5-200 9-011	第902-53	京極系土器類/品	12.4	2.7	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下褐色、白色粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	(5-200-2 P-79) 遺地層年表2期
5-200 16-011	第902-54	京極系土器類/品	12.1	2.7	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下褐色粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	遺地層年表2期
5-200 16-C11	第902-55	京極系土器類/品	12.5	2.4	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	付着物のため調査不詳	良好	径0.3cm以下褐色、白色粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	(5-200-中層) 遺地層年表2期
5-200 16-011	第902-56	京極系土器類/品	12.4	2.7	—	—	—	平づくね	付着物のため調査不詳	付着物のため調査不詳	良好	径0.3cm以下白色、黄色光沢粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	(5-200-4中層 P-230) 遺地層年表2期
5-200 9-111	第902-57	京極系土器類/品	11.4	2.8	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	口縁部ヨコナテ体部ナデ	良好	径0.4cm以下褐色粒子、径0.1cm以下黄色光沢粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	(5-200-1) 遺地層年表2期
5-200 16-011	第902-58	京極系土器類/品	(11.2)	3.4	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	ナデアガ	良好	径0.3cm以下褐色、白色、黄色光沢粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	遺地層年表2期
5-200 9-111	第902-59	京極系土器類/品	11.4	3.5	—	—	—	平づくね	口縁部ヨコナテ体部ナデ	付着物のため調査不詳	良好	径0.3cm以下白色、黄色光沢粒子少量	淡緑黄色/淡緑黄色	遺地層年表2期

表3 遺物観察表③

遺物 番号	遺物 番号	種類/部類	法量 (cm) (1は僅小)				形状	遺存 遺物		構成	胎土(石臼)	色澤 焼跡 片層/内層	備考
			口径/ 最大径	底径/ 最大径	底径/ 最大径	孔径		重量	外蓋				
5-200 14-011	第100-60	青銅土器器ノ 蓋	10.8	3.5	—	—	手づく ね	口縁部下コナテ・体 部ナテ	口縁部下コナテ・体 部ナテ	良好	胎: Iona下白 色・黄白色(胎土) 少量	透明茶色/淡褐色 (5-200-3) 深緑ノ蓋	
5-200 14-011	第100-61	青銅土器器ノ 蓋	11.4	3.8	—	—	手づく ね	口縁部下コナテ・体 部ナテ	口縁部下コナテ・体 部ナテ	良好	胎: Iona下褐色 胎土少量	黄褐色/褐色色 (5-200-3) 透明分0ノ蓋 中層(5-200- 14-011)	
5-200 9-111	第100-42	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	—	4.0+α	—	—	口ウロ	胎動—口縁部下 縁(溝)1条(溝深 浅)	口縁部下全条縁内 西方隅文下1条縁一 胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 (5-200-3)	
5-200 9-111	第100-43	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	—	5.2+α	—	—	口ウロ	口縁部下2条条縁 内深文条・体部1条 条縁下深文条一 胎動	口縁部下条条縁一 胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 (5-200-3 P-106) 小野分種付(106)群	
5-200 9-111	第100-44	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	—	4.2+α	—	—	口ウロ	口縁部下2条条縁内 深文条・体部1条 条縁下深文条一 胎動	口縁部下条条縁一 胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 —	
5-200 9-111	第100-45	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	—	3.2+α	—	—	口ウロ	胎動	体部深文条草文 タンブ一胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 (5-200-1)	
5-200 9-111	第100-46	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	(11.2)	3.4+α	—	—	口ウロ	口縁部下2条条縁内 深文条・体部1条 条縁下深文条一 胎動	口縁部下条条縁一 胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 (5-200-3 P-71) 遺物観察台(5-200- 9-111)	
5-200 9-111	第100-47	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	11.4	3.9	—	—	口ウロ	体部1条条縁(深 浅)一胎動	口縁部下全条縁内 (下部)条条縁ノ 草文	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 (5-200-3 P-183)	
5-200 9-111	第100-48	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	(11.0)	4.4+α	—	—	口ウロ	口縁部下2条条縁 内深文条・体部1条 条縁一胎動	口縁部下条条縁一 胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 (5-200-3 P-132)	
5-200 9-111	第100-49	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	(10.0)	4.8+α	—	—	口ウロ	胎動	体部深文条草文 タンブ・見込ノ深 浅条縁一胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 (5-200-2 P-77)	
5-200 14-011	第100-70	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	(12.0)	4.4+α	—	—	口ウロ	口縁部下1条条縁 ・体部1条一胎動 ・見入	口縁部下条条縁一 胎動・見入	良好	胎: Iona下白色 胎土少量、中 胎動に透い	透明胎/透明胎 (5-200-3)	
5-200 14-011	第100-71	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	(12.4)	5.0+α	—	—	口ウロ	口縁部下2条条縁 ・体部1条・見込ノ 深浅条縁一胎動	口縁部下条条縁一 胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 (5-200-下層)	
5-200 9-111	第100-72	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	(11.6)	4.2+α	—	—	口ウロ	口縁部下1条条縁 ・体部1条一胎動 ・見入	口縁部下1条条縁 ・体部1条一胎動 ・見入	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 (5-200-2)	
5-200 9-011	第100-73	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	—	1.4+α	4.8	—	口ウロ	体部一深文条縁 ノ一胎動・見入	見込ノ条条縁内 (深)ノ一胎動・見 入	良好	胎: Iona下白色 胎土少量、胎動 に透い	透明胎/透明胎 豊村付種付種付群 付票	
5-200 14-011	第100-74	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	(11.3)	4.7	—	—	口ウロ	胎動	口縁部下西方隅文 一胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 (5-200-下層 P- 132)	
5-200 14-011	第100-75	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	(14.2)	3.1+α	—	—	口ウロ	口縁部下1条条縁 ・体部1条一胎動 ・見込ノ深浅条縁 ノ一胎動	口縁部下条条縁一 胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 —	
5-200 14-011	第100-76	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	(17.4)	8.5	(4.3)	—	口ウロ	口縁部下一胎動下 ・高台内条条縁 内「深文条」一 胎動・豊村付胎動 胎動	口縁部下条条縁内 高台内条条縁一 胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	(5-200-下層) 小野分種付(106)群 下層(5-200-14- 011)5-200-下層	
5-200 14-011	第100-77	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	(15.1)	3.3+α	—	—	口ウロ	口縁部下2条条縁 ・体部1条一胎動 ・見込ノ一胎動	口縁部下条条縁一 胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 (5-200-中層) 小野分種付(106)群	
5-200 9-111	第100-78	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	—	3.4+α	(5.1)	—	口ウロ	体部下半一深文条 縁(深)一胎動 ・高台内条条縁 内「深文条」一 胎動・豊村付胎 動胎	体部見込ノ深文条 縁ノ一胎動 ・見込ノ深文条 縁ノ一胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 (5-200-1) 小野分種付(106)群	
5-200 14-011	第100-79	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	—	1.4+α	(4.4)	—	口ウロ	体部下1条条縁 ・高台内条条縁 内「深文条」一 胎動	見込ノ深文条縁内 「深文条」一胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 小野分種付(106)群	
5-200 9-111	第100-80	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	—	2.4+α	(4.0)	—	口ウロ	体部・見込ノ深文 条縁内「深文条」 一胎動・豊村付胎 動胎	体部下1条条縁 ・体部・見込ノ深 文条縁内「深文条」 一胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 (5-200-3 P-4) 小野分種付(106)群	
5-200 9-111	第100-81	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	(12.2)	5.9	4.7	—	口ウロ	口縁部下2条条縁 ・体部1条一胎動 ・見込ノ深文条縁 ノ一胎動	口縁部下条条縁 ・体部1条一胎動 ・見込ノ深文条縁 ノ一胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	(5-200-3 P-127) 小野分種付(106)群 遺物観察台(5-200- 9-111)0-5-200-3 P-142-5-200-3 P- 106)	
5-200 9-111	第100-82	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	(8.2)	3.2	—	—	口ウロ	口縁部下2条条縁 ・体部1条一胎動	口縁部下・見込ノ深 文条縁一胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 (5-200-1)	
5-200 9-111	第100-83	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	(11.1)	3.3+α	—	—	口ウロ	口縁部下2条条縁 ・体部1条一胎動	口縁部下条条縁一 胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 (5-200-3 P-43)	
5-200 4-011	第100-84	黄瓦(遺徳窯 系)ノ瓦	(13.7)	2.9	(7.8)	—	口ウロ	口縁部下一深文条 縁ノ一胎動	口縁部下条条縁一 胎動	良好	胎: Iona下白色 胎土少量	透明胎/透明胎 (5-200-3) 小野分種付(106)群	

表4 遺物観察表④

遺物 番号	調査 番号	種類/器種	法量 (単位)					成形	調査-器類		検定	粘土 (石粒)	色相 (器類 内外/内表)	備考
			口径/ 最大径	高さ/ 最大径	口径/ 最大径	口径	重量		内表	内面				
5-200 9-81	第1002-95	青瓦 (唐摺縁高) 高/蓋	(10.6)	2.4	(5.6)	—	—	口縁部下1条溝縁、 体部 高台(唐摺縁高) 高/蓋(高台)に「 唐」一筋彫付 輪郭あり	口縁部下1条溝縁、 体部 高台(唐摺縁高) 高/蓋(高台)に「 唐」一筋彫付 輪郭あり	良好	緑0.1ton以下 粘土少量	透明釉/透明釉	(5-200-1) 小野分館展示品群	
5-200 14-C11	第1002-96	青瓦 (唐摺縁高) 高/蓋	(11.6)	2.4	7.0	—	—	高台内字跡付一 筋彫 蓋付輪郭有 り	施釉	良好	緑0.1ton以下 粘土少量	透明釉/透明釉	(5-200-2)	
5-200 9-113	第1002-97	青瓦 (唐摺縁高) 高/蓋	(11.2)	2.6	4.4	—	—	口縁部下 高台(唐摺 縁高)に「唐」一筋 彫付、体部 高台(唐 摺縁高)に「唐」一筋 彫付、高台内字跡付 「大明神堂」	口縁部下2条溝縁、 体部一筋彫付 高台(唐摺縁高)に「 唐」一筋彫付	良好	緑0.1ton以下 粘土少量	透明釉/透明釉	(5-200-3 P-111) 小野分館展示品群	
5-200 14-C11	第1002-98	青瓦 (唐摺縁高) 高/蓋	(10.0)	2.7	5.8	—	—	高台内字跡付 「(口)口」一筋 彫付 蓋付輪郭有 り	高台内2条溝縁内 文彫縁一筋彫	良好	緑0.1ton以下 粘土少量	透明釉/透明釉	—	
5-200 14-011	第1002-99	青瓦 (唐摺縁高) 高/蓋	(11.2)	2.6	(5.3)	—	—	高台内字跡付一 筋彫 蓋付輪郭有 り	高台内2条溝縁内 文彫縁一筋彫	良好	緑0.1ton以下 粘土少量	透明釉/透明釉	(5-200-3)	
5-200 14-011	第1002-90	青瓦 (唐摺縁高) 高/蓋	11.0	1.4+9	—	—	—	高台内字跡付「唐 文」一筋彫	高台内2条溝縁内「唐 文」一筋彫	良好	緑0.1ton以下 粘土少量	透明釉/透明釉	小野分館展示品群	
5-200 14-011	第1102-91	青瓦/蓋	—	3.1+9	—	—	—	口縁部下条溝縁 一筋彫 高台内字跡 付	施釉 高台内字跡 付	良好	緑0.1ton以下 粘土少量	透明釉に濃い緑黄色 /透明釉に濃い緑黄色 、陶質に濃い	—	
5-200 14-A11	第1102-92	青瓦/蓋	—	1.8	(5.2)	—	—	施釉、高台内高脚	高台内2条溝縁一 筋彫	不詳	緑0.1ton以下 粘土少量、陶質 に濃い	透明釉に濃い緑黄色 /透明釉に濃い緑黄色 に濃い	(5-200-下層)	
5-200 8-111	第1102-93	青瓦 (唐摺縁高) 高/蓋	12.2	3.1	6.3	—	—	高台内高脚、白 色土を施す、口 縁一筋彫付(唐摺 縁高)	施釉	良好	緑0.1ton以下 粘土少量	透明黄色、白白色/ 透明黄色	(5-200-3 P-188)	
5-200 14-B11	第1102-94	中国産白磁/器 類	11.7	2.5+9	—	—	—	口縁一筋彫	施釉	良好	緑0.1ton以下 粘土少量、陶質に 濃い	黄白色/白白色	森田分館白磁C群	
5-200 9-81	第1102-95	中国産白磁/器 類	—	1.2+9	—	—	—	口縁一筋彫	施釉、口縁縁部 彫	良好	緑0.1ton以下 粘土少量	黄白色/白白色	(5-200-1)	
5-200 9-81	第1102-96	中国産白磁/器 類	(8.2)	2.2	3.2	—	—	口縁縁部一筋彫 高台内字跡付「 唐」一筋彫、高台 縁に「唐」一筋 彫	口縁縁部、体部 彫 高台内字跡付 「唐」一筋彫、高 台縁に「唐」一筋 彫	良好	緑0.1ton以下 粘土少量、陶質 に濃い	黄白色/白白色	(5-200-3 P-207) 2次調査による調査	
5-200 14-A11	第1102-97	中国産白磁/器 類	(12.2)	1.9+9	—	—	—	口縁縁部、高台内 字跡付	施釉、高台内字跡 付	良好	緑0.1ton以下 粘土少量、陶質 に濃い	黄白色/黄白色	森田分館白磁C群	
5-200 9-81	第1102-98	中国産白磁/器 類	(11.2)	2.1+9	—	—	—	施釉	施釉	良好	緑0.1ton以下 粘土少量	黄白色/白白色	(5-200-3 P-151) 森田分館白磁C群	
5-200 9-81	第1102-99	中国産白磁/器 類	—	3.8+9	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	緑0.1ton以下 粘土少量	黄白色/白白色	(5-200-1)	
5-200 14-B11	第1102-100	中国産白磁/器 類	—	7.2+9	—	0.6	—	粘土施 縁上げ	施釉 輪一筋彫	良好	緑0.1ton以下 粘土少量、陶質 に濃い	黄白色/黄白色	(5-200-2 P-25)	
5-200 14-B11	第1102-101	朝鮮式白磁/器 類	(5.8)	4.4+9	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ、高脚ナ デ	良好	緑0.1ton以下 粘土少量	黄白色/黄白色	(5-200-3) 森田分館	
5-200 14-C11	第1102-102	朝鮮式白磁/器 類	6.0	6.1+9	—	—	—	口縁一筋彫	施釉	良好	緑0.1ton以下 粘土少量	黄白色/黄白色	(5-200-下層) 森田分館 遺物調査台(5-200 14-C11)	
5-200 14-C11	第1102-103	中国産白磁/器 類	(15.8)	6.2	(5.2)	—	—	高脚、口縁縁部 彫、高台内字跡 付	高台内字跡付、口 縁縁部彫、高台 縁に「唐」一筋 彫	良好	緑0.1ton以下 粘土少量、中 陶質に濃い	透明釉に濃い白 色土を施す、中 陶質に濃い	(5-200-中層) 森田分館 遺物調査台(5-200 上層 14-C11)	
5-200 14-011	第1102-104	青瓦×青白磁/ 器類	(20.6)	6.1	(5.2)	—	—	口縁一筋彫、高 台内字跡付	高台内字跡付、口 縁縁部彫、高台 縁に「唐」一筋 彫	良好	緑0.1ton以下 粘土少量、陶質 に濃い	黄白色/黄白色	—	
5-200 14-011	第1102-105	朝鮮式白磁/器 類	—	2.4+9	5.0	—	—	口縁一筋彫	施釉 高脚ナ デ	良好	緑0.1ton以下 粘土少量、陶質 に濃い	黄白色/黄白色	(5-200-下層 P- 719)	
5-200 9-81	第1102-106	ベトナム白磁/ 器類	—	3.5+9	—	—	—	口縁一筋彫	施釉、口縁縁部 彫	良好	緑0.1ton以下 粘土少量、陶質 に濃い	透明釉/透明釉	(5-200-3) 森田分館展示品群	
5-200 9-81	第1102-107	ベトナム白磁/ 器類	(12.0)	5.8	5.5	—	—	高脚、口縁縁部 彫、高台内字跡 付、高台縁に「 唐」一筋彫	口縁部下2条溝縁、 体部高台(唐摺縁 高)に「唐」一筋 彫、高台内字跡 付、高台縁に「 唐」一筋彫	良好	緑0.1ton以下 粘土少量、陶質 に濃い	透明釉/透明釉	(5-200-3 P-168)	
5-200 14-011	第1102-108	朝鮮式白磁/器 類	10.4+9	3.3+9	5.4	—	—	口縁一筋彫	施釉	良好	緑0.1ton以下 粘土少量、陶質 に濃い	黄白色/黄白色	(5-200-下層 P- 221) 森田分館	
5-200 9-81	第1102-109	朝鮮式白磁/器 類	—	4.2+9	(5.3)	—	—	口縁一筋彫	施釉	良好	緑0.1ton以下 粘土少量、陶質 に濃い	黄白色/黄白色	森田分館	
5-200 14-C11	第1102-110	タイ産白磁/器 類	(35.0)	6.4	—	—	—	粘土施 縁上げ	口縁一筋彫、高 脚ナデ	良好	緑0.1ton以下 粘土少量、陶質 に濃い	黄白色/黄白色	(5-200-下層 P- 62) 遺物調査台(5-200 14-C11)	



表6 遺物観察表⑥

遺物 番号	調査 番号	種類/器種	法量 (mm) ( )は状況					成形	調整・裝飾		焼成	胎土 (石粒)	色調・釉薬 内装/内装	備考
			口径/口 最大長	底径/底 最大長	高さ/口 最大長	口径	重量		外面	内面				
5-200-14-C11	第14図-136	瓦葺土器/大鉢	(41.8)	11.5+α	—	—	—	粘土焼 結上げ	裏面割削のため調整 不平整。口縁部 下段に凹溝。底面粗 粒砂付着	前面割削のため調整 不平整	良好	焼0 胎土下白色。黄赤大気粉土 少量	褐色色/褐色色	—
5-200-16-B11	第14図-137	瓦葺土器/大鉢	(40.2)	6.5+α	—	—	—	粘土焼 結上げ	土古手	土古手	良好	焼0 胎土下白色。褐色粉土少量	黒灰色/黒灰色	—
5-200-16-B11	第14図-138	陶磁器/磁器/器	—	4.5+α	—	—	—	粘土焼 結上げ	縦割れ付着跡。割れ付 き	当て具痕	良好	焼0 胎土下白色。白色粉土少量	黄灰色/黄灰色	—
5-200-16-B11	第14図-139	瓦葺土器/大鉢	(33.0)	8.9+α	—	—	—	粘土焼 結上げ	口縁部下段突出部内 彫文も刻みで胎土 欠。胎土古手	口縁部コナナリ。胎 土古手	良好	焼0 胎土下白色。褐色粉土少量	黒灰色/黒灰色	(5-200-3)
5-200-16-B11	第14図-140	瓦葺土器/大鉢	40.4	20.7	33.0	—	—	粘土焼 結上げ	口縁部下段突出部 内文も刻み。胎 土古手。胎土下 段に突出部付着跡 も付着。土古手 多。底面粗粒砂 付着	口縁部コナナリ。胎 土古手。胎土下 段に突出部	良好	焼0 胎土下褐色 粉土。焼0 胎土 下白色粉土。焼 0 胎土下褐色 粉土少量	黒褐色色/黒褐色色	(5-200-下層) 二層 遺跡調査区(5-200-2 14-011-5-200-14- 011-5-200-中層 14- 011 P-246)
5-200-9-111	第14図-141	瓦/軒瓦	13.0+α	24.8+α	3.6	—	—	9-9手	瓦胎土古手。瓦 胎土古手。胎土 下段に突出部付 着跡も付着。土 古手多	縦一断面コナ ナリ。凸面縁方向 の瓦ナリ	良好	焼0 胎土下褐色 粉土。焼0 胎土 下褐色粉土少 量	褐色灰黄色/ 凸面灰黄色	(5-200-2 P-124) 遺跡調査区
5-200-16-B11	第14図-142	石製品/硯	4.9+α	3.1+α	0.7	—	—	ケズリ	縦断面割削。縦断面 不平整。縦断面 粗粒砂	縦断面研ぎ	—	縦断面灰黄赤	赤黄色	(5-200-中層) 「胎土」か
5-200-16-C11	第14図-143	石製品/硯	8.9	7.6	2.1	—	—	ケズリ	縦断面割削。縦断面 粗粒砂	縦断面研ぎ	—	縦断面灰黄赤	赤黄色	(5-200-中層) 「胎土」
5-200-9-211	第14図-144	石造物/無地磁 器/器	28.8	10.1	22.4	—	—	ケズリ	無地磁器中央部 割ケズリ出し。上 部・下部と古手整 合	—	—	濃灰赤	灰黄色	(5-200-3 P-182) 遺跡調査区(5-200-2 9-111 P-182)
5-200-9-211	第14図-145	石造物/無地磁 器/器	—	32.9	22.1	—	—	ケズリ	断面古手・上部 下部ケズリ	—	—	濃灰赤	灰黄色	(5-200-2 P-225) 遺跡調査区
5-200-9-211	第14図-146	ガラス製品/小 皿	0.4	0.4	0.3	0.2	—	—	—	—	—	—	—	—
5-200-9-211	第14図-147	陶製品/磁器/器	1.2	1.2	1.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5-200-16-B11	第14図-148	陶製品/磁器/器	0.6	0.3	0.2	—	0.2	—	—	—	—	—	—	—
5-200-9-211	第14図-149	陶製品/土器/器	0.9	0.9	0.4	—	1.2	—	—	—	—	—	—	—
5-200-9-111	第14図-150	陶製品/土器/器	0.8+α	0.8+α	0.2	—	0.5	—	—	—	—	—	—	—
5-200-9-211	第14図-151	陶製品/土器/器	0.7	0.3	0.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5-200-9-111	第14図-152	陶製品/土器/器	1.4	0.5	0.3	0.2	—	—	—	—	—	—	—	—
5-200-16-B11	第14図-153	陶製品/土器/器	3.2	2.2	0.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5-200-9-111	第14図-154	陶製品/土器/器	5.9	1.3	0.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5-200-16-B11	第14図-155	陶製品/土器/器	6.0	4.6	0.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5-200-9-211	第14図-157	鏡質/北宋銭	2.5	—	0.1	1.0 0.7	2.3	—	—	—	—	—	—	—
5-200-9-211	第14図-158	鏡質/北宋銭	2.4	—	0.1	1.0 0.7	2.5	—	—	—	—	—	—	—
5-200-16-B11	第14図-159	鏡質/北宋銭	2.4	—	0.1	1.0 0.7	2.5	—	—	—	—	—	—	—
5-200-9-211	第14図-160	鏡質/北宋銭	2.4	—	0.2	1.0 0.5	2.3	—	—	—	—	—	—	—
5-200-16-B11	第14図-161	鏡質/北宋銭	2.3	—	0.1	1.0 0.7	2.5	—	—	—	—	—	—	—
5-200-9-211	第14図-162	鏡質/北宋銭	2.4	—	0.1	1.0 0.7	2.4	—	—	—	—	—	—	—
5-200-9-211	第14図-163	鏡質/北宋銭	2.4	—	0.1	1.0 0.7	2.7	—	—	—	—	—	—	—
5-200-9-111	第14図-164	鏡質/北宋銭	2.4	—	0.1	1.0 0.6	2.2	—	—	—	—	—	—	—
5-200-9-111	第14図-165	鏡質/北宋銭	2.5	—	0.1	1.0 0.6	1.9	—	—	—	—	—	—	—
5-200-9-211	第14図-166	陶製品/土器/器	13.7+α	0.9+α	0.8	0.4	—	—	—	—	—	—	—	—
5-200-9-211	第14図-167	陶製品/土器/器	4.5+α	3.7	0.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5-200-16-B11	第14図-168	陶製品/土器/器	1.5+α	1.3	1.3+α	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5-200-16-B11	第14図-169	陶製品/土器/器	4.7	3.2	1.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5-200-16-B11	第14図-170	陶製品/土器/器	11.4	1.7	0.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—

表7 遺物観察表②

遺物 番号	調査 番号	種類/器種	質量(g) ( )は補充					成形	調整-装飾		構成	胎土(石材)	色澤-釉薬 内面-外面	備考
			口縁/ 最大径	底径/ 最大径	底厚/ 最大径	孔径	重量		外面	内面				
5-200 9-111	第16区-171	鉄製品/小刀	12.8	3.0	0.3	—	—	—	—	—	—	—	(5-200-3)	
5-200 9-111	第16区-172	鉄製品/棒状物	32.7	2.0	0.9	—	—	—	—	—	—	—	(5-200-3 P-20)	
5-200 9-111	第16区-173	鉄製品/棒状物	36.3	2.1	0.8	—	—	—	—	—	—	—	(5-200-3 P-212)	
5-200 9-111	第16区-174	鉄製品/釘	6.0	4.9	1.1	—	—	鍛造	—	—	—	—	(5-200-3 P-119)	
5-200 14-011	第17区-1	京師系土師器ノ 皿	8.7	2.2	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	行書物のため調整 不明確	良好	埴0.10mm下焼 色・黄赤光沢付 少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層	
5-200 14-011	第17区-2	京師系土師器ノ 皿	8.9	2.2	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	ナデアツ	良好	埴0.10mm下焼 色・黄赤光沢付 少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層	
5-200 14-011	第17区-3	京師系土師器ノ 皿	8.9	2.1	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	ナデアツ	良好	埴0.10mm下焼色 粘土少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層	
5-200 14-011	第17区-4	京師系土師器ノ 皿	9.0	2.1	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	ナデアツ	良好	埴0.10mm下焼 色・黄赤光沢付 少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層	
5-200 14-011	第17区-5	京師系土師器ノ 皿	9.0	2.1	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	ナデアツ	良好	埴0.10mm下白 色・黄赤光沢付 少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層	
5-200 14-011	第17区-6	京師系土師器ノ 皿	9.0	2.0	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	ナデアツ	良好	埴0.10mm下透焼 粘土少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層 口縁部内外露出部	
5-200 14-011	第17区-7	京師系土師器ノ 皿	8.6	2.0	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	ナデアツ	良好	埴0.10mm下焼色 粘土少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層 口縁部内外露出部	
5-200 9-111	第17区-8	京師系土師器ノ 皿	9.2	2.1	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	ナデアツ	良好	埴0.10mm下白 色・黄赤光沢付 少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層	
5-200 14-011	第17区-9	京師系土師器ノ 皿	8.8	2.1	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	ナデアツ	良好	埴0.10mm下白 色・褐色粘土付 少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層	
5-200 9-111	第17区-10	京師系土師器ノ 皿	8.8	2.1	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	ナデアツ	良好	埴0.10mm下焼色 粘土・埴0.10mm 下白・黄赤光沢 付少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層 口縁部内外露出部	
5-200 9-111	第17区-11	京師系土師器ノ 皿	8.6	2.1	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	ナデアツ	良好	埴0.10mm下白 色・黄赤光沢付 少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層 口縁部内外露出部	
5-200 14-011	第17区-12	京師系土師器ノ 皿	8.6	2.0	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	行書物のため調整 不明確	良好	埴0.10mm下白 色・黄赤光沢付 少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層	
5-200 14-011	第17区-13	京師系土師器ノ 皿	8.4	2.2	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	ナデアツ	良好	埴0.10mm下焼 色・黄赤光沢付 少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層	
5-200 14-011	第17区-14	京師系土師器ノ 皿	8.6	2.4	—	—	平づく ね	行書物のため調整 不明確	良好	埴0.10mm下白 色・粘土少量	淡褐色色/淡褐色色	2次焼結による黄化		
5-200 14-011	第17区-15	京師系土師器ノ 皿	10.4	2.1	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	ナデアツ	良好	埴0.10mm下焼 色・白色粘土付 少量	暗褐色色/暗褐色色	塩化綿年家土層	
5-200 14-011	第17区-16	京師系土師器ノ 皿	11.9	2.5	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	ナデアツ	良好	埴0.10mm下焼色 粘土・埴0.10mm 下白色・透焼付 少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層 2次焼結による黄化	
5-200 14-011	第17区-17	京師系土師器ノ 皿	11.4	3.4	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ・行書物 のため調整不明確	良好	埴0.10mm下黄 赤光沢付少量	淡褐色色/淡褐色色	河野分館2-2層	
5-200 14-011	第17区-18	京師系土師器ノ 皿	11.8	3.4	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	良好	埴0.10mm下焼 色・白色粘土付 少量	淡褐色色/淡褐色色	河野分館2-2層	
5-200 14-011	第17区-19	京師系土師器ノ 皿	12.0	3.5	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	ナデアツ	良好	埴0.10mm下焼 色・白色粘土付 少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層	
5-200 14-011	第17区-20	京師系土師器ノ 皿	12.3	3.5	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	良好	埴0.10mm下焼 色・黄赤光沢付 少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層	
5-200 14-011	第17区-21	京師系土師器ノ 皿	12.0	3.7	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	行書物のため調整 不明確	良好	埴0.10mm下焼色 粘土少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層	
5-200 14-011	第17区-22	京師系土師器ノ 皿	11.8	3.5	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	ナデアツ	良好	埴0.10mm下焼 色・黄赤光沢付 少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層	
5-200 14-011	第17区-23	京師系土師器ノ 皿	12.4	3.4	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	行書物のため調整 不明確	良好	埴0.10mm下透焼 粘土少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層	
5-200 14-011	第17区-24	京師系土師器ノ 皿	13.4	3.5	—	—	平づく ね	口縁部ヨコナリ・楕 圓ナリ	ナデアツ	良好	埴0.10mm下焼 色・透焼付少量	淡褐色色/淡褐色色	塩化綿年家土層 見込み2次焼結によ る黄化	
5-200 14-011	第17区-25	中国陶磁器類 豆鉢花ノ底	(5.8)	0.9+0.4	—	—	平づく り	胎動	胎動	良好	埴0.10mm下白色 粘土少量、中々 黄赤に濃い	黄赤胎/黄赤胎	(5-200 P-4)	
5-200 14-011	第17区-26	中国陶磁器類 豆鉢花ノ底	(5.8)	0.9	3.6	—	平づく り	薄紫赤方粒と薄紫 スタンプ一胎動・胎 動・中々黄赤の黄 赤一胎動	胎動	良好	埴0.10mm下白色 粘土少量、中々 黄赤に濃い	黄赤胎/黄赤胎	—	
5-200 14-011	第17区-27	青花(唐磁器類 底ノ底×底)	—	2.4+0.4	—	—	口ウロ	口縁部下黄赤線・ 胎動	口縁部下黄赤線・ 胎動	良好	埴0.10mm下白色 粘土少量	透明胎/透明胎	—	
5-200 14-011	第17区-28	青花(唐磁器類 底ノ底×底)	—	2.7+0.4	—	—	口ウロ	口縁部下黄赤線・ 胎動	口縁部下黄赤線・ 胎動	良好	埴0.10mm下白色 粘土少量	透明胎/透明胎	—	
5-200 14-011	第17区-29	青花(唐磁器類 底ノ底×底)	(12.4)	3.8+0.4	—	—	口ウロ	口縁部下黄赤線・ 胎動	口縁部下黄赤線・ 胎動	良好	埴0.10mm下白色 粘土少量	透明胎/透明胎	—	
5-200 14-011	第17区-30	青花(唐磁器類 底ノ底×底)	(10.4)	2.5	0.0	—	口ウロ	胎動・薄青胎動付 移付付	見込み2次焼結内 面・胎動一胎動	良好	埴0.10mm下白色 粘土少量	透明胎/透明胎	—	
5-200 14-011	第17区-31	青花(唐磁器類 底ノ底×底)	—	4.4+0.4	—	—	口ウロ	口縁部下黄赤線・ 胎動	口縁部下黄赤線・ 胎動	良好	埴0.10mm下白色 粘土少量	透明胎/透明胎	—	

表8 遺物観察表⑧

遺物 番号	調査 番号	種類/器種	法量 (mm) (1/2程度)					成形	調査-器種		構成	粘土 (色)	色調 (器種 外装/内装)	備考
			口径/ 最大長	底径/ 最大短	高さ/ 最大厚	孔径	重量		内装	外装				
3-205 9-81	第17回-32	青花(唐透磁器 系)ノ瓶	(16.6)	6.6	7.1	—	—	口口	口縁部下1/5を削り、 体部文様(漆黒)を一 條線(赤土)で飾る。 蓋入	口縁部下-底辺内縁 赤土(赤土)一飾り 蓋入	良好	橙0.1以下下白色 粘土少量	透明釉/透明釉	透磁器(台子7号 9-81)
3-205 16-011	第17回-33	青花(唐透磁器 系)ノ蓋	—	1.0+α	(7.4)	—	—	口口	体部高台縁(赤土)を 削り、蓋付少 量削り	底辺赤土(赤土)一 飾り蓋入	良好	橙0.1以下下白色 粘土少量	透明釉/透明釉	—
3-205 9-111	第17回-34	青花(唐透磁器 系)ノ小皿	(8.1)	2.1	(5.0)	—	—	口口	口縁部(赤土)を削り、 高台中央部(赤土)を 削り、蓋付少 量削り	口縁部(赤土)を削り、 底辺赤土(赤土)一 飾り蓋入	良好	橙0.1以下下白色 粘土少量	透明釉/透明釉	透磁器(台子)10 9-111
3-205 16-011	第17回-35	青花(唐透磁器 系)ノ磁器	—	2.7+α	—	—	—	口口	口縁部下4/5を削り内 文様(赤土)を削り、 赤土、体部縁、底辺 削り	口縁部下4/5を削り内 文様(赤土)を削り、 赤土、体部縁、底辺 削り	良好	橙0.1以下下白色 粘土少量	透明釉/透明釉	小野分館発付品群 新館に渡付付遺物あり
3-205 9-81	第17回-36	青花(唐透磁器 系)ノ磁器	—	1.4+α	(7.3)	—	—	口口	体部高台縁(赤土)を 削り、蓋付少 量削り	底辺赤土(赤土)一 飾り蓋入	良好	橙0.1以下下白色 粘土少量	透明釉/透明釉	—
3-205 16-C11	第17回-37	青花(唐透磁器 系)ノ磁器	—	1.8+α	(5.6)	—	—	口口	体部高台縁(赤土)を 削り、蓋付少 量削り	底辺赤土(赤土)一 飾り蓋入	良好	橙0.1以下下白色 粘土少量	透明釉/透明釉	—
3-205 16-A11	第17回-38	中国産青銅器ノ 小皿	(11.5)	3.0+α	—	—	—	口口	口縁部下黄銅文一 飾り	底辺	良好	橙0.1以下下黄色 粘土少量	—	透磁器(台子)10 9-111
3-205 9-111	第17回-39	中国産白銅器ノ 小皿	(11.6)	2.7	3.0	—	—	口口	体部高台縁(赤土)を 削り、蓋付少 量削り	底辺赤土(赤土)一 飾り蓋入	良好	橙0.1以下下白色 粘土少量	—	透磁器(台子)10 9-111
3-205 16-A11	第17回-40	瀬戸・唐透磁器 系ノ文台	(11.0)	3.8	—	—	—	口口	口縁部-体部下半部を 削り	底辺	良好	橙0.1以下下白色 粘土少量	—	透磁器(台子)10 9-111
3-205 16-011	第17回-41	瀬戸・唐透磁器 系ノ文台	(12.0)	3.7+α	—	—	—	口口	底辺	底辺	良好	橙0.1以下下黄色 粘土少量	—	透磁器(台子)10 9-111
3-205 9-81	第17回-42	瀬戸・唐透磁器 系ノ文台	(11.9)	6.5	—	—	—	口口	口縁部-体部下半部を 削り	底辺	良好	橙0.1以下下黄色 粘土少量	—	透磁器(台子)10 9-111
3-205 9-111	第17回-43	磁器ノ鉢	(18.6)	4.7	(12.2)	—	—	粘土削り	口縁部コナナテ、体 部一部削り	口縁部コナナテ	良好	橙0.1以下下黄色 粘土少量	赤黄色/赤黄色	—
3-205 16-011	第17回-44	磁器ノ鉢	(22.9)	6.0	—	—	—	粘土削り	口縁部-体部下半部を 削り	自然釉	良好	橙0.1以下下白色 粘土少量	赤黄色/赤黄色	—
3-205 16-A11	第18回-45	瓦葺土師器ノ 磁器	5.8	7.1	—	—	—	粘土削り	口縁部コナナテ、体 部一部削り	口縁部コナナテ、体 部一部削り	良好	橙0.1以下下黄色 粘土少量	淡黄色/淡黄色	—
3-205 16-C11	第18回-46	土師器ノ磁器	(11.1+α)	8.1	—	3.6~ 3.0	—	手づく 磁器	工員ナシ、底縁部 削り	—	良好	橙0.1以下下白色 粘土少量	淡黄色/淡黄色	(320) P-40
3-205 16-011	第18回-47	磁器ノ(二)通 磁器	(4.6)	6.0	(4.6)	—	—	手づく 磁器	ナシ	ナシ	良好	橙0.1以下下白色 粘土少量	赤黄色/赤黄色	—
3-205 16-011	第18回-48	磁器ノ磁器	(12.8)	(12.2)	(10.2)	—	—	粘土削り	口縁部コナナテ、 体部一部削り	口縁部コナナテ、 体部一部削り(赤土 削り)	良好	橙0.1以下下白色 粘土少量	淡黄色/淡黄色	透磁器(台子)10 9-111
3-205 16-011	第18回-49	磁器品ノ磁器	3.6	1.1	0.5	—	—	練土	—	—	—	—	—	—
3-205 16-011	第18回-50	磁器品ノ磁器	5.4	1.1	0.6	—	—	練土	—	—	—	—	—	—
3-205 9-81	第18回-51	磁器品ノ磁器	8.1	1.1	0.6	—	—	練土	—	—	—	—	—	—
3-205 9-81	第18回-52	磁器品ノ磁器	3.7	1.1	0.2	0.7	—	練土	—	—	—	—	—	—
3-205 9-111	第18回-53	磁器品ノ磁器	0.9	0.8	0.3	—	0.7	練土	「三」字の模刻	—	—	—	—	—
3-205 16-C11	第18回-54	磁器品ノ磁器	3.3	1.7	0.3	—	—	練土	正文×素物文、模 刻	—	—	—	—	—
3-205 16-011	第18回-55	石製器ノ磁器	1.1+α	5.8	0.8	—	—	ケズリ	表面-底縁部	底縁部	良好	橙0.1以下下白色 粘土少量	黄褐色	—
3-205 16-C11	第19回-1	土師器ノ磁器	8.6	2.0	6.0	—	—	口口	口縁部-体部コナナテ、 底縁部削り	口縁部コナナテ、体 部ナシ	良好	橙0.1以下下黄色 粘土少量	淡黄色/淡黄色	—
3-205 9-81	第19回-2	土師器ノ磁器	8.0	2.1	5.0	—	—	口口	口縁部-体部コナナテ、 底縁部削り	口縁部-体部ナシ	良好	橙0.1以下下黄色 粘土少量	淡黄色/淡黄色	—
3-205 16-C11	第19回-3	磁器系土師器ノ 磁器	8.2	2.0	—	—	—	手づく 磁器	口縁部コナナテ、体 部ナシ	ナシ	良好	橙0.1以下下黄色 粘土、橙0.1以下 下白色粘土少量	淡黄色/淡黄色	透磁器(台子)10 9-111
3-205 16-011	第19回-4	磁器系土師器ノ 磁器	8.6	2.1	—	—	—	手づく 磁器	口縁部コナナテ、体 部ナシ	ナシ	良好	橙0.1以下下黄色 粘土、橙0.1以下 下白色粘土少量	淡黄色/淡黄色	透磁器(台子)10 9-111
3-205 16-011	第19回-5	磁器系土師器ノ 磁器	8.0	2.1	—	—	—	手づく 磁器	付遺物のため器型 不明	付遺物のため器型 不明	良好	橙0.1以下下白色 粘土、黄赤土粘土 少量	淡黄色/淡黄色	透磁器(台子)10 9-111
3-205 16-C11	第19回-6	磁器系土師器ノ 磁器	9.3	2.3	—	—	—	手づく 磁器	口縁部コナナテ、体 部ナシ	ナシ	良好	橙0.1以下下黄色 粘土、橙0.1以下 下白色粘土少量	淡黄色/淡黄色	透磁器(台子)10 9-111
3-205 16-C11	第19回-7	磁器系土師器ノ 磁器	8.7	2.0	—	—	—	手づく 磁器	口縁部コナナテ、体 部ナシ	ナシ	良好	橙0.1以下下黄色 粘土少量	淡黄色/淡黄色	透磁器(台子)10 9-111
3-205 16-C11	第19回-8	磁器系土師器ノ 磁器	8.6	2.1	—	—	—	手づく 磁器	口縁部コナナテ、体 部ナシ	ナシ	良好	橙0.1以下下黄色 粘土、橙0.1以下 下白色粘土少量	淡黄色/淡黄色	透磁器(台子)10 9-111
3-205 9-81	第19回-9	磁器系土師器ノ 磁器	8.9	2.3	—	—	—	手づく 磁器	口縁部コナナテ、体 部ナシ	ナシ	良好	橙0.1以下下黄色 粘土、透磁器(台子)10 9-111	淡黄色/淡黄色	透磁器(台子)10 9-111

表9 遺物観察表⑨

遺物 番号	調査 番号	種類/器種	法量(mm) ( )は復元					成形	調査-器類		構成	胎土(石材)	色別-胎土 材質-内面	備考
			口径/ 最大径	高さ/ 最大径	底径/ 最大径	片径	重量		外面	内面				
5-206 14-411	第190回-10	煎茶高土師器ノ 底	9.4	2.3	—	—	平づく ね	口縁部以下コナテ 体部ナテ	口縁部以下コナテ 体部ナテ	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	淡褐色色/淡褐色色	塩田編年層(第 1)層部内外保護層	
5-206 9-211	第190回-11	煎茶高土師器ノ 底	10.1	2.5	—	—	平づく ね	付着物のため調査 不詳	付着物のため調査 不詳	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	淡褐色色/淡褐色色	塩田編年層(第 2)層部(2)土庫北	
5-206 14-011	第190回-12	煎茶高土師器ノ 底	11.4	3.3	—	—	平づく ね	口縁部以下コナテ 体部ナテ	口縁部以下コナテ 体部ナテ	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	淡褐色色/淡褐色色	河野分層(2)層	
5-206 14-011	第190回-12	煎茶高土師器ノ 底	12.8	2.6	—	—	平づく ね	付着物のため調査 不詳	付着物のため調査 不詳	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	淡褐色色/淡褐色色	塩田編年層(第 1)層部	
5-206 9-411	第190回-14	黄花(唐磁鉢類 系)/碗	—	2.7+α	—	—	ロクロ	口縁部以下垂縁部、 体部前後壁一先 輪、貫入	口縁部以下垂縁部、 体部前後壁一先 輪、貫入	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	透明釉/透明釉	高橋明徳台(3)-205 9-411	
5-206 14-411	第190回-15	黄花(唐磁鉢類 系)/碗	—	5.4+α	0.1	—	ロクロ	体部下半垂縁部、 高台(高台縁部一先 輪、貫入)	高台(高台縁部一先 輪、貫入)	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	透明釉/透明釉	小野分層(4)層(第 1)層部	
5-206 14-011	第190回-16	黄花(唐磁鉢類 系)/碗	(11.0)	2.2	0.1	—	ロクロ	高台(高台縁部一先 輪、貫入)	高台(高台縁部一先 輪、貫入)	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	透明釉/透明釉	—	
5-206 14-411	第190回-17	黄花(唐磁鉢類 系)/碗	(13.0)	2.8	—	—	ロクロ	口縁部-高台(高台 縁部一先輪、貫入) 高台(高台縁部一先 輪、貫入)	口縁部-高台(高台 縁部一先輪、貫入) 高台(高台縁部一先 輪、貫入)	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	透明釉/透明釉	小野分層(4)層(第 1)層部	
5-206 14-011	第190回-18	黄花(唐磁鉢類 系)/碗	(10.2)	2.3	0.2	—	ロクロ	口縁部以下垂縁部、 高台(高台縁部一先 輪、貫入)	口縁部以下垂縁部、 高台(高台縁部一先 輪、貫入)	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	透明釉/透明釉	小野分層(4)層(第 1)層部	
5-206 14-011	第190回-19	黄花(唐磁鉢類 系)/碗	(10.0)	2.7	2.8	—	ロクロ	高台(高台縁部一先 輪、貫入)	高台(高台縁部一先 輪、貫入)	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	透明釉/透明釉	小野分層(4)層(第 1)層部	
5-206 14-411	第190回-20	中国産白磁ノ焼 皿	(11.0)	3.0	0.2	—	平づく ね	施釉一先付-露胎	施釉	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	灰白色/灰白色	高橋明徳台(第1)層 部	
5-206 14-411	第190回-21	中国産白磁ノ焼 皿	(13.2)	2.5	0.4	—	ロクロ	施釉、体部下半高 輪、高台(高台縁部一 先輪、貫入)	施釉、高台(高台 縁部一先輪、貫入)	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量、黄赤 色	白灰色/白灰色	—	
5-206 9-411	第190回-22	長地不明陶器ノ 器ノ底	(12.0)	6.0+α	—	—	粘土結 核上げ	施釉	施釉	良好	復0.1cm以下黄 色-黄赤光沢弱 少量	黄褐色色/黄褐色色	—	
5-206 9-411	第190回-23	中国産青白磁ノ 器ノ底	—	4.0	(9.4)	—	粘土結 核上げ	施釉-高台(高台 縁部一先輪、貫入)	施釉	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	青味がかる白灰色/ 黄味がかる白灰色	—	
5-206 14-011	第190回-24	磁ノ唐磁焼 皿/天目焼	10.8	5.6	—	—	ロクロ	施釉-体部下半高輪	施釉	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	褐色青色/褐色青色	藤沢編年(大塚第3)-6 探究 高橋明徳台(3)-206 下層(14-011)-5-206 9-411	
5-206 9-411	第190回-25	瓦葺ノ器ノ底	—	2.6	10.8	—	粘土結 核上げ	体部一先付ナテ	高台(高台縁部一先 輪、貫入)	良好	復0.1cm以下黄 色-黄赤光沢弱 少量	灰褐色色/灰褐色色	宇佐真行村	
5-206 9-111	第190回-26	瀬戸焼ノ鉢	(23.2)	3.8	(14.0)	—	粘土結 核上げ	口縁部以下コナテ 体部一先付ナテ	口縁部-体部以下 コナテ	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	赤褐色色/赤褐色色	横倉跡あり	
5-206 14-011	第190回-27	土製品ノ磁器口 底	12.7+α	7.6	—	2.4+ 2.5	平づく ね	土質ナテ、垂縁部 底層付着	—	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	淡褐色色/淡褐色色	—	
5-206 14-011	第190回-28	土製品ノ磁器口 底	13.0+α	8.0	—	2.7+ 3.0	平づく ね	土質ナテ、垂縁部 底層付着	—	良好	復0.2cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	淡黄褐色色/淡黄褐色色	—	
5-206 14-011	第190回-29	磁器ノ北宋系	2.4	—	0.1	1.0 0.8	2.1	練造	凡常流質、行書	無文	—	—	—	初編年(1078年)
5-206 9-111	第190回-30	唐製磁器ノ不詳	4.1+α	0.4	0.3	—	—	練造	—	—	—	—	—	—
5-206 14-011	第190回-31	唐製磁器ノ不詳	0.6	6.6+α	0.7	—	—	練造	—	—	—	—	—	—
03010 9-411	第200回-1	煎茶高土師器ノ 底	9.0	3.2	—	—	平づく ね	口縁部以下コナテ 体部ナテ	ナテナテ	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	淡褐色色/淡褐色色	塩田編年層(第 1)層部	
03010 9-111	第200回-2	煎茶高土師器ノ 底	9.0	3.4	—	—	平づく ね	煎茶高土師器のため調査 不詳	煎茶高土師器のため調査 不詳	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	淡褐色色/淡褐色色	塩田編年層(第 1)層部	
03010 9-111	第200回-3	煎茶高土師器ノ 底	10.8	3.1	—	—	平づく ね	付着物のため調査 不詳	口縁部以下コナテ 体部ナテ	良好	復0.2cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	淡褐色色/淡褐色色	河野分層(2)層	
03010 9-111	第200回-4	青磁ノ唐ノ唐 磁	—	3.4+α	(10.6)	—	平づく ね	施釉	—	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	緑褐色色	藤澤2-26(2) 9-111	
03010 9-411	第200回-5	中国産陶磁器ノ 底	—	4.3+α	—	—	粘土結 核上げ	施釉	ナテ	良好	復0.2cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	褐色青色/淡黄褐色色	高橋明徳台(3)(322)	
03010 14-011	第200回-6	純文土器ノ透胎	—	5.7+α	—	—	粘土結 核上げ	3.5cm	付着物のため調査 不詳	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	黄褐色色/黄褐色色	純文陶器(1)式(1)行 行	
03010 14-011	第200回-7	唐製磁器ノ金具	1.2	3.4	0.2	—	—	練造	—	—	—	—	—	引き手か
03013 14-411	第220回-1	中国産陶磁器ノ 白磁	(8.0)	7.8+α	—	—	粘土結 核上げ	3.0cmナテ一先付 前高輪	3.0cmナテ一先付 前高輪	良好	復0.2cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	黄褐色色/黄褐色色	—	
03013 14-411	第220回-2	磁器品ノ粉砕品 口-下口	38.0	12.7	—	—	ケズリ	体部一先付ナテ	口縁部(高台縁部一先 輪、貫入)	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	灰褐色色	2次焼成跡	
03010 9-411	第220回-3	唐製(唐系)高土 師器ノ底	—	3.6+α	—	1.24 0.7	平づく ね	口縁部以下垂縁部 一先輪、貫入	口縁部以下垂縁部 一先輪、貫入	良好	復0.1cm以下黄 色-黄赤光沢弱 少量	黄褐色色/黄褐色色	(3)(101)-P-52	
03010 9-411	第220回-4	黄花(唐磁鉢類 系)/碗	(19.2)	2.3+α	—	—	平づく ね	口縁部以下垂縁部、 高台(高台縁部一先 輪、貫入)	口縁部以下垂縁部、 高台(高台縁部一先 輪、貫入)	良好	復0.1cm以下白 色-黄赤光沢弱 少量	透明釉/透明釉	(3)(101)-P-51 小野分層(4)層(第 1)層部	

表 10 遺物観察表<sup>②</sup>

遺物 番号	調査 番号	種類・用途	法量 (mm) (1) 法状況					成形	調整・裝飾		構成	粘土 (石)	色調 (顔料 内外・内裏)	備考
			口径 / 最大径	底径 / 最大径	高さ / 最大径	孔徑	重量		内面					
									内面	内面				
33101	第23回-3	青灰(薄埋線装 高)ノ磁器	—	1.9+g	4.7	—	—	口付可	裏面埋線装高+縁 飾。裏込小縁装 高入。	良好	埋0. 1cm以下白 色。黄色少し。黄 土(口)	灰白色/灰白色	(33101 P-6)	
33101 P-01	第23回-4	青灰(薄埋線装 高)ノ磁器	—	1.7+g	—	—	—	口付可	裏面内(「一」の縁高 +口付高)ノ埋 線。裏込小縁装 高+縁飾(ナズリ)	良好	埋0. 1cm以下白 色。黄色少し。黄 土(口)	透明釉/透明釉	—	
33101	第23回-5	ガラス製品ノ 磁器品	2.2	2.0	0.7	0.2	—	—	—	—	—	灰白色	裏面(口縁装高 裏面(口縁高)ノ縁 飾)	
33101	第23回-6	粘土品/メタリ	1.7	1.2	0.4	0.2	—	線装	—	—	—	—	線装分厚部内面(ナ ズリ)	
33126 P-11	第33回-1	青磁系土器器ノ 器	8.6	2.2	—	—	—	手づく 可	口縁部ヨコナテ・縁 部装高取付のため 調整不明	良好	埋0. 1cm以下白 色。黄色少し。黄 土(口)	緑黄色/緑黄色	造地編年層2期	
33126	第33回-2	青磁系土器器ノ 器	9.0	2.2	—	—	—	手づく 可	口縁部ヨコナテ・縁 部ナズリ	良好	埋0. 1cm以下白 色。透明釉少し	緑黄色/緑黄色	(33126 P-3) 造地編年層2期	
33142	第33回-3	青磁系土器器ノ 器	12.2	2.5	—	—	—	手づく 可	口縁部ヨコナテ・縁 部ナズリ	良好	埋0. 1cm以下白 色。透明釉少し	緑黄色/淡緑黄色	全体(口縁高)ノ高 造地編年層2期	
33126	第33回-4	青灰(薄埋線装 高)ノ磁器	—	1.8+g	—	—	—	口付可	口縁部下4条縁内 「高文」一筋装	良好	埋0. 1cm以下白 色。黄色少し。黄 土(口)	透明釉/透明釉	小野分線装付部 口縁部(口縁高)	
33126	第33回-5	青磁器品ノ薄装 分器	1.5	0.8	0.5	—	1.9	線装	—	—	—	—	—	
33126	第33回-6	青磁器品ノ薄装 分器	1.4	0.8	0.7	—	3.3	線装	—	—	—	—	—	
33140	第33回-1	青磁系土器器ノ 器	8.0	2.0	—	—	—	手づく 可	口縁部ヨコナテ・縁 部ナズリ	良好	埋0. 1cm以下白 色。黄赤光沢少 量	淡緑黄色/淡緑黄色	(33140-下期) 造地編年層2期	
33140	第33回-2	青磁系土器器ノ 器	7.8	2.0	—	—	—	手づく 可	口縁部ヨコナテ・縁 部ナズリ	良好	埋0. 1cm以下白 赤。黄赤光沢。淡 褐色少し	淡緑黄色/淡緑黄色	造地編年層2期 口縁部内径縁部	
33140	第33回-3	青磁系土器器ノ 器	8.9	2.1	—	—	—	手づく 可	口縁部ヨコナテ・縁 部ナズリ	良好	埋0. 1cm以下白 色。黄色少し。黄 土(口)	淡緑黄色/緑黄色	(33140-上期) 造地編年層2期	
33140	第33回-4	青磁系土器器ノ 器	8.8	2.2	—	—	—	手づく 可	口縁部ヨコナテ・縁 部装高取付のため 調整不明	良好	埋0. 1cm以下白 赤。黄赤光沢。淡 褐色少し	緑黄色/緑黄色	(33140-上期) 造地編年層2期	
33140	第33回-5	青磁系土器器ノ 器	9.2	2.3	—	—	—	手づく 可	口縁部ヨコナテ・縁 部ナズリ	良好	埋0. 1cm以下白 色。黄色少し。黄 土(口)	淡緑黄色/淡緑黄色	(33140-下期) 造地編年層2期	
33140	第33回-6	青磁系土器器ノ 器	12.6	2.6	—	—	—	手づく 可	口縁部ヨコナテ・縁 部ナズリ	良好	埋0. 1cm以下白 色。透明釉少し	淡緑黄色/淡緑黄色	(33140-上期) 造地編年層2期 造地編年層2期 高取付台 (33140 P-2 P-4)	
33140	第33回-7	青磁系土器器ノ 器	12.2	2.5	—	—	—	手づく 可	口縁部ヨコナテ・縁 部ナズリ	良好	埋0. 1cm以下白 色。透明釉少し	淡緑黄色/淡緑黄色	(33140 P-10) 造地編年層2期 造地編年層2期 埋込高	
33140	第33回-8	青磁系土器器ノ 器	12.2	2.8	—	—	—	手づく 可	口縁部ヨコナテ・縁 部装高取付のため 調整不明	良好	埋0. 1cm以下白 色。透明釉少し	黄赤色/黄赤色	造地編年層2期 口縁部(口縁高)ノ 口縁部(口縁高)	
33140	第33回-9	中国産白磁ノ 器	(13.6)	3.3+g	—	—	—	口付可	胎筋。裏付高筋	良好	埋0. 1cm以下白 色。黄色少し。黄 土(口)	灰白色/灰白色	造地編年層2期 造地編年層2期 造地編年層2期 造地編年層2期	
33140	第33回-10	青灰(薄埋線装 高)ノ磁器	—	3.2+g	—	—	—	口付可	口縁部下4条縁内 縁部文様(「子」 ノ一筋装)	良好	埋0. 1cm以下白 色。黄色少し。黄 土(口)	透明釉/透明釉	(33140-下期)	
33140 P-11	第33回-11	青灰(薄埋線装 高)ノ磁器	17.8	3.3	9.3	—	—	口付可	口縁部下4条縁内 漢文、体部筋、高 取付高筋(口縁高) 筋。裏付高筋	良好	埋0. 1cm以下白 色。黄色少し。黄 土(口)	透明釉/透明釉	小野分線装付部	
33140	第33回-12	中国産白磁ノ 器	8.0	13.0	8.4	8.4	—	口付可	裏面内面埋線装高 取付高筋(口縁高) 筋。裏付高筋	良好	埋0. 1cm以下白 色。黄色少し。黄 土(口)	緑黄色/黄赤色	(33140-下期) 造地編年層2期 造地編年層2期 (P-7 P-8)	
33140 P-11	第33回-13	朝鮮半島産灰青 磁器器品ノ器	(15.8)	5.0+g	—	—	—	口付可	胎筋	良好	埋0. 1cm以下白 色。黄色少し。黄 土(口)	緑灰色/緑灰色	(33140-上期) 線装	
33140	第33回-14	朝鮮半島産灰青 磁器器品ノ器	—	1.7+g	—	—	—	粘土 器	胎筋	良好	埋0. 1cm以下白 色。黄色少し。黄 土(口)	緑灰色/黄赤色	(33140-上期)	
33140	第33回-15	朝鮮半島産灰青 磁器器品ノ器	(19.2)	2.6+g	—	—	—	粘土 器	胎筋。口縁部筋 筋	良好	埋0. 2cm以下白 色。白色少し。黄 土(口)	暗緑黄色/暗緑 黄色(口縁部) 暗緑黄色(口縁部)	(33140-下期) 口縁部(口縁高)ノ 口縁部(口縁高)	
33140	第33回-16	瓦質土器ノ 器	(9.2)	3.7	(4.6)	—	—	口付可	土方キ	良好	埋0. 1cm以下白 色。黄色少し。黄 土(口)	緑黄色/緑黄色	造地編年層2期(33140- 上期)	
33140	第33回-17	瓦質土器ノ 器	11.5	5.4	—	—	—	口付可	口縁部下4条縁手 横文(土方キ)ノ 口(口)ノ筋がある タイプ。裏面(口 縁高)ノ筋。裏 付高筋(ナズリ)	良好	埋0. 3cm以下白 色。埋込高筋。埋 込高筋(口縁高) 筋。埋込高筋(口 縁高)筋。埋込高 筋(口縁高)筋。埋 込高筋(口縁高)筋	淡緑黄色/淡緑黄色	(33140-上期) 造地編年層2期(33101 S140 9-8)	
33140	第33回-18	瓦質土器ノ 器	42.6	16.9	—	—	—	粘土 器	口縁一筋装土 方キ。埋込高筋 筋。埋込高筋	良好	埋0. 1cm以下白 色。黄赤光沢。黄 赤光沢少し	淡緑黄色/淡緑黄色	(33140-上期) 三期 造地編年層2期 (5001 P-8)	
33140	第33回-19	石製品ノ 器	(24.0)	9.0+g	—	—	—	ケズリ	土方キ	—	—	灰褐色	(33140 P-12) 土層部	
33140	第33回-20	石製品ノ 器	(40.0)	4.8+g	—	—	—	ケズリ	埋込高筋土方キ	—	—	灰褐色	埋込高筋	

表 11 遺物観察表①

遺物 番号	遺物 番号	種類/器種	質量(g)					成形	調査-器種		構成	胎土(胎材)	色調-胎調 外観-内観	備考
			口径/ 最大径	高さ/ 最大径	底径/ 最大径	孔径	重量		外観	内観				
DX10 9-11	第36図-21	石製品/灰白・ 上白	19.5	11.1	13.5	—	—	ケズリ	胎土ミダキ、筒子 孔方角の浅彫り。口 底厚目線跡。幅 0.2mm残存生肌4割 減4-6条	上縁部へ窪みミガ キ	—	安山岩	灰褐色	—
DX10	第36図-22	青銅製品/管筒 蓋	1.7	1.6	0.2+0	0.9	—	鍛造	—	—	—	—	—	湯目跡発見
DX10	第36図-23	銅製品/メダラ 環	1.6	1.3	0.5	0.3	—	鍛造	—	—	—	—	—	縁部分内外径メ ノミ研
DX10	第36図-24	鍍金/銅鏡	2.4	—	0.2	1個 0.6	2.5	鍛造	「赤武流麗」裏面	裏文	—	—	—	前編造年1562年
DX18	第36図-25	京都系土師器/ 皿	12.2	2.8	—	—	—	手づく ね	口縁部ヨコナデ・縁 部ナデ	ナデナデ	良好	径0.4cm以下褐色 胎土。径0.1cm以 下白色胎子少量	淡褐色色/淡褐色色	(SX149 P-1) 徳島編年表3期 口縁部内外面保護層
DX18	第36図-26	京都系土師器/ 皿	12.2	2.8	—	—	—	手づく ね	口縁部ヨコナデ・縁 部ナデ	ナデナデ	良好	径0.3cm以下褐色 胎土。径0.1cm以 下黄色胎子若干少 量	淡褐色色/淡褐色色	(SX149 P-2) 徳島編年表3期
DX18	第36図-27	京都系土師器/ 皿	12.6	2.4	—	—	—	手づく ね	口縁部ヨコナデ・縁 部ナデ	ナデナデ	良好	径0.1cm以下褐色 胎土。径0.1cm以 下黄色胎子若干少 量	淡褐色色/淡褐色色	(SX149 P-3) 徳島編年表3期
DX18	第36図-28	養花(徳州製瓦) ノ環	14.0	6.0	4.8	—	—	ロウロ	口縁部下-体部縁部 胎方角の文様彫。胎 部ナデナデ縁部一筋 跡。胎内面露胎。胎 部凹み	口縁部下-体部縁部 胎方角。胎部ナデ 縁部ナデ。胎部ナ デ縁部ナデ一筋跡。 胎人多	良好	径0.1cm以下白色 胎子少量	淡灰白色/淡灰白色	(SX149 P-3)
表土 9-11	第40図-1	中国産白磁ノ鉢	—	3.0+α	5.7	—	—	ロウロ	胎筋	胎筋-見込み環ノ胎 筋跡。胎内面露胎	良好	径0.1cm以下白色 胎子少量	淡灰白色/淡灰白色	太宰府編年白磁焼成 期
表保	第40図-2	タイ産メナムノ イ属系滑石陶器ノ (四角)蓋	8.0	8.0+α	—	—	—	胎土粘 着上付	口縁-見込みナデ・胎 部ナデナデ出しによ り胎白縁一筋跡	ナデ・胎土粘着台痕	良好	径0.8cm以下褐色 胎土。径0.3cm以 下黄色胎子若干少 量	淡褐色色胎/暗褐色色	高島分銅目録
表保	第40図-3	徳約焼ノ水屋蓋	29.2	6.6+α	—	—	—	胎土粘 着上付	ヨコナデ・自然胎 (黄褐色)	ヨコナデ	良好	径1.4cm以下褐色 胎土。径0.1cm以 下白色胎子黄色 胎子少量	暗褐色色/暗褐色色	漢製城郭前遺跡3-1 器
表土 9-10	第40図-4	石製品/石鏡	20.4	6.0+α	—	—	—	ケズリ	ミダキ	ミダキ	—	滑石	暗褐色色/暗褐色色	内面-徳約系土師器 に利用したと推定さ れる磨製鏡
表保	第40図-5	石製品/灰白・ 下白	26.6	—	10.6	0.21	—	ケズリ	ケズリ	口底磨料-幅0.2mm 残存生肌4条-底面 凹み-胎筋-平磨利 目跡-「目立エ」 芯跡孔。受け筋ミ ダキ	—	安山岩	灰褐色	複製分銅
SX001	第40図-6	滑石陶器(徳州 産)ノ環	(17.5)	2.6+α	—	—	—	ロウロ	胎筋	見込み斜目一筋跡	良好	径0.1cm以下白色 胎子少量	淡黄褐色色/淡黄褐色色	口縁部片
SX001	第40図-7	青銅製品/銅 蓋	2.7+α	0.6	0.4	0.3	—	鍛造	—	—	—	—	—	縁部片痕
SX001	第40図-8	青銅製品/不判	0.6	0.6	0.5	—	—	鍛造	—	—	—	—	—	—
SX001	第40図-9	青銅製品/不判	3.5	2.9	0.4	—	—	鍛造	—	—	—	—	—	—

## 第2節 第60次調査

### 1 調査概要

中世大友府内町跡第60次調査（以下、町〇次とする）は、町53次調査に引き続き、桜ヶ丘元町雨水幹線の公共下水道工事に伴い、平成17年8月19日から11月11日にかけて調査を実施した。

調査地点は、大分市大字上井東にあたり、「戦国時代府内復元想定図」の万寿寺西北側に、「府内古園A類」にみられる「大友館」の東側に面し、「萬壽寺」の西側を通る南北街路に位置する。当該調査区周辺においては、南北に延びる道路状遺構・万寿寺西側の堀などが検出されている町51次調査区（大分県教育庁理蔵文化財センターが調査）および町53次調査区が北側に隣接する。

調査区は、町53次調査と同様に、公共下水道ボックスが南北に設置される工事に伴う調査であるため、町53次調査区の南側に、南北に細長い形状に設定された。調査区の面積は、156.15㎡を測る。

### 2 基本層序

町60次調査区の基本層序は、以下のように大別される。（第1図）

1. 褐色砂質土（標高約5.9～7.5m・層厚約0.5～1.5m）現代造成土
2. 茶褐色砂質土～茶灰色砂質土（標高約5.3m・層厚約0.1～0.2m）遺物包含層
3. 灰褐色砂質土ほか（検出標高約5.1～5.2m）遺構検出面
4. 暗茶灰色細粒砂～黄褐色細粒砂（検出標高約2.8～4.1m）安定地盤層

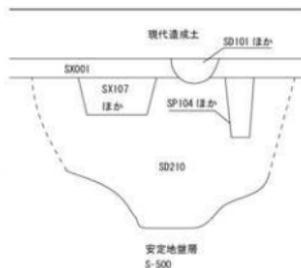
調査地が国道10号線の嵩上げによって、現地表から遺構の検出面まで2.0m程度下がることと、町53次調査と同様の南北に展開する堀の検出が想定されたため、掘削深度が現地表から5.0mを超えることが予想された。1.現代造成土～2.遺物包含層までは、重機による掘削をおこない、それより下位の3.遺構検出面から人力掘削をおこなった。

調査の安全管理上の問題から、はじめに調査区東西壁面に矢板を設置した。そのため、矢板から0.3m程度の範囲が攪乱されることになった。遺物が混入することを極力避けるため、矢板による攪乱を0.1～0.3m程度先行して掘り下げたのちに、遺構掘削をおこなうことを繰り返した。また、掘削が進み、掘削深度が約1.0m増すごとに、矢板の間に支柱張りを設置した。

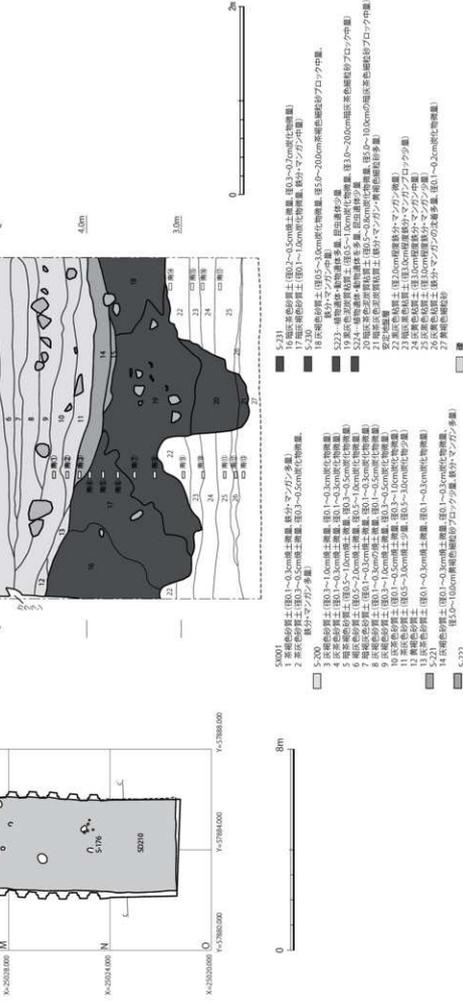
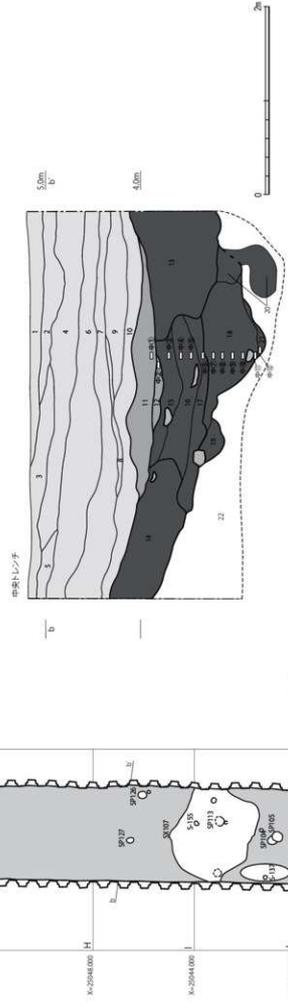
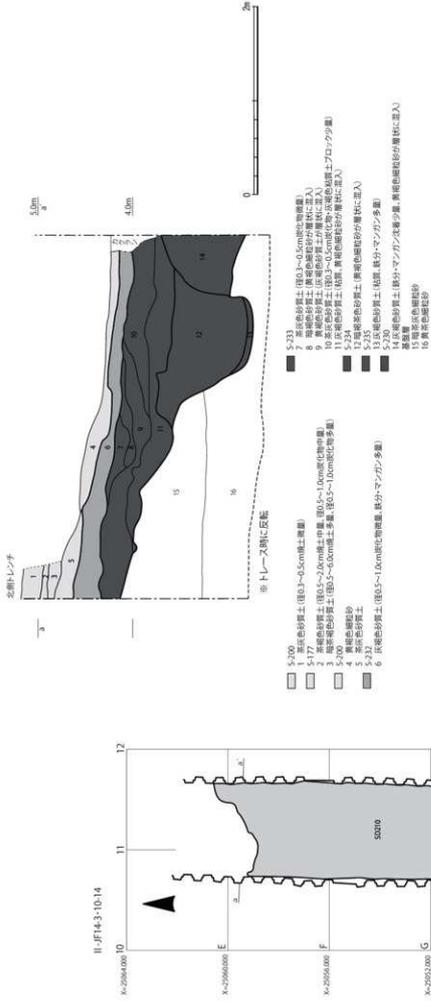
遺物包含層（SX001）の下位からは、町53次と同様の調査区内を南北方向に延びる堀跡（SD210）、それを掘り込む土坑（SX107ほか）・ピット（SP104ほか）などが検出された。しかし、大部分が調査区の制約を受け、遺構の全面を検出することができなかった。町53次の堀の延長部については、両側が検出できず、堀の中心部から底面の一部を掘削したのみである。

堀が掘り込まれる4.安定地盤層は、調査区中央付近では、東西に流れる自然流路（S-500）が、調査区南側では、粘質土層（土壌化層）が検出された。調査区の制約上、掘削はできず、トレンチを設置し、土壌サンプルの採取をおこなった。トレンチ掘削の際に、S-500・粘質土層（土壌化層）から遺物は検出できなかった。

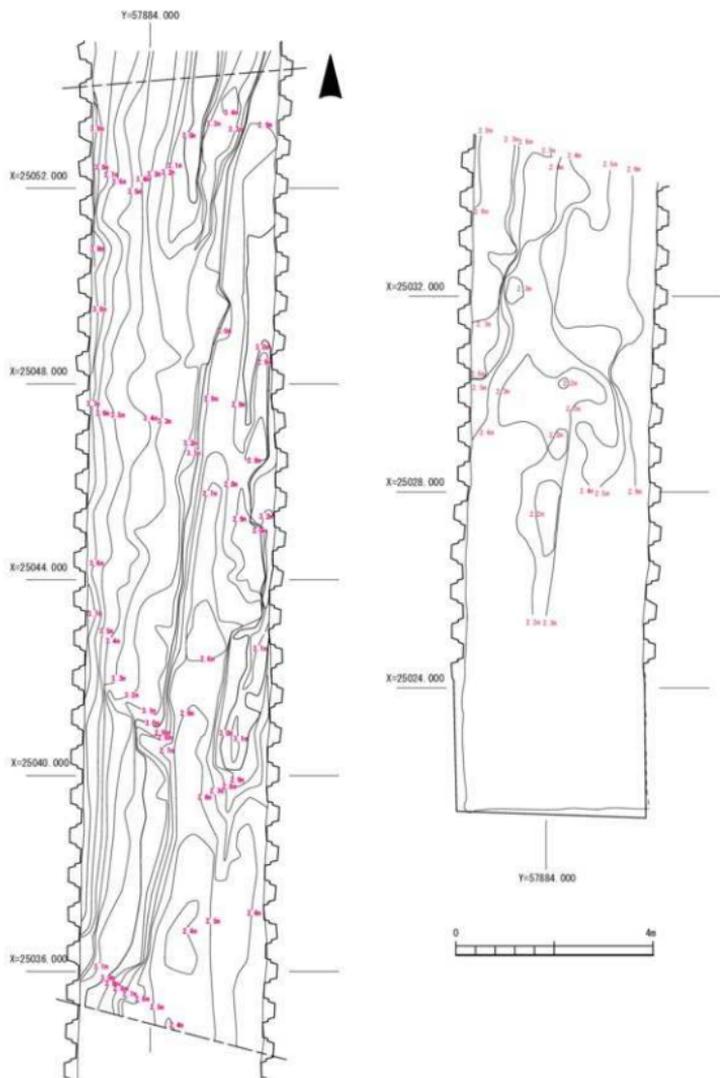
以下、各遺構については、①堀の掘削（使用）・改修（使用）・埋没→②堀埋没後の遺構と大きく2分し、以下、古い段階から、各遺構の報告をおこなう。



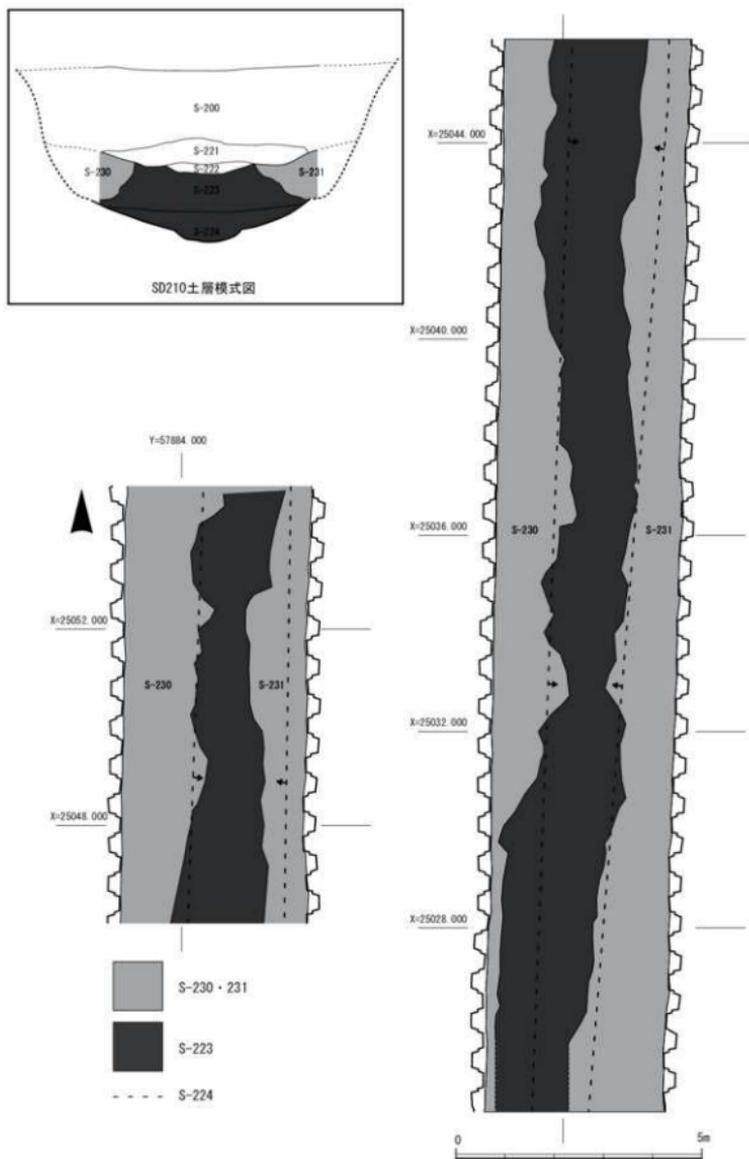
第1図 町60次調査区土層模式図



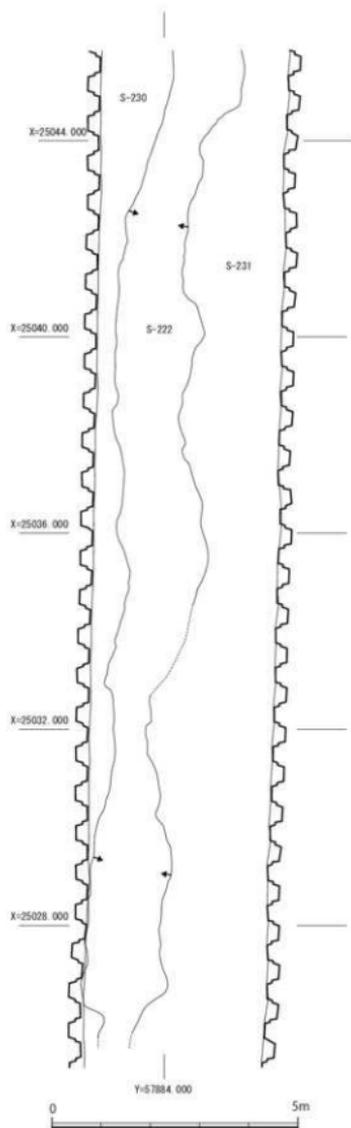
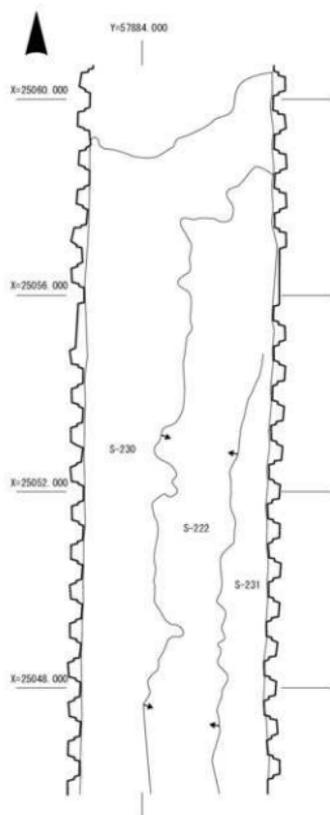
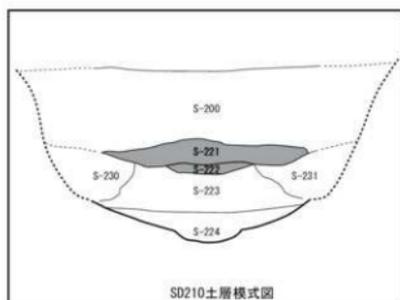
第2図 町60次調査 新旧階断面 (1/150)・土層断面図 (1/40)



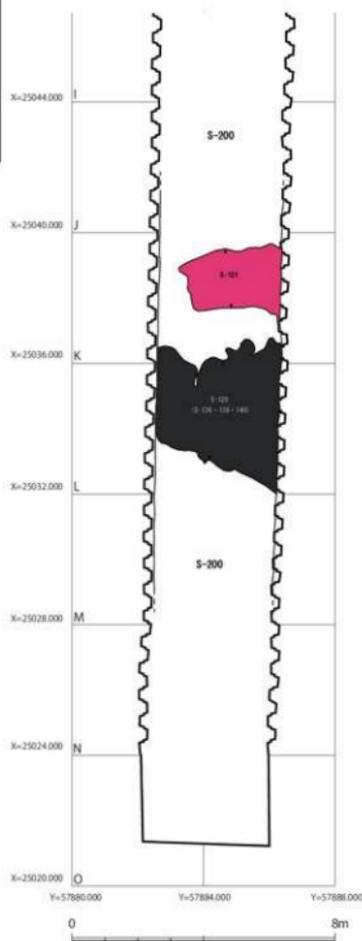
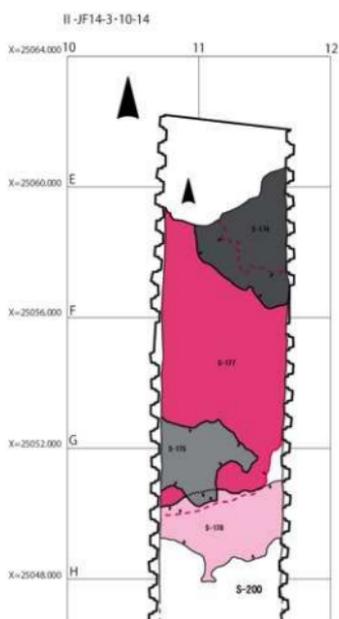
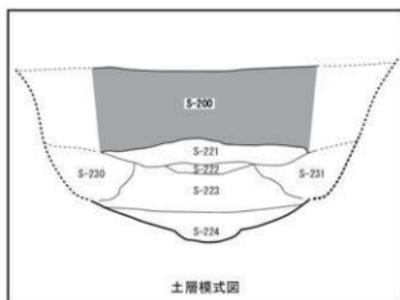
第3図 町60次調査SD210遺構完掘図(1/100)



第4図 町60次調査遺構全体図①-1 (1/100)



第5図 町60次調査遺構全体図①-2 (1/100)



第6図 町60次調査遺構全体図①-3 (1/150)

### ①堀の掘削（使用）・改修（使用）・埋没

本調査区内において検出された堀（SD210）は、遺構全体の検出はできず中心部から堀底を掘削することになったが、周辺調査の成果（町51次ほか）から、万寿寺の西側堀の一部と考えられる。検出幅約3.6～3.9m、検出長約39.0m、現存深さ約2.4～2.9mを測る。堀底は検出幅約0.4～0.9mを測り、逆台形状を呈する。掘り返しについては、不明である。

調査区内全体を占め、かつ調査区外に延びる大規模な遺構であるSD210については、調査区の北側・中央・南側に、それぞれ東西トレンチを設定し、土層観察によって、その埋没過程を把握した。SD210は、その埋土の堆積状況から、1.掘削（使用）→2.改修（使用）→3.埋没の3段階が確認された。

#### 1.SD210が掘削され、使用される段階

堀は、安定地盤層である黒灰色粘質土～黄褐色細粒砂（標高約3.2m）まで掘り込まれる。その後、流水あるいは滞水による堀の使用によって、泥炭質粘土層下層（S-224、標高約2.9～3.3m・層厚約0.6m）が形成される。

#### 2.SD210が改修され、再度使用される段階

堀の底部に自然堆積により形成された泥炭質粘土層下層（S-224）の上位に泥炭質粘土層上層（S-223 標高約3.6～3.8m・層厚約0.5～0.9m）とその両側に砂質土層（S-223の西側はS-230 標高約3.7～4.1m・層厚約0.6～0.9m、東側はS-231 標高約3.9～4.4m・層厚約0.4～1.4m）が形成される。

S-230・S-231は、共通する砂質土であり、S-223とは異なる土質であり、ブロックを含む人為堆積層であると判断したため、分層をおこなった。平面検出では、S-230・S-231は、泥炭質粘土層の両側にそれぞれ南北方向に展開することが確認され、S-230の西側とS-231の東側は調査区外に展開するため、全面検出をおこなうことができなかった。そのため、これらの堆積がS-223・S-224を掘り返すことによって形成された層であるかどうかは不明である。

S-223は、S-224と共通する泥炭質粘土層であり、S-230・S-231との層境には、不均等な凸凹が観察され、それらは両側からの荷重による痕跡である可能性が考えられる。そのため、S-224の上位にS-223が自然堆積によって形成されたのちに、S-230・S-231が両側から埋められたと推定される。しかし、S-223の形成については、下位に堆積するS-224が水性堆積であることから、その影響の度合いがS-230・231と異なるだけで、同様の人為堆積である可能性も否定できず、調査の制約上、両者の可能性を指摘するに留める。S-230・S-231・S-223については、堀が改修されたことによって形成された層であることのみが確認された。これらの層の上位には、再度の堀の使用、流水あるいは滞水の痕跡が観察されるS-221（上層・標高約3.9～4.1m・層厚約0.1～0.2m）・S-222（下層・標高約3.8m・層厚約0.1m）が形成される。

#### 3.SD210が完全に埋められる段階

再度の堀の使用による自然堆積層（S-221・S-222）が形成されたのちに、SD210は完全に埋められる。SD210の最終埋没土（S-200・検出標高約4.2～5.2m・層厚約0.1～1.2m）には、礫・瓦・埴土などが集中する層（S-120ほか・検出標高約5.0m・層厚約0.2m）も観察された。

S-120（第6図14-L10～・第9図）は、S-200の掘り下げ時に、約4.5×4.0mの範囲で検出された。東側・西側は、それぞれ調査区外に展開する。不整形な形状を呈し、明確な掘り方も、土層観察においてみられず、SD210の最終埋没土であるS-200を形成する層のひとつと考えられる。炭化物・埴土・黄茶色土ブロックを含む砂質土が主体となる層であり、2箇所に、径0.3～0.1m程度の礫が集中する。被熱を受けたため、表面が赤化剥離した礫が、観察された。なお、調査段階では、S-136・S-139・S-140と細分され、遺物の取り上げがお

こなわれたが、整理段階において、細分の根拠が不明瞭であったため、S-120に、各遺物を帰属し、報告する。

S-121(第6図14-K10～)は、S-200の掘り下げ時に、約3.0×2.0mの範囲で検出された。東側は、調査区外に展開する。不整形な形状を呈し、明確な掘り方も、土層観察においてみられず、SD210の最終埋没土であるS-200を形成する層のひとつと考えられる。炭化物・焼土・礫を含む砂質土が主体となる層である。

S-174・175・177・178(第6図14-I10～・第7・8図)は、S-200の掘り下げ時に、調査区北側において約13.0×4.0mの範囲で検出された。それぞれ調査区外に展開する。平面検出および土層観察により、S-177→S-178→S-175・174(旧→新)と新旧関係をもつことが確認されたが、不整形な形状で、明確な掘り方も観察されないことから、これらの新旧関係は、S-200が形成された段階を示すと考えられる。

S-174は、約2.5×4.2mの範囲で検出された。炭化物・焼土を含む砂質土が主体で、径0.2～0.3mの礫・備前焼壺片・瓦片が集中する。礫の一部は、被熱により、赤化したもの、破碎したものがみられた。西から東側に向かって、埋められた状況が観察された。

S-175は、約3.0×1.2mの範囲で検出された。炭化物・焼土を含む砂質土が主体で、径0.2～0.3mの礫が集中する。礫の一部は、被熱により、赤化したもの、破碎したものがみられた。

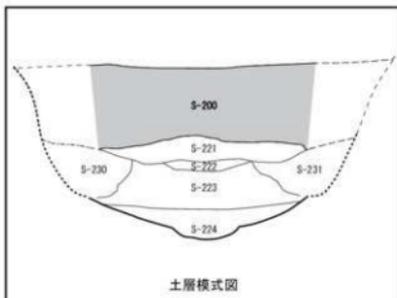
S-177は、約4.0×9.6mの範囲で検出された。砂質土と焼土・炭化物の混合層である。西から東に向かって、埋められた状況が観察された。

S-178は、約4.0×2.7mの範囲で検出された。炭化物・焼土を含む砂質土が主体で、径0.2～0.3mの礫が集中する。

### 堀(SD210)出土遺物

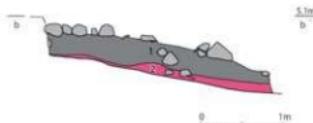
SD210からの出土遺物については、上述のトレンチにおける土層観察による埋没過程の状況把握後、平面検出により確認をおこないながら各段階に形成された層にS番号を付し、グリッドごとに遺物の取り上げをおこなった。なお、SD210掘削時にS番号を付した層と対応して取り上げをおこなうことができなかった遺物を全てSD210出土遺物として取り扱う。

とくに、調査区北側トレンチ土層図に示したS-232・233・234・235は、S-221・222・231・



S-174  
1 茶褐色砂質土瓦片・径20.0～30.0cm礫・備前焼壺片多量

S-177  
2 暗茶褐色砂質土



S-175  
1 暗灰色砂質土(径0.3～1.0cm炭化物少量、径0.5～2.0cm焼土中量、上層に径10.0～30.0cm礫多量)

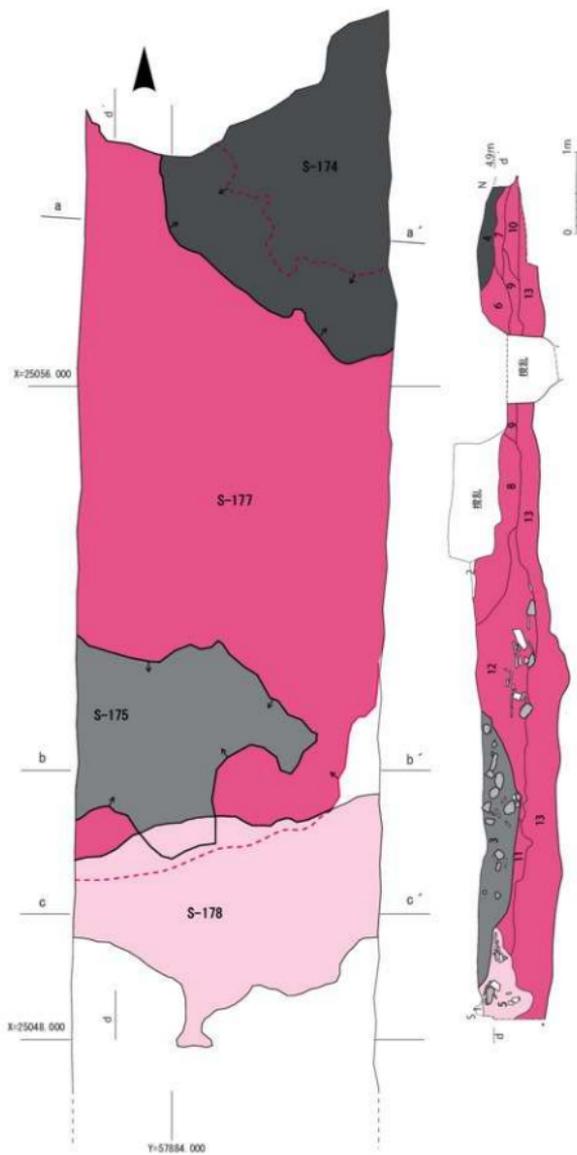
S-177  
2 暗茶褐色砂質土(径1.0～3.0cm炭化物・焼土多量、径2.0～5.0cm灰色砂粒ブロック中量)



S-178  
1 茶灰色砂質土(径0.5～1.0cm焼土少量、径0.1～0.6cm炭化物微量、径10.0～30.0cmの礫・瓦片多量)  
2 灰褐色砂質土(径0.5～1.0cm焼土・径0.2～1.0cm炭化物微量、径10.0～30.0cmの礫・瓦片多量)  
3 灰褐色砂質土(径0.5～2.0cmの炭化物微量、径10.0～30.0cmの礫・瓦片多量)

S-177  
4 暗灰褐色砂質土(径0.5～4.0cm焼土多量、径1.0～2.0cm炭化物中量)

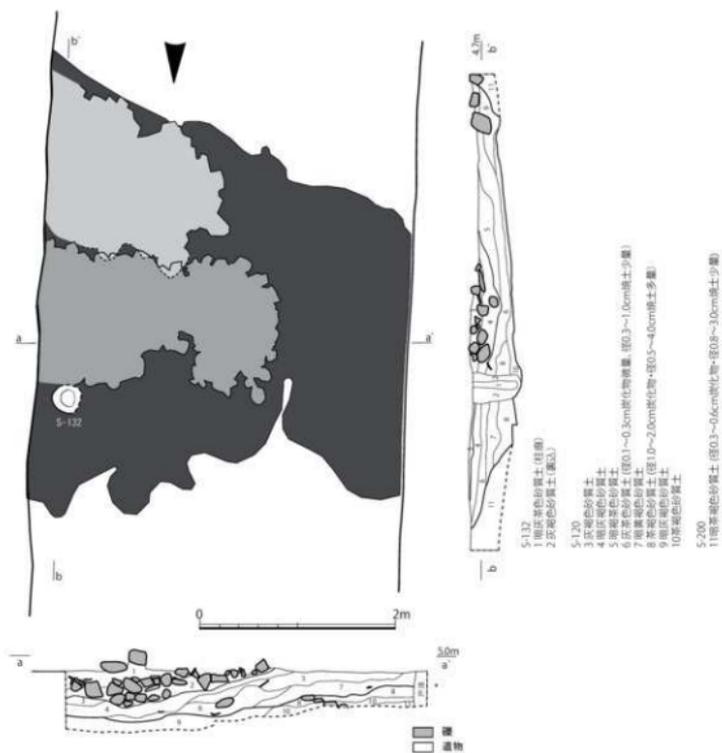
第7図 町60次調査S-174・175・177・178  
土層断面図(1/60)



第 8 图 町 60 次調査 S-174・175・177・178 土層断面図 (1/60)

- S-200  
 1 暗褐色砂質土 (埋 0.3~1.0cm 堆土、埋 0.5~1.0cm 炭化物微量)  
 2 茶褐色砂質土 (埋 0.5~2.0cm 堆土、埋 0.5~0.5cm 炭化物微量、埋 10.0~20.0cm 堆土、炭質質砂片中量)
- S-175  
 3 茶褐色砂質土 (埋 0.5~2.0cm 堆土、埋 0.5~2.0cm 炭化物微量)
- S-174  
 4 茶褐色砂質土 (埋 0.5~1.0cm 堆土、埋 0.5~1.0cm 炭化物微量)  
 5 茶褐色砂質土 (埋 0.5~1.0cm 堆土、埋 0.3~1.0cm 炭化物、埋 4.0~18.0cm 堆土、瓦・土器少量)

- S-177  
 6 暗褐色砂質土 (埋 0.5~2.0cm 堆土多量、埋 0.5~3.0cm 炭化物中量)  
 7 茶褐色砂質土 (埋 0.5~2.0cm 堆土多量、埋 0.5~2.0cm 炭化物中量)  
 8 茶褐色砂質土 (埋 1.0~6.0cm 堆土多量、埋 0.5~1.0cm 炭化物中量)  
 9 暗褐色砂質土 (埋 1.0~6.0cm 堆土中量、埋 0.5~1.0cm 炭化物少量)  
 10 暗褐色砂質土 (埋 1.0~8.0cm 堆土多量、埋 1.0~3.0cm 炭化物少量)  
 11 茶褐色砂質土 (埋 0.3~8.0cm 堆土少量、埋 0.5~3.0cm 炭化物少量)  
 12 茶褐色砂質土 (埋 0.5~10.0cm 堆土、埋 0.5~1.0cm 炭化物中量、層下部埋 10.0~25.0cm 堆土及び土器多量)  
 13 雑草根腐敗物



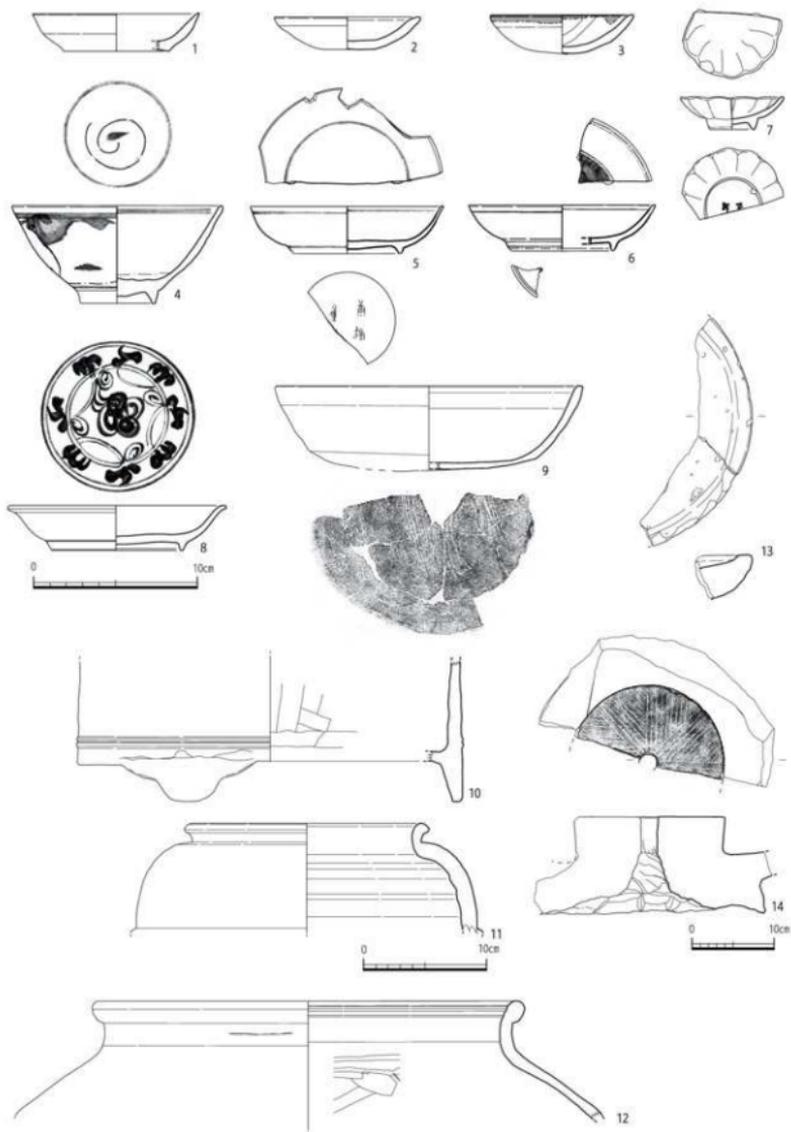
- S-120
- 1 灰褐色砂質土
  - 2 暗灰褐色砂質土 (径0.5~1.0cm黄褐色土 ブロック多量)
  - 3 茶褐色砂質土 (径0.1~0.2cm炭化物微量, 径0.5~1.0cm焼土少量)
  - 4 暗茶褐色砂質土 (径0.1~0.2cm炭化物微量, 径1.0cm焼土少量, 径1.0~2.0cm黄褐色土ブロック中量)
  - 5 灰褐色砂質土 (径0.1~0.3cm炭化物微量, 径0.3~1.0cm焼土少量)
  - 6 暗茶褐色砂質土 (径0.2~0.5cm炭化物+径0.3~1.2cm焼土多量)
  - 7 茶褐色砂質土 (径0.5~0.6cm炭化物+径0.3~3.0cm焼土少量)
- S-200
- 8 暗茶褐色砂質土 (径0.5~1.4cm炭化物微量, 径0.4~2.0cm焼土少量)
  - 9 暗茶褐色砂質土 (径0.3~0.5cm炭化物少量, 径1.0~2.0cm黄褐色土ブロック微量)
  - 10 暗茶褐色砂質土 (径0.2~0.3cm炭化物少量, 径0.5~2.0cm焼土多量)
  - 11 暗茶褐色砂質土 (径0.1cm炭化物+径0.1~0.5cm焼土微量)

第9図 町60次調査S-120 平面・土層断面図 (1/50)

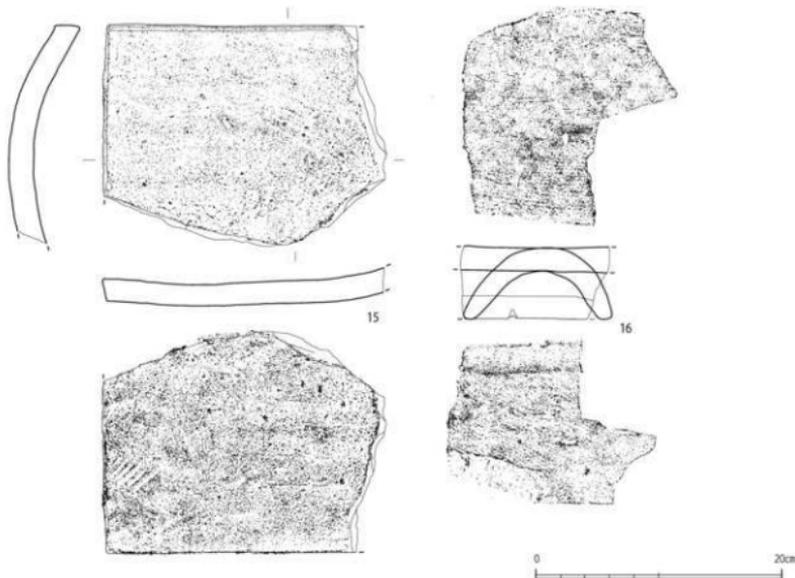
223・224のいずれかに対応すると考えられるが、整理段階において、不明瞭であったため、各出土遺物は、一括してSD210に帰属させた。遺物観察表の備考欄に、◇ 付けで、調査段階のS-番号を示すこととする。

#### S-120 出土遺物 (第10・11図)

S-136・139・140の遺物が帰属する。1は、土師器小皿。底部は、回転糸切り難し。16世紀初頭か。2・3は、京都系土師器皿。埴地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。3は、口縁部内外面に煤痕が観察され



第10図 町60次調査 S-120 出土遺物① (1~8 1/3、10・11 1/4、9・12~14 1/6)

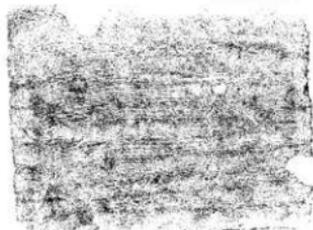
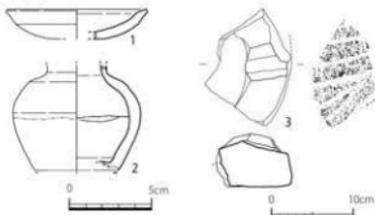


第11図 町60次調査S-120出土遺物② (1/4)

るため、灯明皿としての使用が推定される。4は、漳州窯系青花碗。高台を削り出し、体部が内湾しながら立ち上がる。見込みに、ヘラケズリ調整の痕跡が残る。外面に、「草花文」が見込み中央に、「」が染付けで描かれる。見込み・高台は、露胎を呈する。呉須の発色は悪く、胎土は陶質である。2次被熱による軸変がみられる。5・6・8は、景德鎮窯系青花皿。置付は、軸を剥ぎ、5は、砂粒が付着する。高台内に「萬福枚(同)」の4字銘が2行にわたり、染付けで記される。5・6は、小野分類染付皿E群に相当し、16世紀後半以降に比定される。8は、小野分類染付皿B群に相当し、15世紀後半以降に比定される。5・8は、2次被熱による軸変が観察される。7は、景德鎮窯系白磁木瓜皿。型押しにより、復元楕円形状を呈し、口縁部から体部にかけて花卉状を呈する。置付の軸を剥ぐ。高台内に、染付けの「天」・「年」の2字が残るため、「天(文)年(造)」の2行にわたる4字銘が記されたと推定される。町12次SB01・SB02焼土層や大阪・堺環濠都市遺跡SKT84出土資料に類似する。日本年号の銘をもつ「天文年造」の白磁木瓜皿は、日本からの特注品とされる。9・10は、瓦質土器。還元焰焼成を指向するが、燻しをおこなわず、橙色系を呈する。9は、鉢。底部に、工具ナデ調整が観察され、浅い丸底状を呈する。10は、瓦質土器火鉢。三脚がつく。体部下半に2条の突帯が削り出される。11・12は、備前焼。11は、水屋裏の口縁部から体部片。胴部に、粘土紐を突帯状に貼り付けて、区画線を巡らす。頸部は短く直立し、口縁部は玉緑状を呈する。外面に自然釉の痕跡がみられるが、2次被熱により軸変する。内面は、焼き弾けが多数みられる。16世紀末に比定される備前焼東3号窯跡出土資料に類似する。12は、大甕の口縁部から体部片。頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部が玉緑状を呈する。乗岡編年中世3期に相当し、14世紀後半以降に比定される。13は、茶臼の下白の受け皿片。石材は、安山岩。14は、茶臼の下白。石材は、砂岩。白面の擦

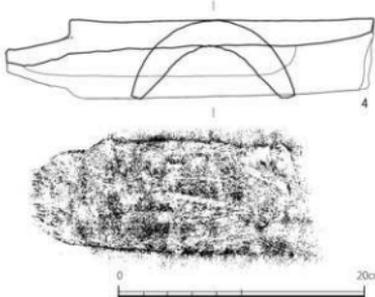
目は、磨耗する。径2.0cm程度の芯棒孔が、幅0.2cm程度の主溝4条・副溝10～11条が残存する。目は、断面が「V」字形状を呈し、規則的に刻まれ、周縁に到る。8分画と推定される。受け皿は、ミガキ調整により平滑に仕上げる。受け皿外面と底部は、ケズリ調整による整形痕がみられる。

15は、平瓦片。あるいは、縦方向の反りが強いため、瓦当を欠損した軒平瓦か。凹面・凸面に、コビキA痕跡が観察される。胎土に、大型石英粒とみられる白色粒子が含まれるため、海部郡産と推定される。16は、丸瓦片。凸面に、縄目痕が、凹面に、コビキA痕跡・布目痕・横方向に連続する吊り紐痕が観察される。胎土に、石英とみられる白色粒子が含まれるため、海部郡産と推定される。



#### S-121 出土遺物 (第12図)

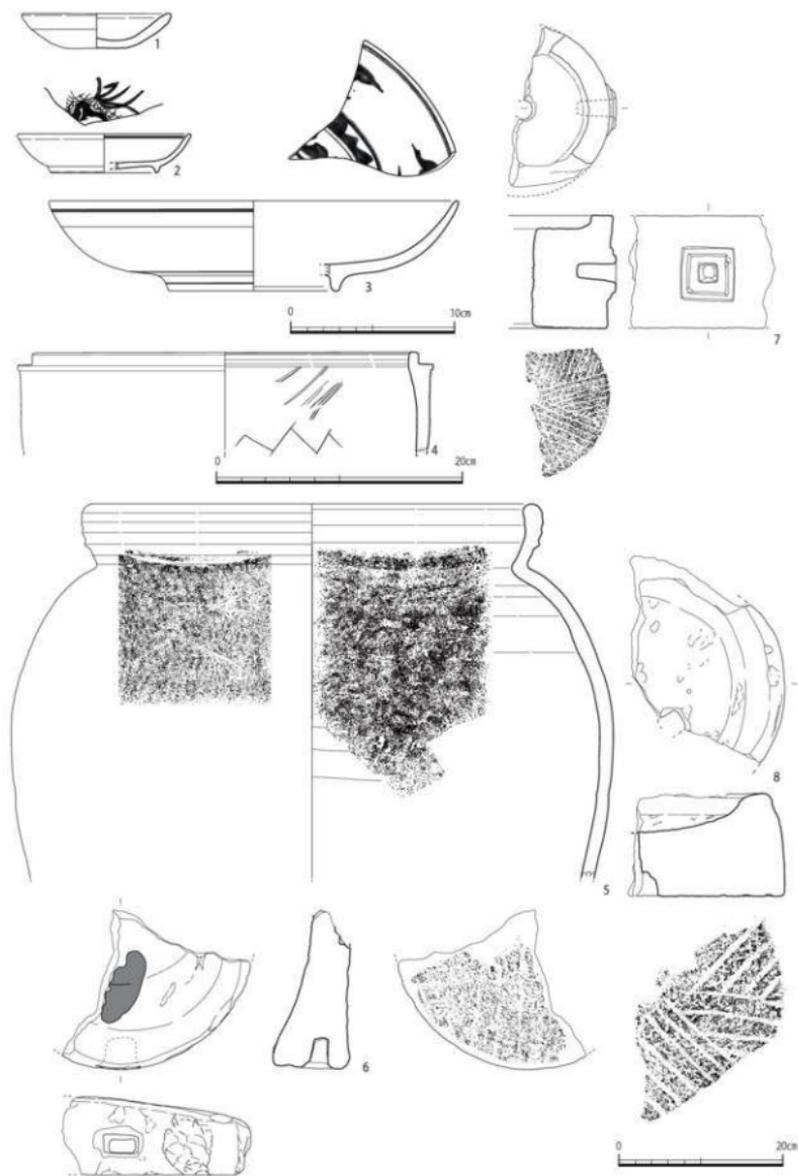
1は、京都系土師器皿。埴地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。内面は、2次被熱により黒化する。2は、備前焼小壺。内外面に、器面が著しく焼きはじけた痕跡が、内面に、粘土紐接合痕が観察される。3は、粉挽き白の上白片。石材は、安山岩。白面は、幅0.5～0.7cmの主溝1条・副溝3条が残存する。4は、玉縁を有する丸瓦。玉縁凸面側縁をほぼ垂直に切断する。凸面に、縄目痕が、凹面に、コビキA痕跡・布目痕が観察される。



第12図 町60次調査 S-121 出土遺物  
(1・2 1/3、3 1/6、4 1/4)

#### S-174 出土遺物 (第13図)

1は、京都系土師器皿。埴地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。2は、景徳鎮窯系青花皿。小野分類染付皿E群に相当し、16世紀後半以降に比定される。見込みに文様が染付けで描かれ、外面は施文されない。3は、漳州窯系青花大皿。内面の口縁部から体部にかけては、界線内に文線帯が、外面は、口縁部下と体部下に界線のみが染付けで描かれる。畳付から高台内にかけて砂粒が付着する。4は、瓦質土器火鉢の口縁部から体部片。還元焙焼を指向するが、燻しをおこなわず、茶色系を呈する。外面の口縁部下が張り出し、平坦面を形成する。外面はミガキ調整が、内面は斜め方向の工具ナデが観察される。5は、備前焼大甕。頸部は内湾し、口縁部は上下に長い玉縁状を呈する。玉縁外面には、強いヨコナデ調整により2条以上の稜が形成される。肩部外面に、「二石入」・「吉」と、髹描きされる。体部内面には、粘土紐接合痕が観察される。乗岡編年近世1期aに相当し、16世紀末に比定される。6～8は、石白。6は、粉挽き白の上白。石材は、安山岩。側面に挽手孔が、白面に芯棒受けが残存する。白面の擦目は、磨耗が著しく、主溝・副溝が不明瞭である。くぼみも摩滅しており、使用痕と推定され、黒茶色の付着物が観察



第13図 町60次調査 S-174 出土遺物 (1~3 1/3、4 1/4、5~8 1/6)

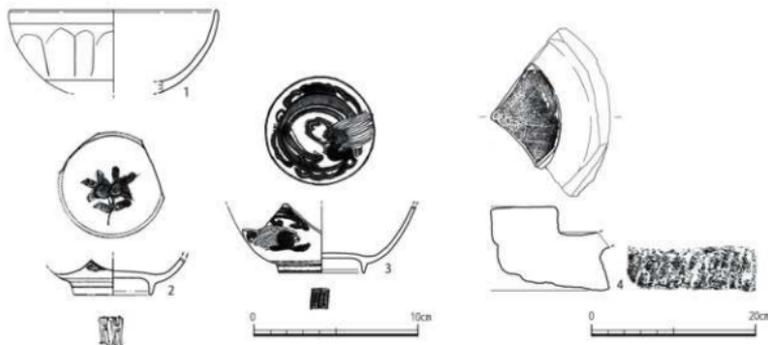
される。7は、茶白の上白。石材は、安山岩。中央に芯棒孔が、側面に方形二段飾りの挽手孔が残存する。上縁部からくぼみ、側面までミガキ調整により平滑に仕上げる。白面の擦目、目と目の間隔が一定であり、周縁まで、断面が「V」字状形を呈する目が刻まれる。主溝4条が、副溝7～9条が残存しており、8分画と推定される。8は、粉挽き白の上白。石材は、安山岩。供給口と芯棒受けが残存する。白面の擦目、目と目の間隔や溝幅が不規則であり、主溝2条が、副溝1単位3～5条が残存する。

#### S-175 出土遺物 (第14図)

1は、中国産青磁碗。体部に粗雑な「蓮弁文」が柳描きされる。軸調・胎土などから龍泉窯系以外の産地と推定される。16世紀代か。2・3は、景德鎮窯系青花碗の高台片。「饅頭心」碗の小野分類染付碗E群に相当し、16世紀中頃以降に比定される。2は、染付けで、見込み重圏内に、「瑞果文」が描かれ、高台内に、字款状に「精製」の2字路が記される。3は、染付けで、体部外面と見込みに「蛟龍文」が描かれ、高台内に字款状に「富貴佳貴」の略と推定される「富永分額仮称方形格子目文」が記される。4は、凝灰岩製茶白の下白。側面に、斜め方向のケズリによる整形痕が観察される。白面の擦り目は、主溝1条が、副溝4～7条が残存する。

#### S-177 出土遺物 (第15～19図)

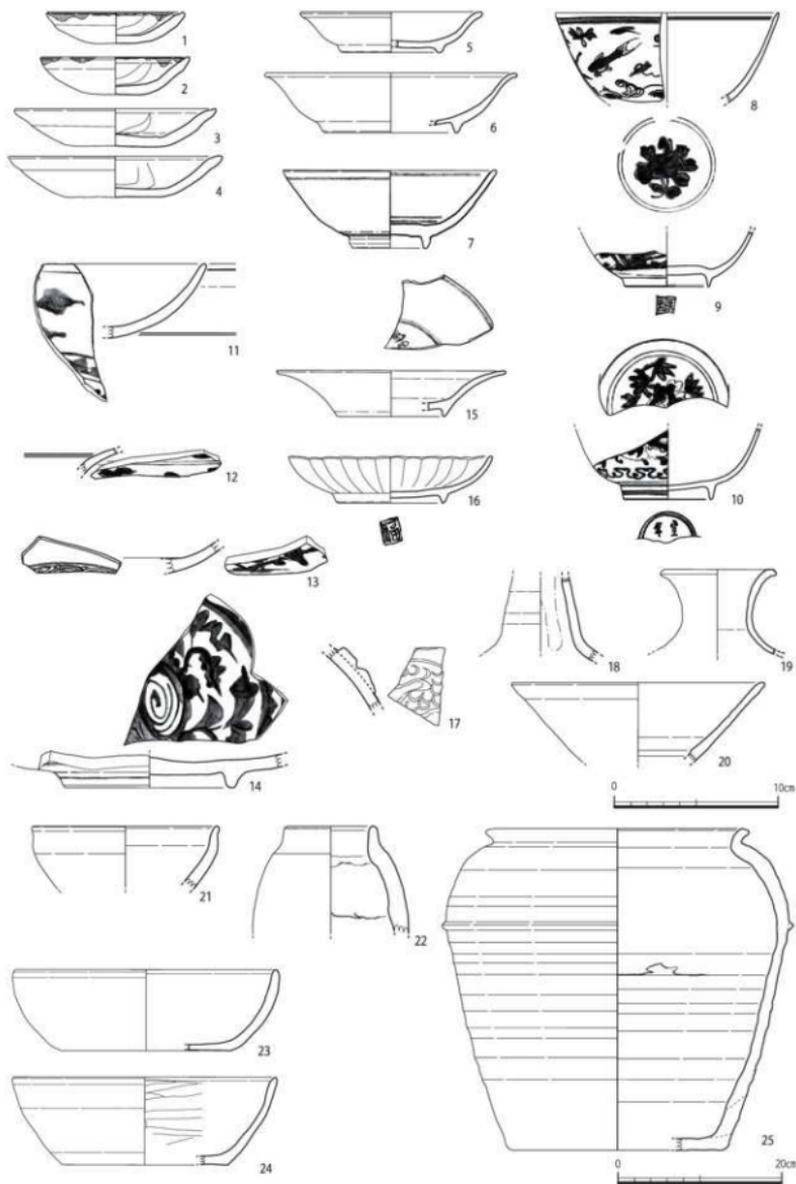
1～4は、内面の最終調整にナデアゲが施される京都系土師器皿。塩地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。1・2は、口縁部内外面に煤痕が観察されるため、灯明皿としての使用が推定される。5・6は、中国産白磁皿で、ともに口縁部が外反する、いわゆる「端反り」。高台の軸を割ぐ。湯築城白磁皿B-1類に相当し、15世紀後葉から16世紀前葉に比定される。5は、2次被熱による軸変が観察される。7は、漳州窯系青花碗。削り出し高台で、高台胎を水平に削る。体部下半が、ややふくらみをもち、口縁部にかけて大きく開く。体部下半から高台内は、露胎である。胎土は、陶質に近く、やや光沢のある透明釉が施され、貫入が発達する。8～10は、景德鎮窯系青花碗。8は、口縁部から体部片。体部外面に、「魚」などが、染付けで描かれる。9・10は、体部から高台片。9は、小野分類染付碗E群に相当し、16世紀中頃以降に比定される。染付けで、見込みに、「草花文」が描かれ、高台内に字款状に「富貴佳貴」の略と推定される「富永分額仮称方形格子目文」が記される。10は、腰が張り、見込みが、高台内に、ややくぼむ。高台内の二重圏線内に「宣」・「年」が判読されるため、「宣(徳)年(製)」の2行4字路が染付けで記されていたと推定される。2次被熱による軸変が観察される。11・14は、漳州窯系青花大皿。11は、口縁部から体部片。14は、高台片。畳付から高台にかけて砂粒が付着する。見込みに、輪郭線が不明瞭な「草花文」が、染付けで描かれる。11・14は、これら以外にも、軸調・胎土・呉須の発色が同一の大皿片が、幾つかみられるため、接合はしないが、同一個体の可能性が考えられる。12・13は、景德鎮窯系青花皿。12は、体部の屈曲部片。13は、体部片。内面に、「渦文帯」が、外面に、「鳥」・「果樹」が染付けで描かれる。15は、景德鎮窯系青花皿。高台から口縁にかけて大きく外反する。畳付の軸を割ぐ。見込みに、文様が染付けで描かれる青花皿であるが、森田分類白磁碁碁底環E-2の器形に、類似する。2次被熱による軸変が観察される。16は、景德鎮窯系白磁花皿。型押しにより、体部内外面が花卉状を呈する。高台内に字款状に「福」の吉祥字が染付けで記される。2次被熱による軸変が観察される。17は、中国南方産褐釉陶器壺の体部片。体部外面に「龍文」が貼り付けられる。残存する龍の体部は、半管状の工具を押し付けることにより「鱗」が表現される。内外面に、やや光沢のある暗緑褐色を呈する釉が施される。16世紀代に比定される愛媛県田等妙寺跡出土の褐釉龍文六耳壺や1600年にフィリピン沖で沈没したサンディエゴ号積載品に類似がみられる。18は、産地不明陶器瓶あるいは壺の頸部片。外面に、2次被熱による軸変が、黒褐釉の釉だれが観察される。19・20は、朝鮮王朝産灰青釉陶器。19は、瓶の口縁部から頸部片。器壁が薄い。いわゆる、「船徳利」。16世紀代に比定される。20は、碗の口縁部から体部片。いわゆる「雑軸」。体部下半から口縁部にかけて、大きく開く。2次被熱による軸変が観察される。21は、瀬戸・美濃産陶器天目碗の口縁部から体部片。口縁部が後をつくり立ち上がり、やや外反する。概ね藤沢編年大窯第3～4段階に相当し、16世紀後半代に比定される。22～24・26・28・



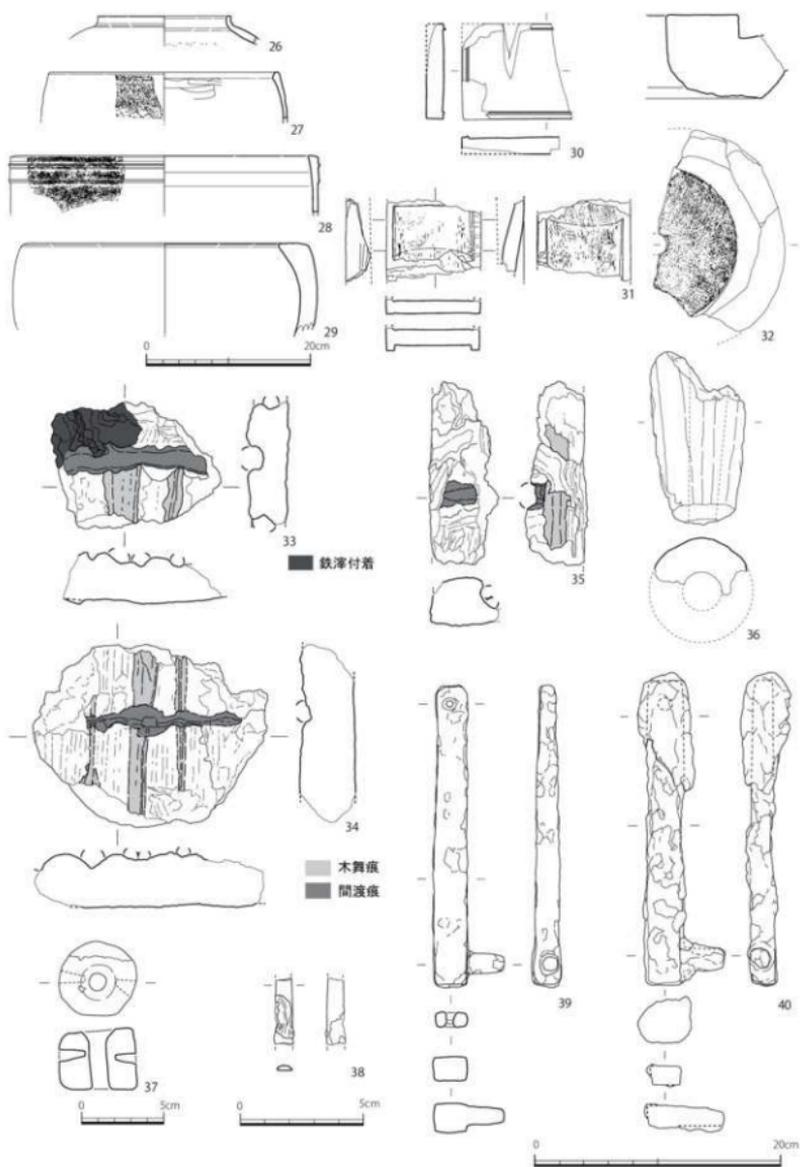
第14図 町60次調査 S-175 出土遺物 (1～3 1/3、4 1/6)

29は、瓦質土器。還元焰焼成を指向するが、煙しをおこなわず、橙色系を呈する。22は、焼塩壺の口縁部から体部片。頸部から口縁部にかけて、ヨコナデ調整により窄まり、直立する。口縁端部は、丸みを帯びる。体部内外面は、ナデ調整が、内面に粘土紐接合痕が観察される。23・24は、鉢。23は、体部が内湾して口縁部にかけて直立気味に立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。底部は平底を呈する。見込みは、ミガキ調整により平滑に仕上げ、口縁部から体部内外面は、器面磨耗のため調整不明瞭である。24は、底部から大きく開き、体部上半に屈曲部をもちながら、口縁部にかけて直立気味に立ち上がり、口縁端部は、ややすぼまる。底部は平底を呈する。体部内面に工具ナデが、体部外面にナデ調整が観察される。25は、備前焼水屋裏。口縁部が、短い頸部から「く」字状に外反し、口縁端部は肥厚し、つまみだす。体部上半の最大径を測る位置に、粘土紐を突帯状に貼り付ける。体部内面および体部下断面に内傾する粘土紐接合痕が観察される。16世紀末に比定される備前焼東3号窯跡出土資料に類似する。

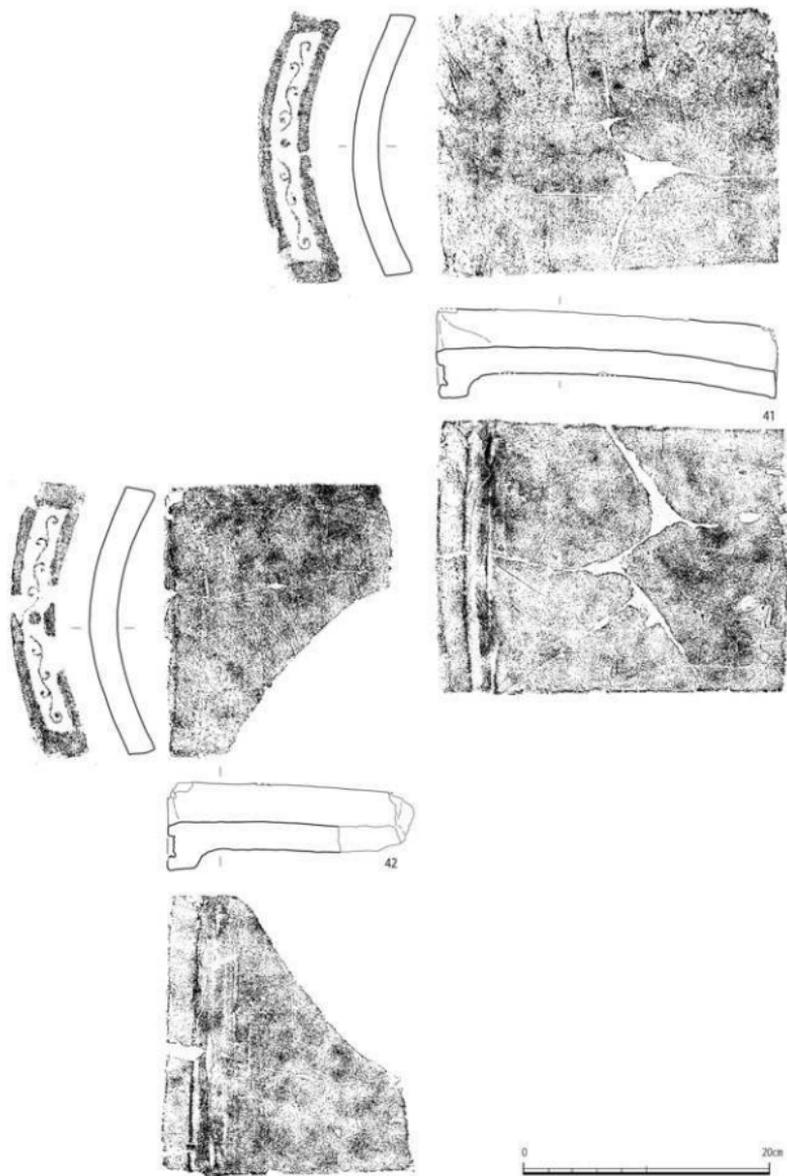
26は、茶釜と推定される口縁部片。27は、土師質土器焙烙の口縁部から体部片。体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が肥厚する。体部内面に工具ナデ調整が、体部外面に叩き痕が観察される。『難波宮址の研究 第九』掲載の豊臣氏大坂城期前半出土遺物に類例がみられる。28は、火鉢の口縁部から体部片。口縁端部は肥厚し、上面を平坦に仕上げる。外面口縁部下に、2条の突帯を巡らせる。突帯内に連続する「×」字状のスタンプが施文される。29は、瓦質土器火鉢の口縁部から体部片。体部が内湾し、口縁部は肥厚する。口縁端部は平坦面をつくる。内外面ともにミガキ調整により器面を平滑に仕上げる。30・31は、石硯。共に、硯材は、輝緑凝灰岩、山口県産の「赤間石」。30の石質は、31ほかの「赤間石」に比べて、やや粗悪である。30は、長方形硯の陸部片。緑側は、ほぼ垂直に切断され、緑が、2段に造られる。31は、海部片。中央横断面が「H」字形状を、硯頭近くの海部横断面が「凹」字状を呈し、硯陰に脚が削り出される長方形硯。緑幅に比して、脚が幅広く造られる。硯面・硯陰に擦痕が観察される。硯面は、陸部から海部にかけて傾斜する「落潮」が形成され、硯陰は、硯頭近くまでは、平坦に造られ、そこから平坦面を硯面と逆方向に傾斜させ、脚を削り出す。32は、茶臼の小白。石材は、凝灰岩。中央に径2.5cm程度の芯棒孔が残存する。白面は、磨耗し、目と目の間隔が一定ではない主溝4条が、副溝3～7条が残存する。8分画と推定される。33～35は、土壁片。壁土に混ざって亀裂を防ぐつなぎとする「切」である切藁が観察される。2次被熱により赤黒化する。33は、内面に藍滓が付着する。縦方向に、径約1.0cmの2本の竹類あるいは木類を束にした木舞痕が、横方向に、径約2.0cmの竹類あるいは木類を渡した間渡痕が観察される。木舞と間渡が交差する部分に窪みが観察されるため、藁縄などで結束した痕



第15圖 町60次調査 S-177出土遺物① (1~22 1/3、23~25 1/6)



第16図 町60次調査S-177出土遺物② (38 1/2、37 1/3、30・31・33～36・39・40 1/4、26～29・32 1/6)



第17図 町60次調査 S-177出土遺物③(1/4)

跡か、と推定する。壁面は、2次被熱による亀裂が著しく、全体が歪む。漆喰などの上塗りの痕跡は、みられない。34は、壁面が、鍔調整により平坦につくられる。漆喰などの上塗りの痕跡は、みられない。縦方向に、径約0.8cmの2本の竹類あるいは木類を束にした、あるいは1本の木舞痕が、横方向に、径約1.2cmの竹類あるいは木類を渡した間渡痕が観察される。木舞と間渡が交差する部分に窪みが観察されるため、藁縄などで結束した痕跡か、と推定する。木舞の間に、幅約2.5cmの断面が半円形状を呈し、木舞に沿うように縦方向にのびる圧痕が観察される。竹類を半裁し、木舞を補強したものか。35は、2面の平坦面がみられるため、壁面と柱に接した面と考えられる。平坦面は、2次被熱による亀裂が著しく、全体が歪む。漆喰などの上塗りの痕跡は、みられない。横方向に、径約2.3cmの竹類あるいは木類を渡した間渡痕が、縦方向に、径約1.0cmの2本の竹類あるいは木類を束にしたと推定される木舞痕が観察される。36は、輪の羽口。残存する先端部には、鉾滓の付着が観察されない。37は、用途不明土製品。上面・下面の両方向から穿孔し、貫通させる。両側面は、各々穿孔をおこなうが、貫通はしない。下面は、ナデ調整により平坦に仕上げる。煤などの痕跡が観察されないが、形状より灯火具かと推定される。38は、用途不明青銅製品。断面は、かまぼこ状を呈し、表面には、2次被熱の痕跡がみられる。39・40は、同形の用途不明鉄製品。平面は「L」状を呈する。上端部から、径約1.0cmの円形凸部が3.0cm程度突出する。また、39の下端部には、径約1.0cmの穿孔が両側から施される。40は、銹のため判然としないが、同様であろう。

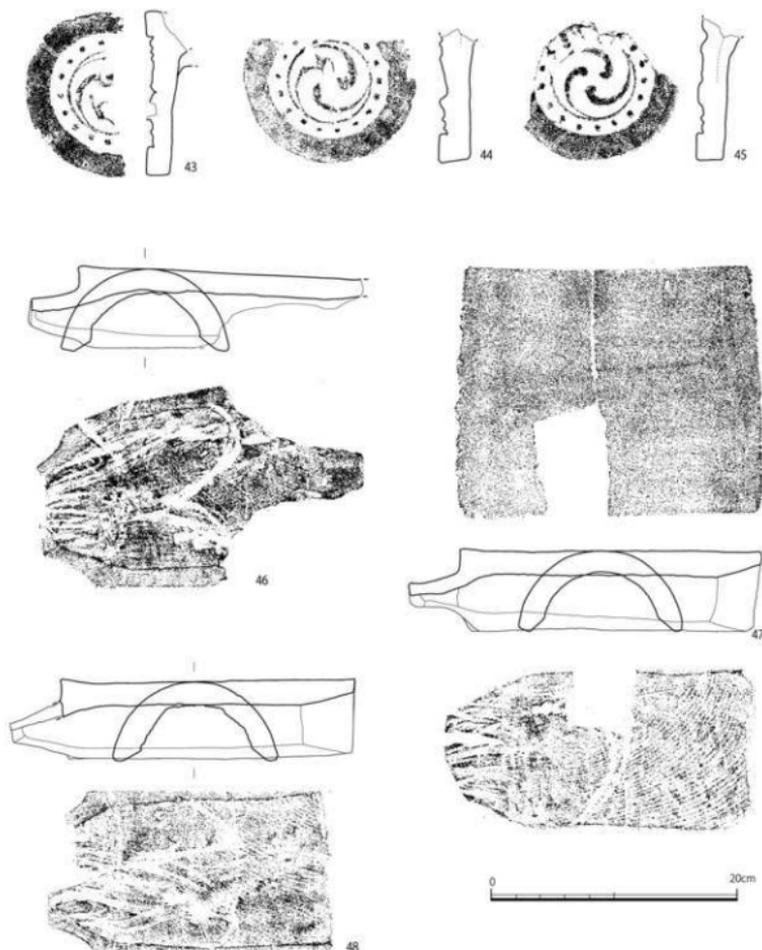
41・42は、軒平瓦。瓦当面は、「宝珠唐草文」が施文される。41・42ともに中心飾りの宝珠が不明瞭である。瓦当外縁上端面に、幅約0.8cmの面取りが、瓦当外縁下端面に、幅約0.3cmの面取りが、頸部に、凹型台座痕が観察される。頸部瓦当裏面は、ヨコナデ調整がおこなわれる。41の凹面の一部に、布目痕が残る。

43～45は、軒丸瓦の瓦当部片。型押しにより、「左巻き三巴文」を中心に「珠文」が配される。外縁の高さが0.5cmと低い。「巴文」と「珠文」の頂部は、大部分が平坦に仕上げられるが、「珠文」の一部に頂部が平坦ではなく突起するものもある。指頭圧痕により、瓦当文様の一部が不明瞭となる。44の瓦当裏面の欠損する箇所に、瓦当部との接合を強化するために施された連続する弧状の刻み目が観察される。いわゆる、「芋付け」の痕跡と、みられる。46～48は、玉縁を有する丸瓦。玉縁両側縁に面取りをおこなう。凹面に、コピキA痕跡・布目痕・「W」字状に垂れ下がる吊り紐痕が観察される。

49・50は、道具瓦。形状から敷母と考える。

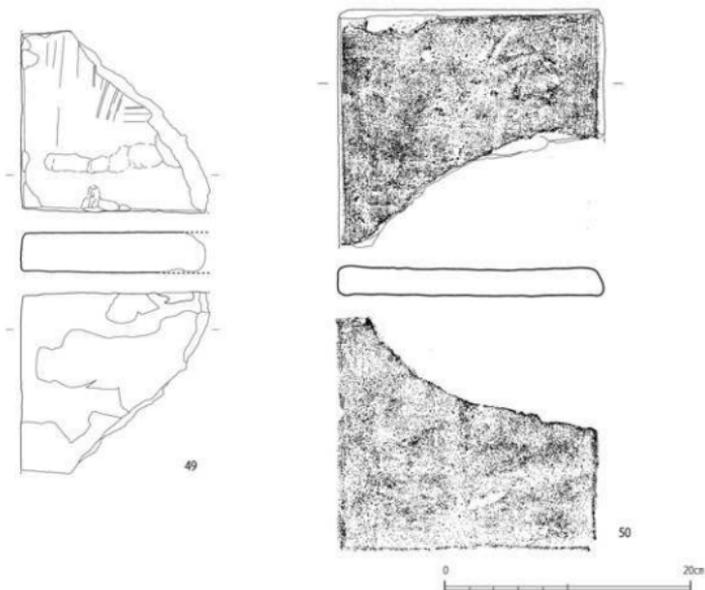
## S-178 出土遺物 (第20・21図)

1は、内面の最終調整にナデアゲが施される京都系土師器皿。埴地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。2は、景徳鎮窯系五彩碗の口縁部片。内面外面の口縁部下に、各1条界線が染付けで描かれる。内面に、「四方禪文」を、外面に「格子文」ほかを上絵具で絵付けし、再び焼かれる。3は、景徳鎮窯系青花碗の高台片。置付の軸を割く。見込みが「龍頭心」状を呈する小野分類染付碗E群に相当し、16世紀中頃に比定される。染付けで、見込みに「蛟龍文」が描かれ、高台内中央に「富貴佳器」の2行4字銘が記される。4は、中国南方褐陶器壺の肩部片。選状の耳が、縦方向に貼り付けられる。「龍文」と推定される体の一部が貼り付けられ、篋状工具で造形される。内面に、粘土紐接合痕・軸だれが、2次被熱による軸変が観察される。やや光沢のある暗緑褐色を呈する軸が施される。16世紀代に比定される愛媛県旧等妙寺跡出土の褐陶龍文六耳壺や1600年にフィリピン沖で沈没したサンディエゴ号積載品に類似がみられる。5は、朝鮮王朝産灰青陶器碗。いわゆる「雄軸」。底部から口縁部にかけて大きく、逆「ハ」字状に開く。見込み境に段をつくる。高台内・脇を削りこみ、高台は、緩い逆台形状を呈する。高台内まで施軸される。見込みと置付に目痕が、2次被熱の痕跡が観察される。6・7は、タイ産ナムノイ窯系焼締陶器四耳壺の肩部片。篋状あるいは櫛状工具により5～6条の沈線を巡らせる。横耳貼り付けの痕跡が、2次被熱により軸変が観察される。8～12は、備前焼。8・9は、大甕の体部片。8は、外面に「二石入」と推定される字が、篋描きされる。内面に、工具によるナデ調整が観察される。9は、外面に、1条の沈線と「ひ(ねり土)」ほかと判読できる字が篋状工具により刻まれる。内面は、工



第18図 町60次調査 S-177出土遺物④(1/4)

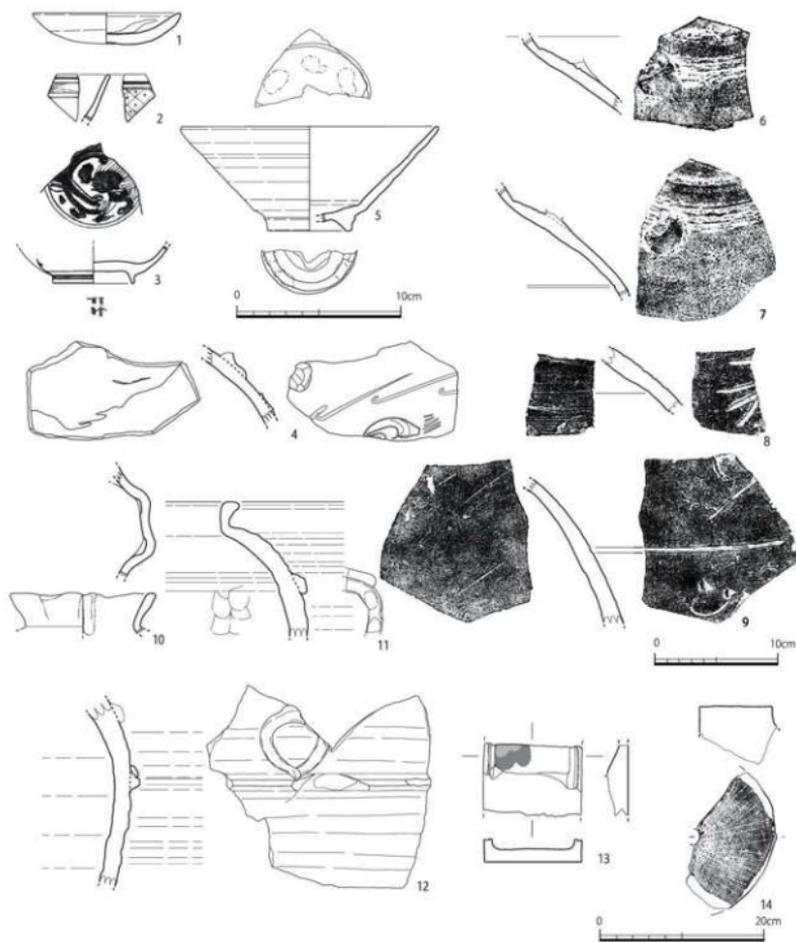
具によるナデ調整が観察される。10は、小壺の口縁部片。型押しにより、口縁部は輪花状を呈する。11・12は、水屋裏。11は、口縁部から体部片。口縁部は、肥厚し、ヨコナデ調整により、外面に稜が形成される。体部に、耳を貼り付ける。内外面に、耳を貼り付けるための指頭押圧痕が観察されるため、北野双耳 B3類に相当する。12は、体部片。1条凸帯と輪状の耳を貼り付ける。耳は、1本の粘土紐で輪を作り、表面に、ナデ調整がみら



第19図 町60次調査 5-177 出土遺物⑤ (1/4)

れるのみであり、北野双耳B4類に相当する。13は、石硯の海部片。硯材は、輝緑凝灰岩、山口産のいわゆる「赤間石」。硯側は、ほぼ垂直に切断され、硯陰は、平坦に造られる長方形硯。緑が、2段に造られる。「落潮」に、墨痕が観察される。14は、茶白の下白片。石材は、凝灰岩。白面は、磨耗し、径1.8cmの芯棒孔が、幅0.2cm程度の主溝4条・副溝5～6条が残存する。使用によって著しく摩滅した箇所の掃目が枝分かれするなど不規則であるため、掃目を刻みかえる「目立て」がおこなわれたと考えられる。

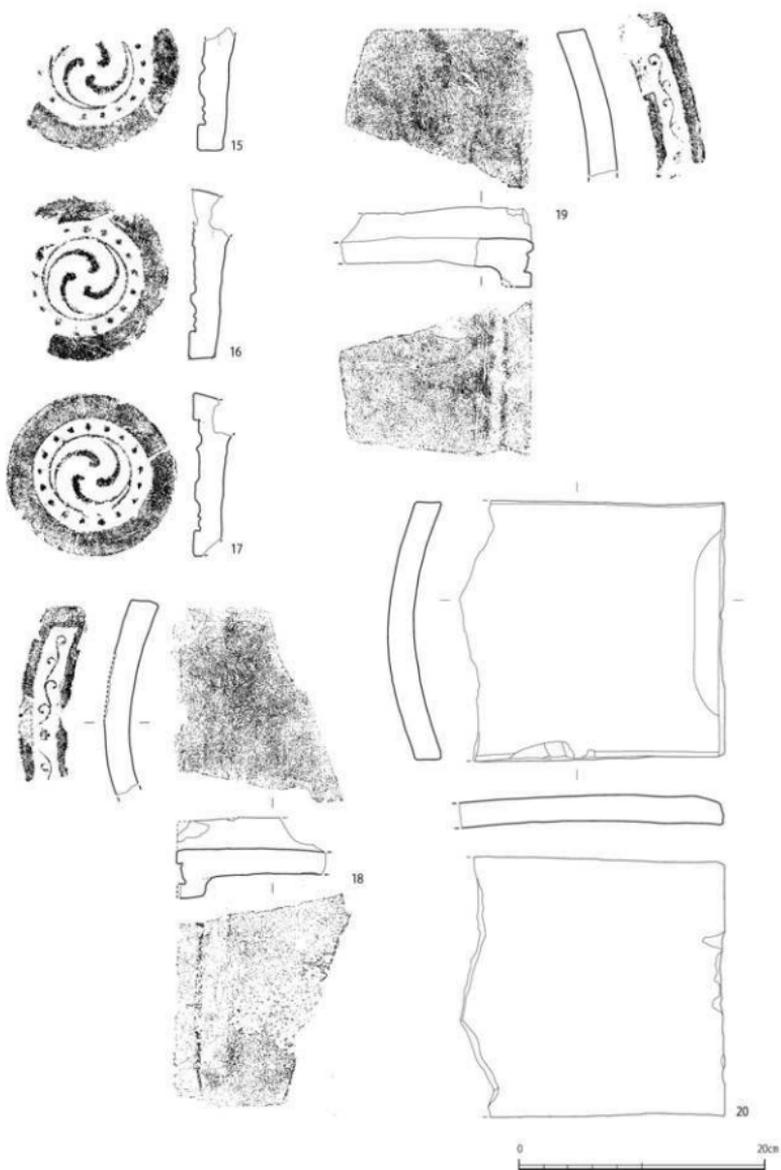
15～17は、軒丸瓦の瓦当部片。型押しにより、「左巻き三巴文」を中心に「珠文」が配される。外縁の高さが0.5cmと低い。「巴文」と「珠文」の頂部は、大部分が平坦に仕上げられるが、「珠文」の一部に頂部が平坦ではなく突起するものもある。指頭圧痕により、瓦当文様の一部が不明瞭となる。瓦当裏面の欠損する箇所に、瓦当部との接合を強化するために施された連続する弧状の刻み目が観察される。いわゆる、「芋付け」の痕跡と、みられる。17は、瓦当面の残りがよく、「珠文」の数が全部で17個と、確認できる。18・19は、軒平瓦片。瓦当面は、「宝珠唐草文」が施文される。瓦当外縁上端面に、幅約0.8cmの面取りが、瓦当外縁下端面に、幅約0.2cmの面取りが、頸部に、凹型台圧痕が観察される。頸部瓦当裏面は、ヨコナデ調整がおこなわれる。18の凹面に、布目痕・コピキA痕跡が、19の凹面に、コピキA痕跡が残る。20は、平瓦片。凹面狭端面に幅2.0cm程度の面取りが観察される。



第20図 町60次調査 S-178出土遺物① (1~5・10・13 1/3、6~9・11・12 1/4、14 1/6)

5-200出土遺物 (第22~35図)

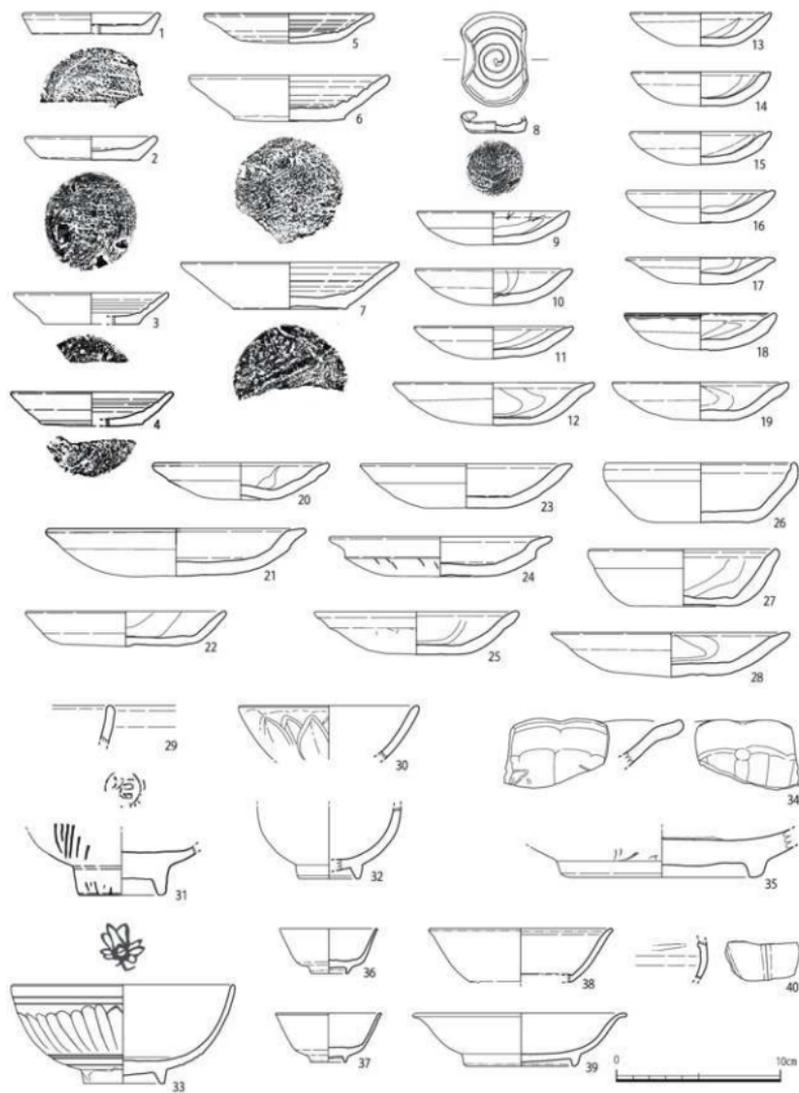
1・2は、土師器小皿。底部は、回転系切り離し。14世紀代か。3は、土師器小皿。底部は、回転系切り離し。16世紀前半。4~7は、土師器坏。底部は、回転系切り離し。いわゆる「ロクロ目」。強いヨコナデにより体部に2条以上の稜が形成される。16世紀前半。5は、底部は、回転系切り離し後に、ナデ調整がおこなわれる。8は、土師器耳皿。9~28は、内面の最終調整にナデアゲが施される京都系土師器皿。法量に大小あるが、大部分が



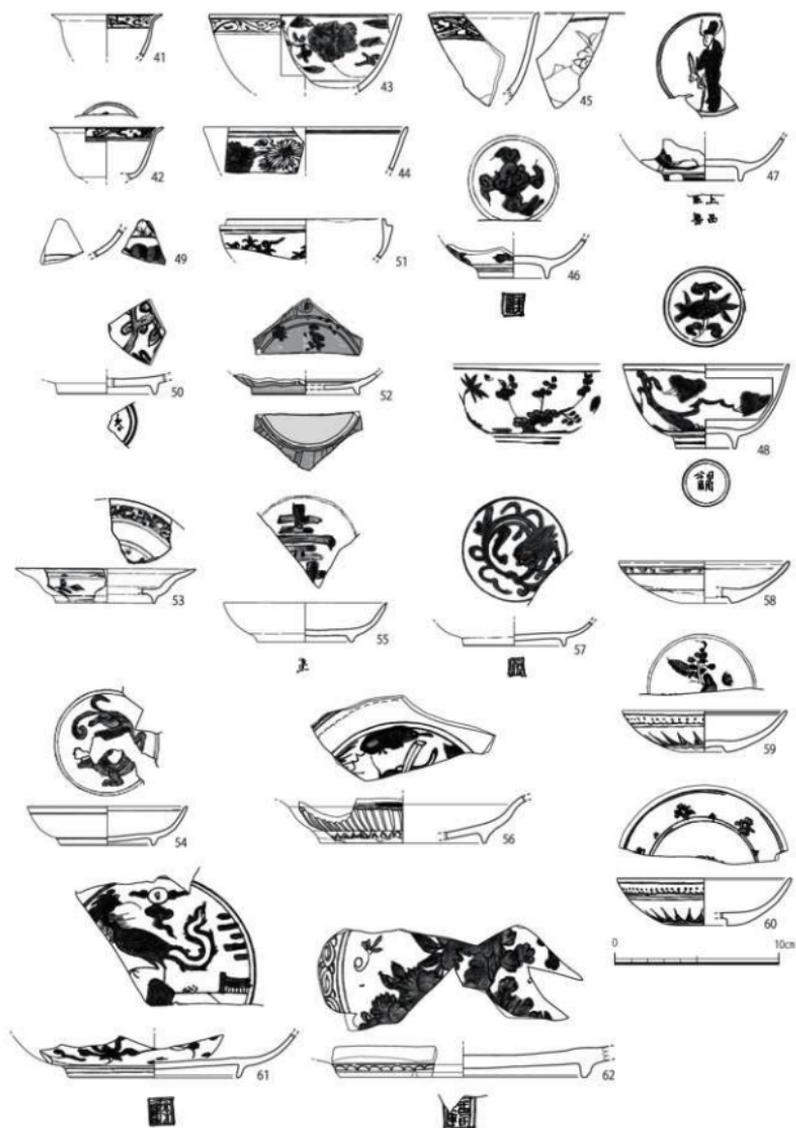
第 21 図 町 60 次調査 5-178 出土遺物② (1/4)

塩地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。13は、2次被熱により黒化する。18は、口縁部内外面に煤痕が観察され、灯明皿として使用されたと推定される。26・27は、口縁端部をつまみあげ、他の京都系土師器皿に比べて器高が高く、深い壙型を呈する。内面の最終調整に、ナダアゲを施すなど京都系土師器皿の技法でつくられる。河野「g類」のG-2類に相当し、16世紀後半に比定される。9は、口縁部内面に、24は、体部外面に、爪痕が観察される。29・32は、中国産青磁碗。29は、口縁部片。32は、体部から高台片。体部が内湾しつつ、立ち上がる。釉の発色・胎土の状況より、龍泉窯系以外の産地と推定される。2次被熱による釉変が観察される。30は、龍泉窯系青磁碗片。30は、口縁部から体部片。「鎬蓮弁」が施される。太宰府龍泉窯系青磁碗Ⅱも類と判断され、太宰府陶磁器出土傾向E期に相当し、13世紀前半以降に比定される。31は、高台片。体部に、「細線蓮弁文」が、高台に、「櫛描き線文」が施される。見込み中央に、「福」の吉祥字がみられる。上田分類青磁碗B類に相当し、16世紀前半以降に比定される。2次被熱の痕跡が観察される。33は、龍泉窯系青磁と推定される碗。体部の2条界線内に、「細線蓮弁文」が見込み中央に、「印花文」が施される。細かい貫入・ピンホールが観察される。器型および文様構成が、16世紀代にみられる青磁碗に近い。焼成不良品と考える。このような青磁碗は、「ワビ・サビ」を志向する茶道具として請来されたものか、と推定される。34は、龍泉窯系青磁碗花皿の口縁部片。湯築城青磁皿C類に相当する。35は、龍泉窯系青磁盤か。外面に、「笠描き文」が施される。高台内は、輪状に釉剥ぎをおこなう。見込みに、砂粒の付着が、高台内に、胎土融着痕跡が観察されるため、これらは、重ね焼きの痕跡と考えられる。36・37は、中国産白磁環。腰が張り、体部が直線的に開き、口縁部は、やや揃み出す。器壁が薄く、高台が細い。見込みの釉を輪状に、畳付の釉を剥ぐ。38は、中国産白磁皿の口縁部から体部片。口縁端部の釉を削り取る。いわゆる「口剥ぎ」。13世紀後半から14世紀前半に比定される。39は、景德鎮窯系白磁皿。森田分類白磁E群に相当し、16世紀代に比定される。畳付は、釉を剥ぎ、一部に砂粒が付着する。40は、中国産白磁瓶あるいは壺の体部片。内面に、接合痕が観察される。型づくりによって、縦方向の稜が形成される。形状から、瓜形水注の体部片か、と推定される。2次被熱により釉変が観察される。

41・42は、景德鎮窯系青花小環。口縁部が外反する。内面に、「四方禪文」を染付けで描く。43～48は、景德鎮窯系青花碗。43～45は、口縁部から体部片。43は、外面に、「唐草文帯」が、内面に、「草花文」が染付けで描かれる。44は、外面に「蒲公英」が染付けで描かれる。45は、内面に「四方禪文」を染付けで描く。体部に「草花文」を櫛描きし、そこに施輪により釉が溜まり、文様効果がみられる。46・47は、高台片。46～48は、見込みが「饅頭心」状を呈する小野分類染付碗E群に相当し、16世紀中頃以降に比定される。畳付は、釉を剥ぐ。46は、染付けで、見込みに「雲文」が、高台内に字款状に、推定「富貴佳器」の略字銘が記される。47は、染付けで、見込みに「貴人」・「鹿」が描かれ、高台内に「…上品…器」の2行推定4字銘が記される。48は、染付けで、見込みに、長寿を意味する吉祥文である「靈芝」が、外面に、いわゆる「三友」の「松竹梅」が描かれ、高台内に「司府公用」の2行4字銘が記される。49・50は、景德鎮窯系五彩。49は、碗の体部片。50は、皿の高台片。畳付の釉を剥ぎ、砂粒が付着する。高台内に、推定「(天)(下)太(平)」の4字銘が、染付けで記される。見込みに「草花文」を上絵具で絵付けし、再び焼かれる。高台内および見込みは、透明釉が、体部外面は、黄褐色を呈する釉が施される。51は、景德鎮窯系青花合子身片。受け部の釉を剥ぐ。外面に、推定「唐草文」が染付けで描かれる。52は、景德鎮窯系緑地金襴手稜花皿の高台片。「第5章 まとめ」にて、詳述する。53～57は、景德鎮窯系青花皿。53は、内湾しながら体部が立ち上がり、口縁部が、鐔状を呈し、外反する。内面に「四方禪文帯」、外面に「折枝文」が染付けで描かれる。形状から、16世紀後半から末以降に比定される。54・55・57は、小野分類染付皿E群に相当し、16世紀後半以降に比定される。畳付の釉を剥ぐ。54は、見込みに、「蛟龍文」が染付けで描かれる。55は、畳付に、砂粒が付着する。見込みに「壽」の吉祥字が、高台内に「正」の1字銘が染付けで描かれる。57は、高台片。染付けで、見込みに「蛟龍文」が、高台内に、字款状に「福」の吉祥字が描かれる。56・61は、景德鎮窯系青花皿の体部から高台片。いわゆる「鐔皿」。小野分類染付皿F群に相当し、16世紀末以降に比定される。畳付の釉を剥ぐ。56は、体部に、鐔状沈線が施さ



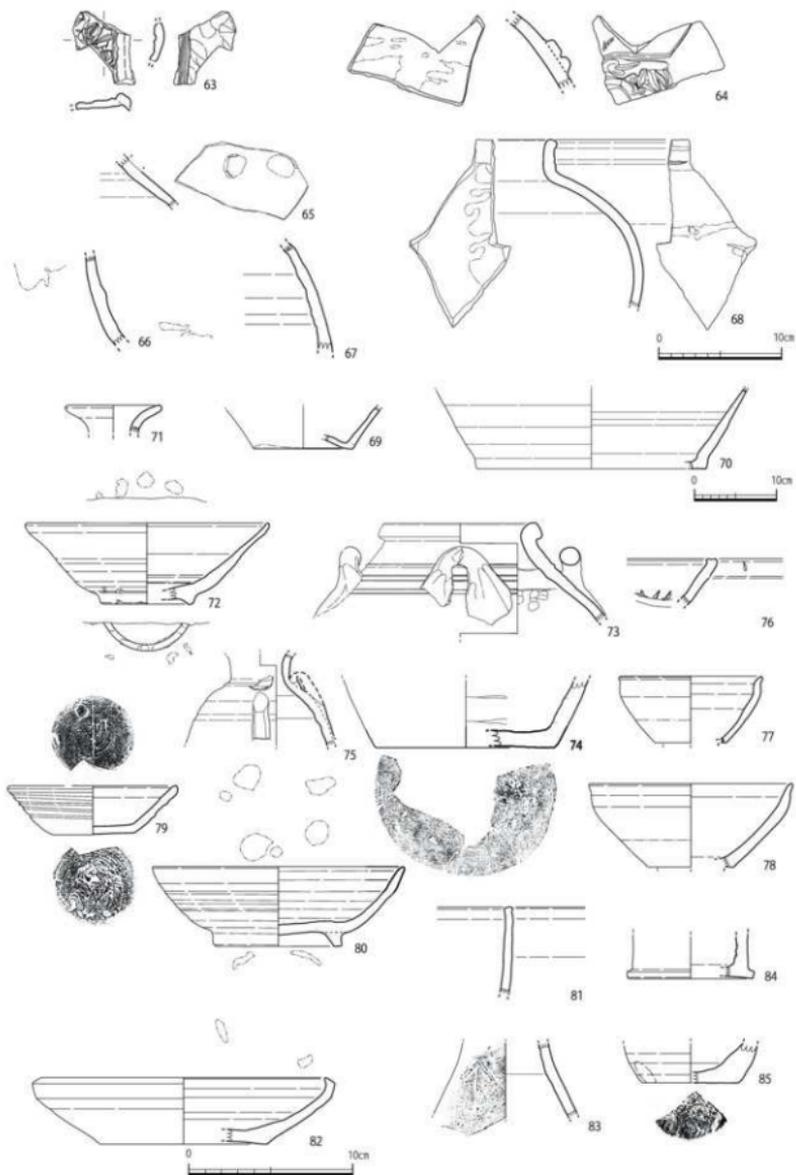
第22図 町60次調査 S-200 出土遺物① (1/3)



第23図 町60次調査 S-200 出土遺物② (1/3)

れ、見込みに、意匠不明の文様が染付けで描かれる。2次被熱による釉変がみられる。61は、畳付に、砂粒が付着する。染付けで、内面に「鳳凰」・「日輪」・「雲文」などが、外面に「唐草文」が描かれ、高台内に字款状に判読不能の略字4字銘が記される。58～60は、青花皿。底部が「鉢筒底」状を呈する小野分類染付皿C群に相当し、15世紀後半以降に比定される。58は、漳州窯系。見込みと高台内の軸を割く。高台内に、植物繊維の付着が観察される。染付けで、外面口縁部下に、崩れた推定「波涛文帯」が描かれる。59・60は、景徳鎮窯系。59は、染付けで、外面口縁部下に、「波涛文帯」、外面体部下半に「芭蕉葉文」が、見込みに「捻花文」が描かれる。2次被熱による釉変が観察される。60は、外面が59と同様の文様構成で、内面は「草花文」が、染付けで描かれる。62は、景徳鎮窯系青花大皿の高台片。畳付の軸を割く。染付けで、内面に「波涛文帯」・「果実文」・「蝶」ほか、高台内に、字款状に、推定「富貴佳器」の略字4字銘が記される。2次被熱のため、釉変がみられる。

63は、中国南方産緑釉単彩あるいは三彩陶器。いわゆる「華南三彩」。外面に、型押しによる文様が造形される。形状から、鳥形水注などの一部と推定される。64～66・68～70は、中国南方産褐釉陶器壺。64は、肩部片。外面に「龍文」が貼り付けられる。残存する龍の顔は、寛あるいは櫛状工具で造形される。体部内面に、粘土紐接合痕・釉だれが、外面に2次被熱の痕跡が観察される。16世紀代に比定される愛媛県旧寺崎跡出土の褐釉龍文六耳壺や1600年にフィリピン沖で沈没したサンディエゴ号積載品に類似がみられる。65は、肩部片。横耳が剥離した痕跡が観察される。釉調が黒褐色を呈する。胎土・釉調が、69に類似する。66は、体部片。外面に、重ね焼きの痕と推定される胎土融着痕跡が観察される。胎土に含まれる白色粒子が顕著であり、焼膨れがみられる。67は、産地不明の陶器壺あるいは甕の体部片。内面に、ヨコナデ調整による稜が2条以上形成される。胎土は、硬質で、内外面ともに施釉される。外面の釉調は、暗緑褐色を、内面は、暗褐色を呈する。68は、口縁部から体部片。肩部が丸みを帯び、頸部が短くほぼ直立し、口縁部が玉縁状を呈する。内面に横方向の釉だれが、外面に、重ね焼きの痕と推定される胎土融着痕跡が観察される。69は、底部片。釉調は、内面が褐色を、外面が黒褐色を呈する。底部は、上げ底状を呈し、露胎で、重ね焼きの胎土融着痕が観察される。胎土・釉調・形状などから、16世紀末に産絶された町3次SK025出土の上げ底状を呈する壺と類似する。70は、底部片。胎土・釉調が、68に類似する。71・72は、朝鮮王朝産灰青釉陶器。71は、瓶の口縁部片。いわゆる「舟徳利」。72は、碗。いわゆる「雉釉」であるが、釉に光沢があり、胎土も、やや磁器に近い。体部下半に、丸みをもち、大きく逆「ハ」字状に開く。口縁部は、やや揃み上げる。見込み境に、段をつくる。高台は、緩い逆台形状を呈する。高台内まで施釉される。見込みと畳付に目痕が、2次被熱の痕跡が観察される。73・74は、タイ産メナムノイ窯系統締締陶器。73は、口縁部から頸部片。74は、体部から底部片。ともに、焼成は不良で、内外面は、淡橙茶色を呈し、施釉されないことなどから、同一個体の可能性が指摘される。73の口縁部は、玉縁状に近い形状を呈し、頸部が非常に短い。肩部には、断面が三角形状となる1条の凸線を巡らせる。その下方に、4条の凹線が削り出され、横耳を貼り付ける。内面に、粘土紐接合痕と指面圧痕が観察される。高身分類2類に相当する。1587年の島津氏府内侵攻に伴うとされる町3次SX210出土一括資料に類似する。74は、体部外面に、ヘラケズリ調整が、内面に、粘土紐接合痕が観察される。底部縁部は、ヘラケズリ調整により器面を仕上げるが、中央付近は、器面が荒れる。75は、タイ産メナムノイ窯系統締締陶器双耳瓶の頸部から体部片。肩部に縦耳が貼り付けられる。「第5章 まとめ」において詳述する。76は、瀬戸・美濃産陶器鈿皿片。77・78は、瀬戸・美濃産天目碗の口縁部から体部片。口縁部が稜をつくり立ち上がり、やや外反する。軸を外面体部下半で拭き取る。概ね藤沢編年大窯第3～4段階に相当し、16世紀後半代に比定される。79～97・99～106は、備前焼。79は、環。底部は、回転系切り離し。見込みに、「|」あるいは「一」字状の窪みがおこなわれる。ヨコナデ調整により、体部外面に、2条以上の稜が形成される。80は、高台付鉢あるいは皿。体部に、ヨコナデ調整により、2条以上の稜が形成される。底部は、回転系切り離し後に、高台を貼り付ける。見込み・畳付に、目痕が観察される。81は、鉢の口縁部から体部片。筒状を呈する。82は、平鉢。底部は、やや上げ底となる。体部が底部から大きく開き、口縁部が内湾しながら立ち上がる。口縁部は、つまみ出し、強いヨコナデ調整により、上端に

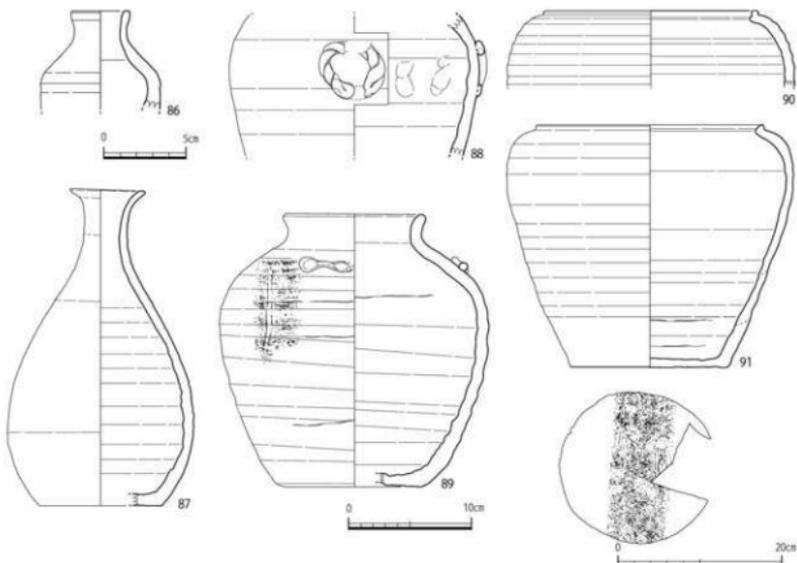


第24図 町60次調査 S-200出土遺物③ (63・64・66・67・71・72・76～82・84・85 1/3、65・68・75・83 1/4、69・70・73・74 1/6)

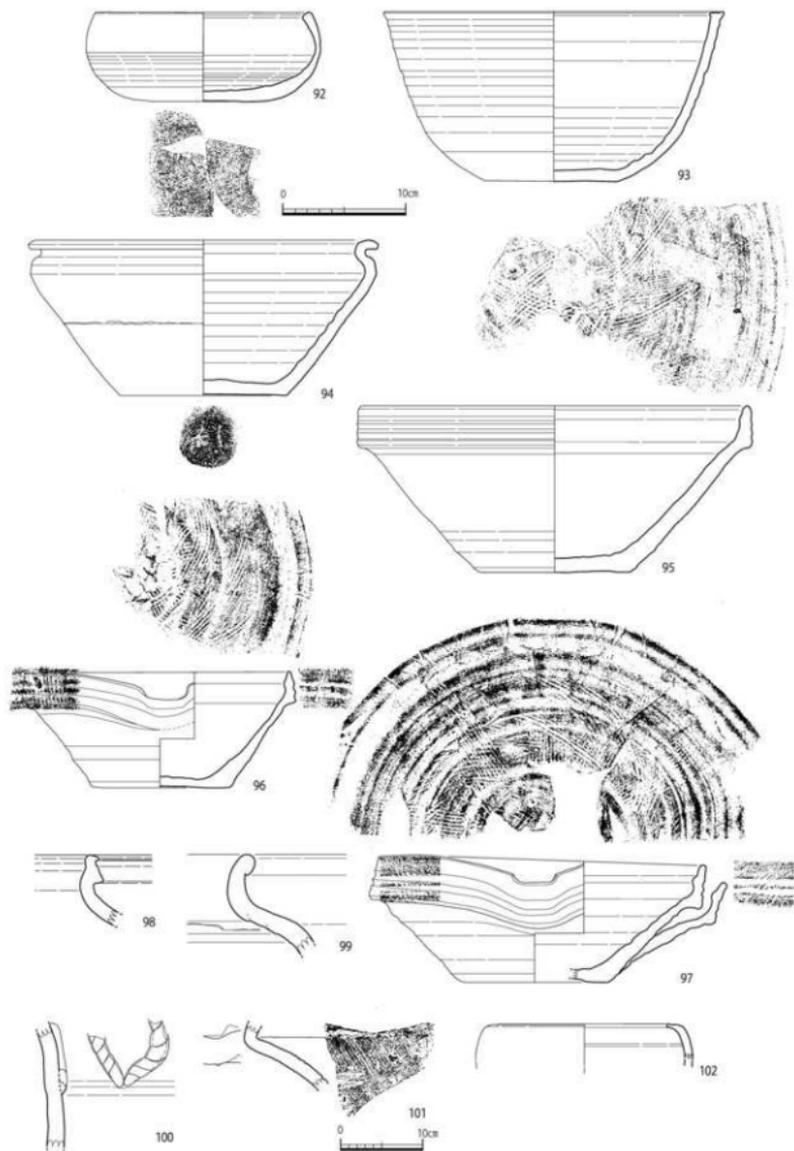
平坦面をつくり、シャープに仕上げる。16世紀を中心に操業したとされる備前焼中央1号窯（仮称）トレンチ7出土資料に、類例がみられる。83は、瓶の肩部片。肩部に、「↑」字状の記号が篋状工具で、刻される。84は、筒型容器の底部片。底部が張り出す。張り出し部の断面形状は、方形を呈する。形状などから「茶入れ」などの茶道具としての用途が想定される。85は、小壺の底部片。底部は、回転系切り離し。

86は、小壺の口縁部から体部片。87は、瓶。頸部の長い徳利状を呈する。内面に、焼成時の焼きはじけが観察される。88は、水屋裏の体部片。肩部外面に、2本の粘土紐を縫り、縄状とした耳を輪状に貼り付ける。内面に、耳貼り付けのための指頭圧痕が観察される。北野双耳B2類に相当する。89は、三耳壺。口縁部は、頸部からやや外反気味に立ち上がり、肥厚する。口縁部外面に、ヨコナデ調整により、1条の稜が形成される。底部は平底状となる。肩部の3箇所に、横耳が貼り付けられ、「|」字状の記号が篋描きされる。体部内外面に、粘土紐接合痕が観察される。湯築城備前焼壺1C-2類に相当し、16世紀前半に比定される。90・91は、水屋裏。湯築城備前焼壺B-2類に相当する。口縁部が短く、ヨコナデ調整により、内面に蓋受け部をつくり、端部を平坦に仕上げる。90は、口縁部から体部片。91に比べて、受け部に明瞭な段がみられる。91は、底部は、平底を呈し、「7」字状の記号が篋描きされる。体部内面に、粘土紐接合痕が観察される。

92～93は、鉢。92は、体部が内湾しつつ立ち上がり、口縁部は、やや肥厚し、ヨコナデ調整により、端部を平坦に仕上げる。体部下半に、横方向の強いヘラケズリ調整が施され、2条以上の稜線が観察される。底部は、やや上げ底状を呈し、中央に扇状界線内に「三」字状のスタンプが施される。窯印か。形状などから、「建水」などの茶道具としての使用が想定される。16世紀後半頃に操業したと考えられる備前焼東3号窯出土資料に、類似する。93は、体部下半が、やや内湾しつつ、口縁部にかけて大きく開く。口縁部上端を平坦に仕上げ、端部をやや摘み出す。体部に、ヨコナデ調整により2条以上の稜が形成される。底部が、やや上げ底状を呈する。形状などから、「水指」などの茶道具としての使用が想定される。16世紀後半頃に操業したと考えられる備前焼



第25図 町60次調査 S-200出土遺物④ (86 1/3、87～89 1/4、90・91 1/6)



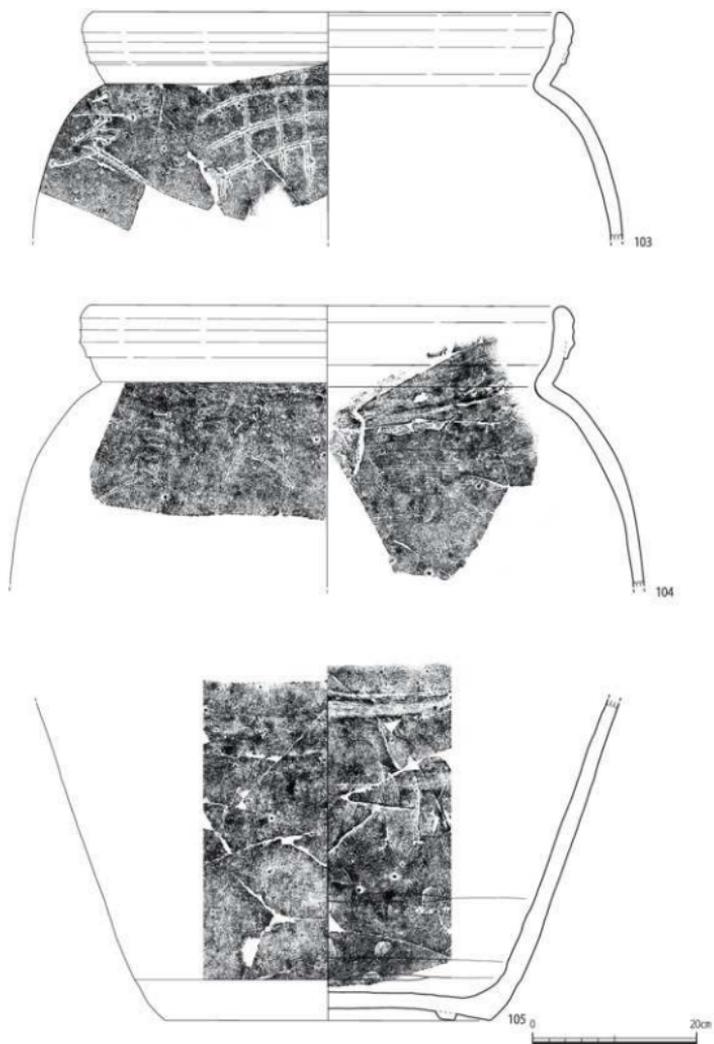
第26図 町60次調査 S-200出土遺物⑤ (92～100・102 1/4、101 1/6)

東3号窯出土資料に、類似する。94は、体部は大きく開き、肩部が張り出し、口縁部を「く」字状に、折り曲げる。口縁端部は、やや丸みを帯びる。体部内面に、ヨコナデ調整による2条以上の稜が形成される。底部は、平底を呈し、中央に、「吉」と判読できる窠描きが施される。体部外面に、重ね焼き痕跡が観察される。95～97は、鉢鉢。口縁部の形状や内面の交差模様などから、乗岡編年近世1期bに相当し、16世紀末に比定される。鉢鉢は、使用により磨耗する。96・97は、口縁部外面に、1対となる縦方向の窠状あるいは櫛状工具の痕跡が観察される。ここから口縁をやや内傾させ、突出するように、片口がつくられる。これらは、片口製作時の過程を示す痕跡と考えられる。98は、常滑産焼締陶器製の口縁部片。99は、壺の口縁部片。胎土・器型・調整から備前焼の焼成不良品と考えられる。100は、水屋裏の体部片。体部外面に、断面が三角形を呈する1条の突帯を貼り付けたのちに、その上方に、2本の粘土紐を縫り、縄状とした耳を輪状に貼り付ける。北野双耳B2類に相当する。101は、大甕の肩部片。「武石入」と推定される字が、窠状工具で刻される。102は、小壺の口縁部から体部片。口縁部を短く摘み出す。

103～106は、大甕。103・104は、口縁部から体部片。105は、体部から底部片。106は、図上復元をおこなった。頸部から口縁部にかけて、内湾しつつ立ち上がる。口縁部が上下に、長い玉縁状を呈する。口縁部外面は、ヨコナデ調整により、2条以上の凹線が形成される。体部内面に、粘土紐接合痕・工具ナデ調整・当て具痕が観察される。底部は、工具ナデ調整により、やや上げ底状を呈する。乗岡編年近世1期bに相当し、16世紀末に比定される。105の底部に、粘土塊が付着する。肩部に、103は「二石入」・「田」字状が、104は「二石入」・「人」、106は「二石入」・「井」字状が窠描きされる。

107～119は、瓦質土器。107・111・112～119は、還元焼成を指向するが、焼しをおこなわず、器面あるいは断面が橙色系を呈する。107は、壺の頸部片。108～110は、火鉢の口縁部片。108は、口縁部下の2条突帯内に、「七宝文」をスタンプによって施文する。109は、2条突帯間に「雷文」が、突帯下段に「梅花文」が、スタンプによって連続施文される。110は、口縁部下に、「車輪文」がスタンプによって施文される。111は、三脚付きと考えられる香炉。外面の口縁部下に、断面形状が方形を呈する突帯を、体部下半に2段となる突帯を貼り付け、ミガキ調整によって、器面を平滑に仕上げる。突帯内に、「双頭箆手飛雲文」をスタンプによって、連続施文する。112は、鉢の口縁部から体部片。内湾気味に立ち上がり、口縁端部が丸みを帯びる。外面をミガキ調整により平滑に仕上げる。113は、鉢。内湾気味に立ち上がり、口縁端部が丸みを帯びる。底部は、やや上げ底状を呈し、ナデ調整と離れ砂の痕跡が観察される。口縁部下の内面に、横方向の工具ナデ調整が、外面に、斜方向の工具ナデ調整が、線状に観察される。内外面をミガキ調整により平滑に仕上げる。114は、火鉢の口縁部片。口縁部を肥厚させ、上面と外面は、面取りがおこなわれる。内面は、工具ナデ調整が観察され、外面は、ミガキ調整により平滑に仕上げる。115・116は、三脚付の火鉢。口縁部内面を肥厚させ、端部上面は平坦に仕上げる。内外面をミガキ調整により平滑に仕上げる。底部に、ナデ調整と離れ砂の痕跡が観察される。117は、風炉。環状の三脚がつく。ミガキ調整により内外面を平滑に仕上げる。いわゆる、「土風炉」。堺環塚都市遺跡787地点出土資料ほかに類似する。118・119は、三脚付の火鉢。ミガキ調整により、器面を平滑に仕上げる。底部に、離れ砂の痕跡が観察される。118は、口縁部下の2条突帯内に、2個一組の「双頭箆手飛雲文」がスタンプによって施文される。内面に、工具ナデ調整と粘土紐接合痕が観察される。119は、口縁部下の2条突帯内に、連続する「雷文」が、体部下半の2条突帯内に、2個一組の「双頭箆手飛雲文」がスタンプによって施文される。

120は、土師質土器燗台。皿部見込み・台部外面・底部に、ナデ調整が観察される。見込み中央を穿孔するが、底部までは貫通しない。色調は、京都系土師器に似る淡橙茶色であり、田中分類土師器燗台B類に相当し、16世紀第3～4四半期に比定される。121は、用途不明土製品。122は、土製の埴塼、あるいは取瓶。鉾津が、内面に多量に付着する。123は、管状土錘。残存する先端部の切断面が明瞭であるため、田中分類管状土錘A類と考えられる。124は、土師質土器鍋の口縁部片。内面に、工具ナデ調整が観察される。125は、防長系瓦質土器鍋の口縁部から体部片。頸部から外反し、口縁部を内面に折り、玉縁状に肥厚させる。体部内面



第27図 町60次調査 5-200出土遺物⑥ (1/6)